

---

# 番長更屋敷

蒼の字

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

番長更屋敷

### 【Nコード】

N0955T

### 【作者名】

蒼の字

### 【あらすじ】

更屋敷修は高校生になったら自分を変えてやろうと考えていた。そして晴れて地域でも有数の進学校に入学、まったく新しい生活が始まる……はずだった。

しかし彼を待っていたのは癖のあるクラスメートや先輩達との、どこかおかしな日常であった

世の中には、どれだけ準備をしようと自分の想定外の結果になってしまうことが多々ある。よくそんな話を耳にしてはいたが、まさか自分の身でそれを体感することになるうとは考えたこともなかった。

きつかけは一人の人間と出会った、否「出会ってしまった」事だ。そこから全ては始まった。

四月まで遡る。

僕は中学時代はこれといって目立つこともない、ごく普通の生徒だった。唯一の成果は、首都でも十指に入る進学校の橙光学園とうこうがくえん高校へ合格したことくらいだ。もっとも、部活もせず友達もほとんどいなければ、勉強だけは出来るようになるらしい。自虐するつもりはなくても、なんか悲しくなってくる。

同じ中学でそこへ行くのは自分のみ。これもいいきっかけだし、今度は明るいイマドキ高校生にでもなってみようと考える思いを馳せていた。高校デビューなんて古い言葉があるが、言ってしまうえばそんなものだ。

そんなわけで来たるべき高校生活での自分を十分にシミュレートし、準備は万全だった。僕の過去を知らぬ者からすれば、それまでの人生も謳歌してきたザ・リア充にしか見えないはずだ。リア充という言葉自体、この二千年代では時代遅れかもしれないが、他の言葉は思いつかない。

しかし、完璧なまでの僕の計画は脆くも崩れ去ることになってしまったのだ。

入学式の日、私服高とはいえ一応の正装で登校することにした。校内には無難にスーツを着た姿が多い。

こりやむしろ入学式じゃなくて入社式だな、などとツツコミを入れたくなってしまう。なかには高そうなドレスを着た女の子もいる。なるほど、進学校、それも私立ともなればお金持ちの坊ちゃん嬢ちゃんもいるわけだ。

そのような学生達を横目に僕は校舎の前にある掲示板へと向かった。式典自体は体育館で行うのが通例らしいが、この学校にはちゃんとした式典用のホールがある。ただ、そこに行く前に自分のクラスに集まるようだった。

名前はすぐに見つかった。僕は一年D組だ。隣にはごく丁寧に校内の見取り図があり、教室の場所はすぐに分かった。

そのまま教室に行こうとする僕の前に、それはもう奇妙な姿があった。

百九十センチほどの長身。

厳しい顔つきと、オールバックの黒髪。

近頃はめつきり見なくなった上下の黒学ラン。

潰れてペシャンコになった学生靴、履いているのはゲタ。

なんだこいつは？

この学校においてその格好はあまりに目立っていた。いや、それどころか近くにいた人は皆……引いていた。誰もが距離をおいている。

それも当然のことかもしれない。僕自身もまた呆気に取られている。その男がいることで、その場の空気が緊張している。

マンガでは見たことあるけど、この姿って……

「おい」

と、なぜかその男に僕は声を掛けられた。

ヤバい、じろじろと見過ぎたのか？

大男は僕を見下ろしている。僕の百七十後半の身長は決して低くはないはずなのに、自分が相当小さいように錯覚するほど、男は大きく見えるのだ。

「な、なんだよ」

思わず強気で言い返してしまった。これは人目のつかないところでフルボッコか？ 喧嘩になったら勝てる気なんてしない。早くも僕の学生生活ジ・エンドか？

男の手が伸びてきた。が、それは僕の胸倉を掴むとか、殴るとかという意図のものではなかった。

「一年D組はどう行けばいい？ 地図が……分らん」

その手が差したのは見取り図の教室の位置だった。

ん、D組？

こいつ同じクラスかよ！

僕にとって一番衝撃的だったのはそこだ。どちらにしても今後顔を合わせ続けることになるんだ、この奇妙な奴と。

「ここならオレも今から向かうところさ。オレもD組なんだよ」

僕は高校生活モードで口を開く。あくまで友好的に、かつ爽やかにだ。

「助かる」

口調はとても厳格なものだ。硬派というか渋いというか、とても今風の高校生のものではない。僕らは二人教室へと向かった。

もしここで声を掛けられていなければ、僕の学校生活は計画通りに進んでいたことだろう。もっと良い物になったはずだ。

学校が始まって間もなく、その姿から彼は番長と呼ばれるようになった。もっともそこには畏怖の念はなく、ただ時代錯誤にして場違いな彼を揶揄する意味が込められていた。彼と仲がいいと見なされた僕はその煽りを受け、クラスの中で次第に浮いていったのだった。それだけならまだいい。だが、これはあくまでもきっかけであり、始まりでしかなかったのだ。

異様な方向へ進んでしまった、あまりに荒唐無稽で狂ってるかのような、僕の高校生活の

1 .

「はあ……はあ……」

走っていた、ただひたすらに。

「うわ、まだ追ってくるのかよ！」

そいつは執拗に僕を追い詰めてくる。なぜだ？ 一体僕が何をしたというのか？

「一年D組、更屋敷修<sup>（なむらやしきしゅう）</sup>。止まりなさい！」

それほど遠くない位置から女の子の声が聞こえてくる。まったく、まだ夏休みも終わって間もないつてのに早速か……

誤解のないようにしておくけど、僕は無実だ。何もやましいことなどしていない。が、どういうわけか今僕を追いかけている風紀委員は事あることに突っかかってくる。なんとまあ迷惑極まりない。

校舎内を逃げに逃げ続ける。いや、逃げるなんていうとあたかも僕が悪者みたいだ。でも確かに逃げていることに変わりはない、いや…… ああ、もうくだらん考えはやめだ。とにかく走れ、僕！

「ん、あれは」

ちょうど目の前に大きな影が現れた。身長百九十、黒学ラン姿の男などこの学校において一人しかいない。

「番長！」

声を掛ける。いや、別にそんなことしなくても良かったのだが

この学校でアイツとまともに話すのなんて自分くらいのものだし。

「どうした？」

「また追われてる。お前、なんかやらかしたか？」

「いや」

「ほんとかよ？ そんなこと言って今まで何もしでかしてなかったことがあったか？」

「む……」

そう、今僕がこんな目に遭っている原因、それは元を正せばコイツのせいだ。

思えばこれまでの約半年間、全てはこの学校でコイツと話したのが始まりだったからこそ棒に振ったんだ。

あまりにも典型的過ぎる番長スタイル。当然、登校初日にその姿だったら誰だって引くだろう。もちろん僕も例外ではなかった。

要するに運が悪かったただけだ。同じクラスだったのも、その後教室でいざ席に座ったら隣同士だったのも、二人一緒に教室に入ったせいで、他のクラスメートとなるはずの人達から旧知の仲だと誤解されたことも、そのせいでなぜか僕まで敬遠されたのも、みんなみんなただ運が悪かっただけなんだ。

もしこれが出来のいい物語だったら、僕が最初に出会うのは黒学ランの大男なんかじゃなくて、清楚系の笑顔の似合う美少女で、どういうわけか近所に住んでることが分かり順調に仲良くなっていき、桜の木の下で告白とかいういかにもな展開になるはずだ……うちの学校には桜の木はないけど。

しかしどんなに想像を膨らませたところで現実は変わらない。校内で女の子と仲良くなる、なんてことはないし、当初の計画のように友好的人間関係を築くことにも失敗した。

それどころか、番長と僕の苗字を合わせて？番長更屋敷？などとうまいコンビ名まで付けられる始末だ。正確には？番町皿屋敷？が正しいんだが、もはやそんなことは誰だってどうでもいいと思ってるんだろう。口に出してしまえばどっちだって同じだ。

「ってなわけで足止めよろしく！」

まあ一応会話が出来る以上、上手く使うしかない。一方的に振り回されるのはごめんだ。

「あ、ごらー！」

ちょうど番長が遮ってくれているおかげで距離は引き離れた。あとは……

キンコーンカーンコーン。

このタイミングでチャイムが鳴るとは。うちの学校は授業開始五分前と開始時間にチャイムが鳴る。

教室に戻らないとヤバいな……でも、どうやって？

来た道はあの女がいるから無理だ。遠回りしていくと間違いなく遅刻する。

この橙光学園高校の校舎は広い。下手をすれば並みの大学のキャンパスに匹敵するくらいの広さはあるのではないか。

校舎は学年ごとに三つに分かれており、さらにその中でクラスの学力値によってクラスの階が決められている。三つの校舎はそれぞれ連絡通路で繋がっている。

この学校の面白いところは、その校舎ごとに体育館や音楽室、職員室があるということだ。そりゃ学年につき六クラスなのだから、校舎のスペースはかなり余るはずだ。そこを学年別の特別教室として使うことで、無駄を失くしているらしい。

そのため、部活動以外で上級生と接する機会はほとんどないのだ……今みたいな例外を除けば。

今僕がいるのは三年棟。本来なら秋以降、下級生はそこまで立ち入ってはいけないという暗黙の了解がある。受験勉強を妨げないように、ということだそうだ。

しかし、無我夢中で走っていたせいで足を踏み入れてしまった。早々に立ち去りたいが、休み時間とはいえこの空間を下級生が走り回るのは忍びない。今目をつけられるのは面倒だ。

が、遅刻しないためには悠長なこと言ってられない。幸い今は二階、しかも階段の近くだ。降りてそのまま中庭を全力疾走して一年棟に戻ればギリギリ間に合うしかない。

うん、これしかない！

階段を飛び降りる。着地の際に衝撃が来たが、その程度で痛がつてはいられない。ちょうど下にいた上級生が驚きで目を見開いていが、構っている暇はない。ただひたすらに一年棟を目指して突っ走

る。

予鈴のせいで、廊下には教室へ戻ろうという生徒が多くいる。そこをかいくぐり抜けていき、中庭に躍り出る。さすがにこつちにはもう生徒の姿はないようだ。

三つの校舎棟、生徒会や各種委員会、文化部の部室のある学生会館に囲われたほぼ正方形の敷地がこの学校の中庭だ。真ん中には噴水もあり、ぱつと見はまるで公園としか思えない。

三年棟と一年棟はちょうど向かい合う形になっている。だから二年棟もしくは学生会館を通ったのでは遠回りになる。こんな時間の中庭を走っている姿は、さぞかし目立つことだろう。が、顔までは見えないはずだ。いや、見えないでいて欲しい。

なんとか一年棟に入れた。さあ、ゴールの教室はもうすぐだ。

「見つけた、つと」

その時、背後から声が聞こえた。

な、いつの間に？

違う、待ち構えていたのだ。初めから自分の行動など筒抜けだったのだ。

「おいおい、風紀委員。こんなことしたら君も遅刻だろ？」

そう、いくら風紀委員として自分を追いまわしていようと、一緒に遅刻になるのは確実だ。

「生憎、うちのクラスは自習なの。別にちょっと遅れて教室に入つたところで大したお咎めは受けないわ。委員会活動のため、って言えばね」

得意げに説明する。まったく、委員会ってズルいよな。

「土岐野、オレは咎められるような事はしていない。無実だ」

「そう、あくまでシラを切るつもり。分かったわ」

「いや、だから……」

ダメだ、聞いちゃいない。そもそも僕は追われる理由を知らないのだ。だが、何らかの犯人だと決めてかかっているのはこの様子から間違いない。

「購買のジャムパン盗んだの、あんたでしょ？」

「へ……」

待て待て、今日は購買にすら行ってないぞ、僕は。というか、ジャムパンの一個くらい普通に買うわ。

「とぼけないで。大柄で目立つ格好の生徒に気圧されてる隙に、パンが一個減ってたって言うのよ」

「どうしてそれだけで盗まれたって思うんだよ？」

「購買は収益をしっかり数えてるのよ。売上と商品の個数が違うと見ただけで分かる。あのおばちゃんもかなりのベテランだし」

「根拠ってそれだけか？」

「そうよ。その購買のおばちゃんをして圧倒させたってんなら一人しかないわ。それも一年購買よ、アンタの相棒しかないわ」

「だからってなんでオレが盗んだことになるんだ？」

さつきからこの女の言ってることは無茶苦茶だ。そこまでして犯人に仕立て上げたいのか。

「さつきから質問ばかりね。まあ、いいわ。アンタの相棒が注意を引いてるうちに、すかさず棚から取っていった、それが自然！」

「全く自然じゃないから！ つーかオレ、購買行ってないから」

「どうかしらね。それを証明出来る人、いる？ いないわよね。友達いなそうだし」

「う……」

また痛いところを。この女、いつもこの調子で突っかかってくるから始末が悪い。

キーンコーンカーンコーン

二度目のチャイムが鳴り響く。ああ、これで遅刻確定だ。くそ。

「アリバイがない以上、やっぱり犯人はアンタなのよ、更屋敷修。」

さあ、観念なさい」

ああ、もうどうにでもしてくれ。

その時、新しい足音が近づいてくるのが聞こえた。この時間だから先生か？ いや、職員室から教室へ向かうとしても、今いる通路

は通らないはず。

迫力ある姿がそこにあつた。番長だ。

なぜだ？ 普通なら既に教室にいるべきなのに。

「さつきはよくも邪魔してくれたわね。全く、おかげでコイツに追いつくのに手間取ったじゃないの」

土岐野は怒りを露わに番長を見上げる。が、鋭い目で静かに見下ろす番長とちょうど目が合い、委縮してしまっている。

番長は無言で手を伸ばす。何をする気だ？

「……っ！」

怖さのあまりか、土岐野は目を閉じてしまった。が、彼女の身に何かが起こるわけではない。

「ん、これは？」

彼女に差し出されたのは一枚のメモだった。

「購買からだ」

番長はそれだけ言葉にし、土岐野に背を向けて教室へ去っていった。

そのメモにはなんて書いてあるんだ？

気になったので僕も覗いてみた。

「なになに、『風紀委員のお嬢ちゃんへ。ごめんね、棚のちょうど陰になつてるところにパンが一個だけ落ちちゃってたみたい。計算は合つたから大丈夫よ。変に騒がさせちゃったから、今度好きなパン一個サービスしてあげる。あ、そうそう、このメモ頼んだ子、うちの常連でね、困つたところ通り掛かつたから頼んじやつたの。いい男ね、彼』……ってこれ、おばちゃんの早とちりだったってことじゃなかよー！」

これには驚いた。ってか最後の一文余計だろ、おばちゃん。

「え、じゃあ気圧されてるように見えただけで、実は普通に話してた……いや、あの様子は、うむむむ……」

どうやら土岐野は混乱しているようだ。自分の間違いを認めたくないのだらう。そんな意固持にならなくてもいいのに。

「ふん、いいわ今日のところは見逃してあげる。今度何かやらかしたら容赦しないわよ！」

いや、見逃すも何も、僕は悪いことしてませんから！　と言いつ返す間もなく彼女は足早に去っていった。

土岐野愛沙ときのあいさ、ボブカットのような黒髪に眼鏡、それにOLっぽい服装をしているからか真面目に見える。実際に真面目ではあるのだろうか。

化粧っ気はないが、顔立ちがいい。といっても、あの性格もあつてか男からは近寄りがたい、というより半ば変人のように思われている節がある。

半年間での彼女の印象とはこの程度のものだ。クラスも違うから、普段の様子はあまり耳に入ってきて来ない。追いかけて回されたり、顔を合わせたら嫌味を言われるのが彼女との主な関わり方だから仕方ない。

ひとまず窮地を脱することに成功した。遅刻とはいえ、ペナルティは重くはないはずだ。

そう思ったが、時間割を頭の中で確認すると、運の悪いことに次は数学だった。

これは非常にまずい。

まず、僕は数学が大の苦手だ。よく入学試験で及第点を取れたなというくらいのもので、入学後は平均点を超えたことなんてない。

橙光学園、一般的には橙学と呼ばれるこの学校のテストがいくら難しいとはいえ、これは褒められたものではない。その上、数学教師の江崎は根性が悪い。小テストも含め、点数が悪い生徒、遅刻や欠席をした生徒は授業中にさんざんなじってくる。

解ける問題ではなく、高校数学を遥かに超えた定理の証明を求めてきたりすることからその夕子の悪さは理解できることだろう。このまま教室に入れば、僕は間違いなく公開処刑だ。

今までこの数学教師の魔の手を逃れた者は一人しかいない　あの番長だけだ。

アイツはあんな風に見えて、理系科目は驚異的なくらいに出来る。一年の理系科目の学年トップには番長の名前が載ってる。それも入学当初のテストからずっとだ。

ただ、本人の授業態度はいいとは言えない。突然教室から飛び出したり、モバイル型パソコンを開いて真剣に何かやってたりと、好き勝手やっている。

そんなことをしてはいるが、それは人助けのためだった。なんでも、当人は困っている人を放っておけない性分らしい。見かけによらずいいヤツではある。

残念なことに、その見た目のせいで損をしているのだが、本人に自覚はないようだ。だからこそ、頭の中では「実は結構いいヤツ」だと分かっているのに、未だに対応に困ることが多い。

さつきみたいに風紀委員に追いまわされるのはもう日常茶飯事だ。まあ土岐野の一方的な思い込みのせいであるのがほとんどだが、それでも面倒に巻き込まれていることに変わりはない。

番長より僕の方に真っ先に向かってくるのは、多分僕の方が弱そうだからだろう。そりゃあんな無口で長身の強面に突っかかるなんて、よっぽどの度胸がなければ無理だ。僕だったら目が合った瞬間に逃げだす。

だから未だにほとんどの生徒がアイツを避けるのは理解出来る。目立ち過ぎるのだ。いくら私服校でみんなそれぞれの服装に身を包もうとも、結局のところ異端者は弾かれてしまう。

今になって実感する。中学までの目立たなくても普通の生活が良かったと。自分も今や異端者扱い……当の番長の付属品程度の認識だろうけど、そんな風に見られてしまっているのだ。

まあ、もう何を考えても仕方ない。

今みたいに面倒事の後にはこんな事を考える。その度に出る結論も同じだ。果たして卒業までにあとどれだけ繰り返し返すのだろうか。

次の数学の授業に憂鬱感を覚えながらも、僕は教室のドアを開けた。

2 .

案の定、と言うべきか。教室に入った瞬間黒板の問題を解答させられた。当然分らない。何やら三角比の問題であることは分かるが、今まさに習おうとしている問題を答えるなんて無茶だ。

「おいおい、予習やってりゃ出来んだろこんくらい」

嫌味が飛んでくる。いや、周りよく見てください先生。誰も共感してません。

それからも二言三言ねちねちと言われたが、そこは聞き流したためあまり覚えていない。

「おっと、お前も遅刻だったよな？」

江崎の視線の先には番長がいた。これまでどんな無理難題を出そうとも、番長は容易く答えてきた。そのせいもあってその視線は敵意に満ちている。

「鬼ヶ島、今から出す問題に答えてみる。出来たらこのまま今日の授業終わらせてやつてもいいぞ」

江崎はにやり、とやらしく笑った。既に勝利を確信したかのよう

に。

黒板に書かれたのは次のような問題である。

次の不等式が存在する場合、

$$x a - y b = 1$$

$$x , a , y , b < 1$$

上記を満たす自然数解の組み合わせは

$$x = 3 , a = 2 , y = 2 , b = 3 .$$

だけであることを証明せよ。

後になって知ったことだが、これはカタラン予想という二十一世紀になってようやく証明された問題だ。

そんなものは高校生が知り得るはずもなく、これは番長を屈服させるための完全な嫌がらせだった。これはどう考えても教師の方が大人げない。この江崎という教師の器の小ささが分かるというものだ。

番長は立ち上がり、江崎のいる教壇へ真つすぐ向かっていく。教室内は一瞬の静寂に包まれた。

江崎に殴りかかるのか、とおそらくこの教室の人間は思ったはずだ。正直、これは殴ってもいいと思う。停学処分にはなるだろうけど。

「な、なんだ？」

近づく姿に、教師は動揺しているようだった。自分から喧嘩をふっかけておいて、何をビビってるんだ？

次の瞬間、僕もそうだがほとんど皆が、番長が教師を殴り飛ばすと予想しただろう。が、振り上げられた手の中には……チョークが握られていた。

番長は勢いよく黒板に向かって何かを書き綴っていく。それは江崎の出した問題に対する解答だった。

唖然としたのは、生徒だけではなかった。江崎もまたその様子に口をあんぐりと開けている。

「……これでいいか？」

一言だけ江崎に向けてぼそつと呟くと、番長は自分の席へと戻っていった。

黒板は番長の書いた証明で埋め尽くされている。正直、それを理解出来る者は教室内にいないだろう。

江崎はその目を見開き、ただ茫然としていた。きつと、出したのはいいが本人は答えを調べていなかったのだろう。

「き、今日の授業はこれでお、終わりだ！」

吐き捨てるようにして江崎は教室から出て行った。生徒に負けた

のが悔しかったのだろう。そもそも教育の場で生徒を貶めるとい  
のは筋違いだと思うが。

授業も早く終わってしまったため、十五分ほどの時間を持て余す  
ことになった。

「なあ、番長。なんで江崎のヤツの問題解けたんだ？」

あんな見たことのない問題をすんなりと解いてみせたんだ、不思  
議に思うのが当然というもの。

「知っていたからだ」

「いや、そりゃそうだろうけどよ」

とはいえ、口数の少ないこの男にしつこく聞くのも意味がない。

きつと興味本位で論文なり何なりを読んでいたのだろう。そうい  
えば、以前フェルマーの最終定理がどうかという本を教室で真剣に  
眺めていた気がする。

教師を退けたことで、教室では本来なら英雄扱いになるはずであ  
る。が、コイツの場合はやったことが凄過ぎてかえってクラスの人  
たちをドン引かせた。何かあるとこの調子なため、未だにクラスに  
馴染んでいない気配がない。

それは僕も同じか。

一応顔を合わせれば話くらいは出来る、一言で終わってしまう場  
合が多いけど。陰では僕もいろいろ言われているらしいが、それ  
も今のところ学校生活に致命的なほどではない。

でも違うよなあ。

四月に高校デビューに失敗し、春休みにイメージした華やかな高  
校生活はただの夢と化した。それでも、一応高校用に創り上げたキ  
ャラクターで表向きは今も通している。きつと、まだ諦め切れてな  
いのもかもしれない。

二学期、この学校は二学期制なので後期と呼ばれているが、始ま  
ってまだ数日。来月には学園祭もある、まだまだイメージは覆せる、  
そんな希望が僕にはあった。

十月なのに後期始まってすぐだというのは、この学校の夏休みが

九月の一ヶ月間だからだ。なんでも、二学期制で八月を休みにするより調整がしやすいらしい。おかげで夏真っ盛りの中、学校に来て勉強させられたのだ。

その分、休みの間はどこも人が少ないため、遊び好きにはありがたい限りだ。残念なことに僕にはさほど友達はいないけど……

何度か作楽先輩に付き合わされたくらいだが、あの人もなかなか癖がある。と、言うより番長よりもタチが悪い。ん、ひよっとして僕の周りの人間って変わってる人多くないか？

番長は言わずもがな、土岐野も正直まともとは言い難い。加えて作楽先輩だ。どうやら僕にはその手の人を引き付ける何かがあるようだ。初めて知ったよ、ほんとに。

ひよっとしたら、僕も変人認定を受けてるのかもしれないな。類は友を呼ぶってやつか？

それは勘弁してもらいたい。

3 .

「よう、少年！」

放課後、正門へと歩いている途中で声をかけられた。

「なんですか、作楽先輩」

真正面には、活発そうな背の高い女性がいる。この人が作楽先輩だ。

「なんだい、用が無きゃ声かけちゃいけないみたいな言い方しちゃうてさ」

「普通、用がなきゃ声なんてかけないでしょう？」

「ヒマ潰しつてこともあるんじゃない？ あたしの場合、基本的にそれだけだね」

なぜか両手に腰を当てて得意げになっている。いや、先輩威張るところじゃないっすよ？

「……つたく、それに付き合わされる人間の身にもなって下さいよ」

「いいじゃないか、かわいい女の子と一緒にいれるのは男としては嬉しいもんじゃない？」

「いや、自分で言いますかそういう事」

確かに、先輩は可愛いと言って差し支えない。ただ、バスケットに入っているとはいえ、いつもタンクトップにジャージを羽織って、ハーフパンツにスニーカーという出で立ちでは魅力も何もあつたもんじゃない。

「おや少年、それはあたしがかわいくないってことかい？ あーお姉さんシヨックだよ。後輩に真正面から自己否定されて……傷付くなあ」

両手で目を抑えて泣く……フリをする。先輩、嘘泣きだつてバレバレですから。

「冗談ですよ、先輩。かわいいですから、顔上げて下さいよ」

「ははは、やっぱりそうか、いやあキミはよく分かってるよ、うん」  
一変して満面の笑みを浮かべている。忙しい人だ、まったく。

「……で、こんないつもの挨拶みたいなやり取りはいいとして、何ですか？」

「なんだい、せっかく面白かったのに」

「面白いのは先輩だけです。こっちは全然面白くありませんから  
そう、なんだかんだで学校内で先輩と会うところというやり取りから始まるのだ。ここまでの長い会話が「こんにちは」みたいなものだ。」

「つれないねえ、少年。そう、キミ今日の昼休み元気に校内駆け回ってじゃないか？ 今度は何やらかしちゃったのさ？」

「オレは何もしてませんよ。ただ、購買部のパンを盗んだ容疑で風紀委員に追われてだけです」

「なるほどなるほど、貧乏だからってそんなことしちゃ駄目だよ」  
「だからしてませんってば！」

先輩はずっと豪快に声を出して笑っている。こっちはおかげでまともに昼食もとれなかったというのに。

「はいはい、まあ大変なんだなキミも。二年棟のあたしんとこまで来れば匿ってやつても良かったのに」

「……なんかオレがやったこと前提で話が進んでるんですけど。いや、さすがに先輩にまで面倒かけたくはありませんから」

実際はこの先輩に自分からは関わりたくなかったからだ。この人と僕と土岐野の三つ巴とか、想像しただけで力オスだ。おそらく会話にならない。

「そうか。感心するなあ、若者よ。そうやって自分の力で頑張るところで道は開けるのだ！」

ビシッと先輩は僕を指差す。

「確かに自分の力で頑張らなきゃ駄目、ですよね……はあ」

現状を変えるにはそりゃ自分の力じゃなきゃ駄目だろうさ。理想

の学校生活を送れるようにするには、ね。

「あれ、いきなり塞ぎこんでどうした？ 辛いことがあったらお姉さんが相談に乗ったげるよ」

「いや、何でもありません。ちょっと別のこと考えただけですから相談してどうにかなる問題じゃないんだ。一度人の頭に焼きついたイメージというのはなかなか変えるのは難しい。それに先輩の場合、本人にそのつもりはなくとも余計僕のイメージを悪化させるようなことをしかなない。」

「そかそか、まあ気が向いたらいつでも言っておいで」

ぼん、と背中を叩いてきた。こういうところだけは頼れる先輩、って感じなんだけどなあ。

「あ、そういえばキミの大きいお友達は元気かい？」

「先輩、その言い方はあまり適切じゃないと思います。間違っではいませんですけど。ええ、いつもしかめっ面ですが元気ですよ」

なぜかこの人は番長ともそれなりに交友がある。三人で顔を合わせたことは今のところないが、どうやら番長ともたまにこうやって話しているらしい。

「それは良かった。前にあの子と話したとき、なんか悩んでるみたいだったからさ」

「悩んでる、アイツが？」

それは知らなかった。と言うより、基本的に表情も口調も変わらない番長の感情の変化なんて、僕にはあまり読みとれない。

「なんだ、いつも一緒にいる割には気づいてなかったんだな。すっごく真剣に考え込んでたよ」

まあ、アイツはいつも何か考え込んでるような顔はしてるけど……え、それって深い意味があったの？

「アイツが悩むなんて。今日だって数学の江崎に意味の分からない問題出されても平然と答えてたつてのに」

「それと日常的な悩みは無関係、だよ、少年。あの番長君も、ああ見えて案外普通の人間なのかもよ？」

「アイツが……普通？」

意外だ。先輩の事だから、てつきり変わり者だつて捉えているのかと思つた。

「そう。あんな凶体で真面目気質で番長ルックだから人から理解されないだけつてことよ。人は中身、つてな」

「人は中身、か」

僕は先輩を誤解していたのかもしれない。この人は表面的なもので人間を判断してなどいないのだろう。ちよつと見直した。

「そう。あたしから見たらキミの方が変わつてるよ。なーんでキャラ作つてまでカツコつけてるんだい？」

「え、オレは別にこれが素ですよ」

「ウソだな、目が泳いでる。まだまだ甘い甘い。そんなんじゃあたしの目は誤魔化せないつての」

僕は思わず動揺してしまつた。まさか、この先輩に見抜かれていようとは。完璧なキャラ作りのはずだつたのに、ちゃんと研究したのに。

「少年、キミの演技は確かに完璧だ。でも、相手があたしだつたてのが運の尽きさ！」

先輩は勝ち誇つている。なぜこの人はこうも簡単に人の内面を見抜けるというのか？

「なぜ、つて顔をしてるな。よろしい、教えてしんぜよう。あたしは自慢じゃないけれど、人を見る力が優れている。なぜならば、私は――」

その後の言葉に一瞬僕はぽかんとしてしまった。

「人が大好きだからさ！」

うん、分かる。そりゃあ嫌つてほどに。

「そう、あたしは人が好きなのさ。だから自分から人と関わり、心の中まで土足で入り込み、そして弾かれる。でも決してめげない。それでも人が好きだからだ！」

先輩が熱心に語る。そういう一方的な好意は拒絶されますつて。

「だからみんなあたしの事を好きになる。これも自慢じゃないが、あたしは友達が多いぞ。みんな声をかけたら答えてくれる。初対面でも話せば友達さ。その証拠に皆あたしに羨望の眼差しを向けてくれている」

先輩、それは羨望ではなく憐憫れんひんの眼差しだと思いますよ。

「あたしはその期待に応えなければいけない。だからこそたくさんの人と関わり、その人を知ることであたしは自分という人間も磨いてきたのだ」

「は、はあ」

その結果がこれですか？ というか、基本的に先輩人の内面を一切理解出来てないじゃないですか。

前言撤回、やっぱりこの人駄目だ。

この後もなんだかいろいろ熱く語っていたが、ほとんどスルーしたのであんまり覚えていない。

「と、そういうわけであたしは男だろうと女だろうと……ありゃ、少年何をそんな冷めた目をしているんだい？」

「先輩、話長いですよ」

「ああ、ごめんごめん。つい熱くなっちゃうのがあたしの悪い癖さ。てへ、と舌を出す。その顔は可愛いのに、本当に勿体ない。この性格がなく、身だしなみに気を遣えば間違いないなく学園祭のミスコンで入賞出来るだろうに。」

「そういえば、部活はいいんですか？」

「うん、今日は休みだ」

「あ、そうなんですか」

「本当はあるんだけどさ。ちょっとキミを見つけたから休むことにしたんだ」

「あるんじゃないですか！」

一応女子バスケット部はそれなりに実績のある部のはずだ。それなのにこんなサボってこの人は大丈夫なのか？

「問題ないのだよ、少年。なぜなら私が部長だからだ」

「余計ダメだと思っんですけど」

「部長権限でどうにでもなるのだよ。それに、あの部であたしより上はない」

「文句言われないんですか？」

「言われやしないさ。それに皆なんだかんだで優秀だから、あたしがいなくても自主的にやっっているはずだよ」

「へー、さすがはバスケット部ですね」

「気になるのはあたしがいるとみんなやりにくそうだってことなんだよな。なんか空気が重くなるっていうか……まあ適度な緊張感、つてやつをあたしが作ってるのか？ 部長だし、そのくらいの威厳があるのはいい事だと思うんだけどさ」

先輩、単純にあなた良く思われてないだけですって。なんか部活休んでも咎められない理由が分かった気がする。つてかなんでこの人が部長やつてんだ？

「でもま、今度の秋の大会もいとこまでいけそうだから良しとしよう、うん」

「まあ応援してるんで頑張ってください」

適当にエールを送ってみる。もっとも先輩は僕と同じでまず人間関係を頑張った方がいいのだろうけど。

「ありがとうよ少年！」

「あ、それと先輩」

「ん、どした？」

「そろそろ少年って呼び方は勘弁して下さいよ」

やたらと年上ぶってるが、実際のところ一歳しか変わらないのだ。あまり子供扱いされるのは好きではないので、先輩にはいつも辞めるよう言っている。

「いいじゃないか、事実だしさ。あたしの方がお姉さん、なんだし」「一歳しか変わらないじゃないですか。それにオレは少年って見た目じゃないと思っんですけど」

外見は同世代の中では大人びている方だ。あの番長は例外扱いに

して、背も百八十近くはあるし、そこそこに一般常識もある。礼儀作法も恥ずかしくない程度には身につけている。

「見た目の問題じゃないのだよ、キミはまだまだ中身が幼い。だから少年って呼んでいるのさ」

「どついうところが幼いつていふんですか？」

「そうやって語気を強くしてるところ。落ちついているようで、感情に流されっ放し。おまけに自分を作り込んでそれが誰にも気づかれてないなんて思い込んでる。そういうところが幼いんだよ、分かったかな？」

先輩が顔を覗きこんできた。この人は他人と目を合わせても恥づかしさなど感じないみたいだ。おかげで僕は自分の内面を見透かされてるようで、自分の方から目を逸らしてしまった。

「ほら、やっぱり。もう少し成長したら名前で呼んであげるよ。せめてあたしにビビらないようになつたら、ね」

「び、ビビってるわけじゃありませんよ」

とはいえ、説得力はない。事実、先輩にはこれ以上反論しても勝てそうになかった。

「ぶ、ははは」

突然先輩が吹き出した。

「いやいや、かわいいな少年。ごめん、いじめ過ぎた」

「……は？」

「いやー、やっぱりキミは素直だからからかうと面白くつてな。まあ、キミが一番幼いのはそこなんだけど。いつもいつも同じようなリアクションをしてくれるから、お姉さんは楽しいよ」

「あ……」

そうだ、このやり取りも初めてじゃない。「少年と呼ぶな」と言っただ後は毎回この流れなのだった。

それを忘れるとは……

「そう、いつもキミは同じなのだよ。あたしの期待を裏切った時、初めてキミは成長する。今のままじゃ、難しいだらうけどな、少年」

先輩はまだ笑っている。くそ、またやられた。

「その点、番長君はさすがだよ。一切からかつて動じない。ちょっとつまらないくらいさ、こっちとしては。まあきつと彼は真面目なだけなのかもしれないけどね」

「ここでアイツを引き合いに出すんですか」

「それだけ彼の方が大人つてことだよ。周囲の人がなんと言おうと彼の友達であることは誇りなさい。いい出会いだっただのだから、な」と、先輩はウインクをする。

とんでもない、僕はあいつのせいで……

「でも……」

「結果はすぐに出るものじゃない。お姉さんを信じなさいな」

いや、信じられないって。

僕はこの人が分からなくなってきた。基本的には一方的に自分の言いたい事を言うだけ。相手の迷惑も顧みずに。

でも、今みたいに全うな事を伝えてきたりもする。この人はただの変人なのか、それともこの態度は演技で本当はとても鋭い感性と知性を持っているのか。そうだとしたら、僕はこの人には敵わない。「あたしとしては二人がそのまま仲良くなって、めくるめく夜を共にし、そして……な展開が理想なんだけどさ」

うん、考え過ぎだ。やつぱりこの人はただの変人だ。

「あ、言うておくけどあたしはBし好きとかじゃないよ。ただ単に人間はみな男女関係なく愛を育めばいいと思って……」

「あ、先輩それ以上言わなくていいです。なんかちよつとあれな言葉が出てきかねないので」

もう呆れるしかない。でも、今度この先輩と顔を合わせたら同じようなやり取りをまた繰り返すのだろう。そろそろ先輩との会話をメモする習慣つけないと、また同じようにからかわれるな。

「ま、子供のキミには刺激が強すぎる、か」

「だから子供扱いしないで下さいよ」

なんかこのままだとまた話がループしそうだ。ここは大人しく切

り上げて帰った方がよさそうだ。

「んじゃ、先輩。オレは帰りますんで」

「なんだ、一人で行っちゃうのかい？」

「先輩、方向全く違うじゃないですか。正門出てすぐ別れるんですからここで別れたって同じでしょう？」

「淋しいことを言うねえ」

「たかだか数重メートルにこだわる理由はありませんよ」

吐き捨てるようにして、正門へと歩く。

「それじゃあな、少年。あ、そうだ」

思い出したように先輩が声を発した。

「今度は何ですか？」

「最近、なんか物騒なことが起こってるから帰りは気をつけなよ」

「はいはい、分かりました。じゃ、先輩さようなら」

大して気にも留めずそのまま歩みを進める。

確かに最近は大中小関わらず何かしら事件の話を目にする。最近じゃ生徒が襲われたり、近くの学校に空き巣が出たってのが何件か報告されてたな。

ま、僕には関係ないことだ。万が一にも巻き込まれるなんてことはないだろう。

4 .

「昨日、女子バスケットボール部に空き巣が侵入しました」

次の日、学校ではそのような知らせが朝のホームルームで伝えられた。

「同様の被害はこの区内の他の高校でも報告されています。何か知ってる、もしくは目撃したという生徒がいたら直ちに知らせして下さい」

まさかこの学校まで狙われるとは。作楽先輩から気をつけろとは言われたもの、その先輩の部が狙われてしまったじゃないか。

しかし盗難に遭ったって、何が盗まれたんだ？

その事について担任に質問する者がいたが、教えてはくれなかった。が、言えないということは金銭ではなく、もっと学校やもしくは部に関わる何かなのだろう。

昼休み、早速行動に出た者がいた。番長だ。

「おい、どこへ行くんだよ」

番長は答えない。じつと目を合わせてきた。雰囲気からするに、バスケット部の部室か関係者の誰かに会いに行くような感じだ。

「待てよ、別にお前が動く必要ないだろ？」

「……」  
相変わらず答えない。

「まったく、またお得意の正義感か。よくやるよ」

そうやって番長を皮肉るが、こうなってしまうたらもう止めようがない。コイツは人助けを自分に義務付けている節がある。それはもう、授業中に窓から飛び降りるくらいに。幸い、D組の教室は二階だから、ギリギリ飛び降りれる高さなのだが、初めて見たときは

冷やっとしたものだ。

「ここで、昨日の先輩の言葉を思い出す。

彼の友達であることは誇りなさい。

そうするためにはコイツに付き合うしかなさそうだ。気は進まないが、ね。」

「作楽先輩とこ行くんなら、オレも付き合おうよ」

それを聞いた番長はこくと頷いた。よろしく頼む、ということなのだろう。

一年棟と二年棟は繋がっているから、それほど移動には困らない。でも、僕は作楽先輩が何組かは知らないのだった。

「番長、作楽先輩のクラスは分かるのか」

「分かん」

「おい、二年棟はこっちだぞ」

途中の連絡通路までの道は迷いようはないはずだが、この男は極度の方向音痴かつ地図が読めないのだ。

「オレがいなかったらお前、多分二年棟には辿り着けてないぞ」

そうは思うが、どういうわけか肝心な時には一切迷うことを知らないのがこの番長なのだ。それは道だけでなく、心もであるが。

「助かる」

一言だけ番長は呟く。とはいえ、顔は相変わらず厳しいのであまり感情は読みとれない。二年棟に入ると、意外とすぐに作楽先輩に出会えた。というのも、

「お、少年、番長君。よくぞ来てくれた」

向こうから僕らの方に向かってきたからだ。まるで自分を訪ねてくる事など予測済みだったとも言つかのように。

「先輩、バスケ部は大丈夫ですか？」

「単刀直入に尋ねてみる。」

「うーん、これといって困ることはないな。ただ、金庫に手つけたくせに一円も持ってってないのは不思議なんだよ」

「え、じゃあ何が盗まれたんですか？」

「ほんとは言っちゃいけないんだけどな。盗られたのは部員名簿。名前と連絡先が載ってるやつ」

金ではないとはいえ、かなり重要なものが盗まれたものだ。個人情報はこの世の中だ、いくらでも悪用出来る。

「そうそう、他校でも同じように盗難に遭ってるじゃない？ 希望ヶ丘女学院や松林高校まつばやしも盗まれたのは同じように名簿だって話よ」

近隣高校を引き合いに出し、被害状況を語る。何だって名簿なのだろうか？

「他校でその名簿が盗まれたことでなんか脅迫されたりした人は？」

「いないな。ただ、最近起こってる暴行事件とかとも関係はあるかもしれないよ。今のところ、名簿関係での被害者はいないけど、な」

なぜ犯人は名簿だけだったのっだろうか。危険を冒してまで盗みに入って、特に希望ヶ丘なんて女子高つてこともあるからそう簡単に侵入は出来ないはずだ。それだけの価値が本当にあるのだろうか？

「まあ、直接の実害がない以上犯人探しは学校と警察に任せればいいと思うんだけどさ。そっちの番長君は、それじゃ気が済まないでしょ？」

先輩は番長を一瞥する。

「そこで、今後犯人が現れそうな場所はどこだと思っ？ 順番は松林、希望ヶ丘、うちときてるのよ。じゃ、次は？」

頭の中で学校の所在地を結んで見る。すると、北から時計回りになってることに気づいた。

「この近くにはあと三校あるけど、位置的に考えると……」

「六道館！」

橙学から見てちょうど真北に松林、北東に希望ヶ丘、北西にあるのが六道館高校だ。

「そう、次はそこだよ。他の二校は近隣とは言うものの、どっちも区境だから可能性は低いね」

「学校は分かりました。でも、盗みに入るのがどこかまでは……」

「そんなのは考えなくていいよ。出てきたところを抑えればいいん

だから」

でも疑問はある。六道館の敷地はうちと負けず劣らずの広さだ。

「何人かで張れば大丈夫！ バスケ部も協力するから、さ」

「協力つて……もうやること前提ですか？」

「？ 当たり前じゃないか。それとも少年、ここで怖気づいちゃったのかい？」

「違いますよ。この番長は確かにやる気でしょうけど、オレの方は……」

そう、僕はそこまで協力するとはまだ言っていない。正直、後は勝手にやって欲しい。今は話を聞きに行くということだったから付き合っただけだ。

「へえ、友達置いて逃げるんだ。薄情だねえ」

先輩は軽蔑の眼差しを向けてくる。番長も付き合ってくれと言わんばかりにこちらを睨んでいる。

「……分かりましたよ、どうせ今日も時間はありますから」

「よろしい。なら作戦会議としようか」

嫌々ながらも加わる羽目になり、その場で会議は始まった。先輩

が一方的に話しているが、それを聞く番長は真剣そのものだ。

「さて、六道館の入り口は全部で五つ。そのうち一か所は封鎖されて長い間使われていない。と、くれば……」

「そこが一番接触出来る可能性が高い、ってことですか？」

「残念、違うんだな少年」

「え、違うんですか？」

もし僕が逃げるんなら、間違いなくそこを通る。その方が安全だからだ。

「馬鹿正直にそんなところを通るかもしれない。でも、これまでの事件で目撃者がいたケースはないのだよ」

「え、何もおかしくないじゃないですか。人の目がないんなら、目撃情報なんてありませんよ」

「……成りすましだ」

ふと口を開いたのは番長だ。

「そう。番長君、鋭い。犯人はその学校の生徒に扮していた可能性が高い」

その方が有り得ない。それに、もしそうだったとしたら尚更見つけるのは困難だ。

「うちの学校は私服校だから、成りすますには簡単。他の学校も、制服さえ用意出来れば難しくはない。それに、その生徒じゃないから、後で盗まれた時間にいた生徒をその学校で調べたとしても決して引つかからない」

なるほど、それならば学校内で堂々としていれば気付かれることはない。挙動不審でなければ、疑われることはないだろう。

「でもそうすると、犯人は女ってことになるな。さすがに希望ヶ丘は女装した男じゃ無理あるし。逆に松林は男子校だけど、案外男装すればいけるんだな、これが」

「なんか試したことがあるみたいな言い方ですね」

「前にちよつと、な。そしたら仲良く成り過ぎちゃって……いやあ危ないところだった」

先輩はボーイッシュで長身だから、確かに大丈夫そうだ。にしても、危ないところだったて何やらかしたんだ？

「何があつたかは今は聞きませんよ。それと、犯人が個人とは限らないんじゃないですか？」

「実行犯はおそらく一人だ」

「またも番長が口を開いた。」

「何でまたそう思う？」

番長が言うんだから何か根拠があるのだろう。

「勘だ」

おい、勘かよ。

「まあ、そんなのは六道館に現れる犯人をとっ捕まえれば分かることよだ！」

「確かにそうですけど……」

あれ、作戦はどうなったんだよ先輩。それに、肝心な問題がまだ残ってるって。

「そもそも、今日犯人が来るんですか？」

次の狙いは六道館、それは高い確率だろう。ただ、今日盗みに入られるとは限らない。

「少年よ、誰も今日行くななんて行ってないじゃないか。人の話はちゃんと聞かなきゃ」

「だって、バスケ部も協力するって……それに、このノリは明らかに今日行動するって感じじゃないですか」

「ふふ、今日行くななんて、まだ言ってなかった。いや言葉を変えよう。『今日も行くが、一日では終わらない』ってな」

とはいえ、さっき僕は「今日は時間がある」と先輩に告げた。それで納得してたから、てっきり今日だけ行くものと早合点していたのだ。

「今日来るとは限らない。ならば来るまで張り続ければいいだけじゃないか。簡単なことさ」

「そうですね……先輩、部活あるじゃないですか」

さすがにいつ来るか分からない窃盗犯のために何日も費やせるほど皆ヒマではないはずだ。

「そんなもの休めばいい。大丈夫だ、あたしは部長特権を行使する。それにこちらは被害者だ。このまま黙っているわけにはいかない！」

そうだった。先輩のペースに飲まれてすっかり忘れていた。

「まったく、いろんな意味でさすがですよ。そういえば先輩、犯行のペースがどんなものか分かりますか？」

まるつきりランダムだと困るけど、ある程度犯人側も計算しているかもしれない。

「最初の松林が一週間前、んで希望ヶ丘がその三日後、さらにその三日後の昨日がうち」

「ってことは明後日の可能性は高いですね」

三日ごとに実行している。とくれば、うちの三日後に六道館とい

うことになる。

「百パーセントじゃないけど、ね。まあ、張るのは一週間程度で大丈夫っしょ。」

一週間、か。まあ特に何かあるわけじゃないから問題はないけど。「ま、なんだかんだそんなにしなくて、あっさりと犯人は捕まりそうだけだな」

「根拠は何かあるんですか？」

「あたしに手を出したのが運の尽き、だよ」

正確にはあなたの部だけだな。まったく、どこからそんな自信が来るんだか。

「さて、番長君。ここまでで何か意見はあるかい？」

先輩は番長を見た。

「否、問題はない」

番長は納得しているようだった。と言ってもこの男が何かに対して文句を言うとは思えないのではあるが。

ん、待てよ。そもそも僕はコイツに付き合っただけで先輩に会いに来たんだよな？　なのにコイツほとんど喋ってないか？　まあ、無口だから仕方ないと言えばそうだけど。

「よし、んじゃあ今日は放課後に中庭の噴水前に集合！　ってことでここは一時解散！」

先輩はそう告げた。作戦会議というほど具体的な策を話し合ったわけではないが、このやたらと疲れる空間から解放されるのは歓迎すべきことだ。

それにしても、一週間帰り遅くなるのはいいとして、言い訳はどうしようか。図書室で勉強していた、ということにすれば両親も納得はするだろう。

しかし、一週間もせずに先輩が言った通り、思いの他あっさりこの事件の決着は着いたのだった。

作楽先輩、番長とともに六道館を見張り初めて三日目。それまでの二日間、特に犯人に動きはなかった。

被害報告が入らないことから、見落としがあったわけではないようだ。

普段他校に行く機会はないが、六道館は随分と学生が多い印象を受けた。放課後だというのに、下校せず、談話している生徒がそれなりにいるからだ。

この中に紛れてるかもしれないんだよな。

そう思い続けて三日目を迎えた。この日の僕の担当は裏門だった。正門は番長、閉鎖されてる門が先輩、他の場所は先輩曰く同じ部の人にやらせているとのこと。

裏門から校内を覗くが、特に何も起きる様子はない。だんだんとも暮れ始め、今日も収穫なし、と思いきや……

この裏門の方へ走ってくる人影があった。

六道館の制服？ まさか……

その人物を注視する。顔つきからして女性。まあ女子制服を着ているし、確実にそうなんだろうけど。

問題はその後だ。学ランで全力疾走をしている人間がいる。あの姿は見間違えようがない。

番長だ。

それにしてもよく犯人に気づいたな。多分僕だったらこの学校の生徒だと思っただけで確実に見落としはたかろう。

こちらが裏門で待ち構えているのが見えたのか、犯人と思しき少女は方向を変えた。その先は、閉鎖された門がある場所だ。そしてそこには作楽先輩が待ち構えている。

が、少女はそこまで辿り着くことはなかった。

「ちよ、番長、マジかよ！」

番長は履いていたゲタを脱ぎ、逃げ行く犯人に向かって投げつけた。

「……っ！」

一瞬だけ振り向いた犯人の顔は驚愕に満ちていた。だが、彼女もそれをかわす。ただ、その際バランスを崩したようでよろけてしまった。

その時、番長は既に犯人に迫っていた。そして

番長は飛んだ。

正確には勢い余って転んだ、のかもしれない。が、全速力だった番長の巨体はそのまま一直線に犯人に向かい

犯人の少女にのしかかった。

「番長！」

僕は心配だったため、すぐにその場に駆けていった。もちろん、心配なのは犯人の少女だ。番長の図体にあのような形で押し潰されたらひとたまりもない。

しかしその心配は必要なかった。

番長はそのままのしかかった……のではなく、彼女を抱きかかえ、身体を逸らして衝撃を全部自分で受け止めていたのだ。

「お手柄、番長君」

先輩は悠然と歩いてくる。その様子からすると、まるで番長が確実に取り押さえられると予期していたかのような、そんな余裕が窺えた。

「さて、普通なら警察に引き渡すってどこなんだろうけど……」  
考え込むような素振りを見せるが、先輩はすぐに少女の顔を覗きこんだ。

「その前にいろいろと聞いておかないとな。まあ言わないってなら実力行使になっちゃうから」

にやにやとしながら少女と向かい合っている。もっとも、動こう

にも番長が拘束しているので、まったく身動きは出来ないようだ。

「先輩、場所くらい変えましょう。ここだと誰かに見られた時に面倒です」

「そんな時間はないよ。ちよつとその陰に入れば大丈夫大丈夫！」

先輩が指差した先は、わざわざ注目しない限りは見逃してしまふような所だった。資材置きに使われているだろう、プレハブ小屋の裏だ。僕ら三人はそこへ移動する。

「どれどれ、まずは持ち物を見せてもらおうよ」

そう言うつとすぐに、犯人の持っていた鞆を漁る。その中には案の定、名簿が入っていた。

「ふーん、今度は生徒会か。よく入れたもんだな。それに化粧道具一式、女の子らしいね。

あとは……」

犯人は何かを恐れているようだった。既に盗んだ名簿は確認された以上、もう見られて困るものは無いはずだ。

「ふうん、なににな　『女の子らしく振る舞う方法』にこっちは

『男の娘のための本』

つて、ひよつとして」

今度は犯人が口を開いた。

「あの、僕……男です」

告げられた事実を僕は信じられなかった。声も比較的高く、聞いただけでは男だとは分からない。それに、顔つきも男だとは思えないほどに女性的だった。小柄なだけでなく、くりつとした大きい瞳に陶磁器のような白い肌、美少女と言つても遜色ない。

「そういえば、番長。お前捕まえた時からやたらと強く押さえつけてるみたいだけど、ひよつとして、男だつて気付いていたのか？」

番長はゆつくりと頷いた。なら早く言えよ。

まあこの男の場合、女性に対しては極力自分の力を抑えるから不思議だつたんだが、よく分かったな。

「男つて、そんな嘘ついても特なんてないよ。そんなあたしよりも

カワイイ顔して『男です』って言われてもねえ……」

「間違いなく、男だ」

番長が呟く。というかお前、触ってるだけでほんとに分かるの  
よ。

「番長君、根拠はあるのかい。あたしはこんなにカワイイ子が男の  
子なわけがないって思う」

二人が揉めている。が、一番困惑しているのは目の前の少女……  
否、少年？ だった。

「なに、その『見れば分かる』って顔は。んじゃあ確かめさせても  
らうよ！」

先輩は犯人の服を掴もうとする。僕は反射的に止めに入った。

「それ、先輩がやつちゃダメですよ。セクハラになりますって」

いくらこの人がやるとはいえ、さすがに目の前で破廉恥な行為が  
行われるのは気分のいいものではない。

「男だって言うんなら、僕が確かめますよ。まあ本人が証明してく  
れば楽なんですけどね」

「あの、これ……」

すると、犯人がもじもじしながら何かを渡してきた 生徒手帳  
だ。

写真は紛れもなく目の前の人物のものだ。髪は写真の方が短いも  
の、顔つきが同じだから断定しても問題ないだろう。性別は男。  
学校が発行しているものだから、やはり男ということなのだろう。  
どうにも信じられないけど、これが真実だ。

「先輩、やっぱり男ですよ」

「それが偽物ってこともあるでしょ」

「いえ、ここで偽物見せてまで嘘をつく理由なんてありませんよ。

それに、世の中男の方が不利な事って多いんですよ、女なのに男だ  
と言ったところで特なんてありません」

その言葉に先輩は苦々しくも納得したようだった。

もう一度生徒手帳に目を移す。

名前、音川優

おとかわまさる

年齢、十三歳。

十三!?

それに学校名……『松林中学校』

男子校である松林高校の中等部である。

「お前、中学生だったのか」

「……はい」

なるほど、声変わりもしてない上、背もまだ伸びていないのだ。

確かにそれなら女性に成りすますことも出来そうだ。ただ、

「男だつてのは分かった。じゃあその制服はどうしたのかな?」

先輩が質問、もと尋問する。さすがに中学生が自腹切つてまで

他校、それも私立校の女子制服を買えるとは思えない。

「姉の……です」

「ふーん、なるほどな。よくお姉さんも貸してくれたもんだよ」

「あ、いえ姉は今家にいないのでその、勝手に着ました」

「あらあら、バレたら女装癖あるって家族から冷めた目で見られる

よ

「だんだんと話が女装寄りにシフトしていく。このままじゃいけない。

い。

「あの先輩、今は女装の事よりも」

「そうだ、果たしてその下に穿いているのは男物か女物か、だった

かな?」

「違います」

何をボケているんだこの人は。しかもそこはまるで重要じゃない。

「君さ、単刀直入に聞くけど、どうしてそんなものを盗んだんだ?」

「……調べるために、です」

「調べる? 何をだ?」

この少女の姿をした少年は誰かを探していて、そのために名簿を

調べていたのか? 僕の想像力ではその程度の予想しか出来ない。

「この辺りに複数ある? チーム? の主要人物を、です」

チーム？ 噂程度には聞いたことがある。確か、この辺りには暴走族ってほどではないにしろ、中高生が中心になってグループを組んで、それぞれが縄張りを決めて活動しているとか。

なるほど、彼はどっかのチームに属していて、他のチームより優位になるうと調べていたということか。きっと名簿で調べるということは、そのチームとやらでは本名ではなくあだ名みたいなので呼び合う風習でもあるのだろう。

「で、君は相手チームの弱みに付け入るためにも、その主要人物のデータが必要だった。そういうことか？」

「はい……」

少年は俯いたまま答えた。

「どこのチームだ？」

「え……？」

意外なことに、番長が少年に問いかけた。コイツはそのチームとやらに詳しいのか？

「あら、番長君、奇遇だな。あたしも気になってたところなんだ」

先輩もか。なんだか僕、アウエーな気がしてきた。

「あの……まだチーム名は、ないです」

「ないって？ でもおかしいなあ、最近新しくチームが組まれたなんて話は聞いてないんだけどさ」

訝しい様子の先輩。番長も少年が動けないように押さえたまま、眉間にしわを寄せ考え込んでいる。

「なんか、チームなのかもよく分からない、です。本当にリーダーがいるのかも、全部で何人いるのかも……」

おどおどしながら少年は話す。これ以上追及されても困る、と身振りで語っているかのようだ。

「ふーん、それが本当ならこれ以上の質問も意味ないか。番長君、放しちゃっていいよ」

「いいんですか、先輩だって被害者でしょ？」

ここで解放したらそのまま逃げられてしまう。いくらこの人でも、

その程度のことは理解しているはずだ。

「いいのいいの。あたし達に顔も見られてるし、学校も特定されてる。それに名前だってちゃんと控えてるでしょ？」

「そうですけど……」

なんか腑に落ちないというか。先輩が一人で納得しても、他の部員の意見もあるだろうし……あれ、他のバスケ部の人は見張りっ放しなのか？

「あの、先輩？ 手伝ってくれた他の方々はまだ」

「ん、ああ大丈夫。さつき『本日も異常なし』ってメール送ったから。多分もう家に帰ってるんじゃないかな」

おい、初めから解放する気満々じゃないか。先輩、事情だけ聞いて逃がすとはどういう神経してんだよ。

「いいのか？」

番長が言う。この場合は、少年 音川を放すのとバスケ部の人を帰したことのどっちを意味しているのだろうか？ まあ両方ということにしておこう。

「別に名簿なんてまた用意すればいいだけだしな。盗まれた現物は幸いなことにこの子の鞆の中に入りっ放しだったし。まったく、証拠は人の目に触れないようにしておくのが基本でしょ」

「何アドバイスしちゃってんですか。それに、今のは答えになってませんよ」

「大丈夫、番長君はちゃんと理解してくれてるみたいだから。少年、彼はきつとキミより賢いよ」

ふと見ると、既に番長は音川少年を解放していた。ただ、彼としては振り返ると自分より頭二つ分近く大きい、それでいて厳しい顔の大男が目に映ってしまったため、さらに怯えることになってしまっていたのだが。

まあそれに加えて学ランにゲタなんていう昭和の番長みたいな格好なんだ。この少女のような繊細な少年には刺激が強すぎる。自分を強く抱きしめたのがこんな人間だったと考えると、僕なら間違い

なくトラウマものだ。かわいい女の子なら大歓迎だというのに。

「う、うわ……」

「ありゃー、お子様に番長君はちょっとばかりインパクトあり過ぎたかな？　じゃあ、こうしよう」

先輩は続けて少年に嫌らしく微笑み、言葉を発する。

「これに懲りずにまた同じようなことやってたら、この番長君がどこまでもキミを追いかけるから。それにキミが男だって知ってる分、手加減はしないよ」

ついでだから僕も便乗しておく。

「あ、コイツ正義感の塊みたいなヤツだから、ほんと悪さはしない方がいいよ。多分トラウマになるから」

からかい半分で言ったが、彼には重く感じられたことだろう。分からないのは、こんな臆病そうな少年、まあ今は少女の姿だけど、どうして学校に入るなんていう大胆な行動をしたのかだ。

「は、はい……も、もうしま、しません」

顔は青ざめている。番長の威圧感は相当なものだが、なぜここまで怯えているのか。

「あ、ちよつと不思議に思ったんだけど、よく他校に侵入なんてことしたな。女装しているとはいえ、相当な度胸は必要だぞ？」

「いえ、やらなければ、いけませんでした、から」

何か切羽詰まっていたような、そんな雰囲気だった。この少年を駆り立てたものの理由は、現時点では分からないままだった。

「まあいいか。とにかく、目撃者はオレら三人。さつき君が動けない時に証拠の品は預からせてもらった。ちなみに写真もさりげなく撮ってある、写メだけだ。あと、オレはともかくこっちの二人は敵に回すと本当に怖いから、変なことは考えるなよ」

「あら、あたしはいたいけな女子高生だよ？」

「嘘つけ！」

「お、少年珍しく強気だな。その意気は認める。が、こんなところで女性に手を上げるほどキミは馬鹿じゃないでしょ？」

先輩は目を細め、口の端を軽く引いた。まったくいい性格してるよ、この人は。

「誰もんなことしませんって。とりあえず音川君、そんなわけこの場は見逃すから」

「あ、はい、ありがとうございます」

「感謝することじゃない。どっちにしてももうこんなことするなよ？」

「はい」

少年は恭しく頷いた。

そしてこちらの様子を気にしながら、ゆっくりと去っていった。

「本当に良かったんですかね？」

先輩に問いかける。なんだかんだで、僕はまだ納得がいかない部分があった。

「大丈夫。それに、新興チームがあるって分かっただけでも十分」

「先輩、そのチーム関係に事情に詳しいんですか？」

「まあ、あたしは中学もこの近くだったし、知り合いに何人かチーム組んでるのがいるからな。溜まり場もそこそこに知ってるのさ」  
なるほど、僕は家自体は学校がある区ではないから知らなかっただけか。

「で、番長は？」

「姉の影響だ」

初耳だ。コイツに姉がいるとは。この弟の姉など想像がつかない。なるほど、それでチームのことを知ってたんだ。キミのような孤高な存在だと、あまりチームの話題は入ってこないはずだから、そういうことだったのか」

何やら先輩は納得していた。

「で、結局チームって何なんですか？」

僕はわずかな情報しか持っていないので、聞くことにした。

「ただの仲好しグループだよ、群れなきややってらんないような人たちの、な。中には不良とかのグループもあるけど、そんなに問題にはなっていない」

「なぜですか？」

「チームも大小様々あるけど、その中でも四つのチームがずば抜けて力を持ってる。で、大体のチームはその四つのどれかの傘下に入ってるか同盟を組んでる。四つのチームは均衡を保ってるから、大

規模な争いは起こらないようになってる」

なんかこういうのを聞くと、昔のカラーギャングとかを思い出す。確か、ドラマにもなってたっけ。不良ってわけじゃないならあんな警察沙汰になるようなことはしないんだろうけど。

「通称を四大勢力と、まあそのままなんだけどな。多分、さっきの子はその中の幹部クラスの人間の情報を集めてた、ってとこね」

この区には確か六つの高校と十の中学校がある。内三校は中高一貫教育だ。今回狙われた四校のうち、橙学を除く三校がそれに該当する。

ひよつとして、四大勢力と今回の四校はかなり密接に関係があるんじゃないか？

そう考えたところで、僕には実のところ関係のない世界だ。今回の件以外ではもう関わることはないだろう。

いや、番長の事を考えると断定は出来ない。それにこの先輩に面白半分で巻き込まれることもあるかもしれない。

「それで、なんか困ることあるんですか？」

「あるんだな、これが。その四大勢力のそれぞれのトップはチームの中でも知る者は少ない。幹部の数人くらいだよ。それに、幹部クラスになると異名がついている事が多くて、学校が同じでもない限り本名は知らないことが多い」

なんかややこしいんだな、チームって。

「だから、今回の名簿の中に幹部より上の人間がいたとして特定されたら、後は分かるでしょ？」

「ええ、場合によってはかなり大変な目に」

「幹部の人も武闘派ばかりじゃないからな。だから出来る限りプライベートな事には触れないようにしている、みただよ」

複雑だ。ただ、この話には矛盾がある。

「でも先輩、最初仲良しグループって言ったじゃないですか。四大勢力の話を知ったら、とてもそんなものには思えませんよ」

「……四大勢力はチームの元祖だ」

番長が口を開いた。

「と、聞いたことがある」

だが詳しい事は知らないようだ。

「その四大勢力つてのは、他の無数のチームと違って、れっきとした組織だよ。だからこそ強い力を持つてる」

それ以上はあたしも知らないけど、と先輩は続けた。

「そういうことですか。でも……なら今回の件は止められて良かったじゃないですか。音川にしたって、いくら個人情報を集めたところで、このままだと返り討ちに遭ってましたよ。双方に被害が出なくなつたわけですし」

「そうだね。少年、キミにも思いやりというものはあつたんだな。

お姉さん、見直しちゃったよ」

思いやつたわけではない。ただ、あんな少女のような少年ではいくら情報を集めたところで強大な組織には勝てないだろう。

「で、先輩。名簿を取り返したのはいいんですけど、これどうやって返します？ 僕らが堂々で行つたら疑われますよ？」

そこで先輩ははつとなつた。

「あ、忘れてた。いやー、証拠控えてるつって伝えたところでこの現物がある以上信じてもらえないよな」

あははと笑っている。いや、先輩笑い事じゃない。

「だからつてずつと持つてるわけにはいきませんよ。バスケット部に至つては先輩が言い訳すれば済みますけど」

困つた。同じ濡れ衣でも、購買のパンの時とはわけが違う。

「任せろ」

番長は真剣な眼差しで口を開くなり、先輩から名簿を取つた。橙学以外の三校のものを。

「おい、どうするんだ？」

「行つてくる」

そう告げると、番長は一人駆け出して行つた。

「おい、どこ行くんだよ！」

追いかけてよとするとするが、番長の足は思いの外速い。さつきも全力疾走していたが、それよりも速く見えた。

「いいじゃないか、番長君に任せれば」

「でも……」

「彼なら大丈夫だよ、キミと違って」

「それはオレに失礼ですよ」

「あれ、今回キミ何かしたっけ？」

「……すみませんでした」

ダメだ、どうしてもこの人に勝てる気がしない。

「よろしい。それじゃ、あたしらは帰るとするかね」

「ですね。とりあえず一番近いバス停まで行きますか。この時間に橙学まで歩くのも面倒ですし」

「賛成。じゃ、少年、案内は任せた」

「やっぱりそうなりますか」

仕方ないので僕が先行して歩き出す。いつの間にか周囲は暗くなり、それなりに多くいたはずの六道館の生徒もいなくなっていた。

「そういえば」

ちよつと気になったことがあったため、口に出してしまった。先輩に言ったところでどうにかなるものでもないのに。

「なんで番長はあの子だって分かったんですかね？」

「さあ、あたしには全く。彼の超感覚なんかじゃないの？」

「そうなんですかね？ まあアイツ、変に鋭いところありますからね」

ただ、それでも納得いかないが。六道館の制服を着ていた上、見た目は完全に女子生徒だった。それに、あの時間は他にも多くの生徒がいた。その中からピンポイントで音川を特定したのだ、感覚が鋭いというレベルじゃなくもはや超能力だろう。

「そうそう、いいじゃないか。もう終わったことだし」

「なんか先輩に言われてもなあ……」

正直説得力はない。

全く番長といい、先輩といい、なんかズレてるよなあ。僕はまだまともなはずだ。ただ、この二人といるとその自信がかえってなくなってくる。

おかしい人間は僕と番長なのか、僕と先輩なのか、それとも先輩と番長なのか一体どれなんだろう。ああ、土岐野も十分おかしいヤツだったな。

いや、今回の音川もある意味じゃあおかしいよな。だって、高校生かと思ったら中学生だし、女かと思ったら男だし。あれで性格まで特殊だったらどうしようもないな。

まあ変なヤツとの関わりはこれ以上増えて欲しくはない。が、なんか僕はもうこうという人達との出会いが今後増えるような、嫌な予感がしてならない。

その次の日、学校では一日に三校に不法侵入した者がいたという知らせが入った。不思議な事に盗まれたものはなく、むしろ無くなっただけのものが戻っていたとか。

それが誰の仕業かは言うまでもない。

全く、本当に無茶をする男だ。

で、その犯人はどういうわけか怪我をしていた。全身の数ヶ所に軽い打撲を負ったようだが、何があつたかはあえて触れなくていいだろう。

余談だが、今回は目撃者もいて、その人物の話では「真黒な大きい影が校舎二階の窓から飛んできた。そいつは何事もなかったかのように物凄いスピードで駆けて行った」ということだった。

ただそれは目撃情報というにはあまりに突拍子もなく、信じる者は少なかったという。ただ、その後なぜか各学校にあるSF同好会なる組織が躍起になって「その影は宇宙人が未確認生物だ」と主張し出し、変なイメージ図が各学校に配られることになるのだが、それはもう少し先の事である。

## 2 - 1 (前書き)

今回ばかりは言い訳なんて出来ない。

いや、僕にはそんなつもりはなかった。ただアイツについて行っただけだ。ただ、それがいけなかった。

事が起こったのは連続盗難事件の犯人を僕らが突き止めた一週間後である。その日は何事もなく、普通に授業を受けていた。途中までは。

しかし状況は一変した。それは僕と番長と女子生徒にのみ言えることであるのだが……

1 .

「きゃー……！！！！」

悲鳴が廊下に響き渡る。四時間目後の休み時間、この日は体育があるため、今頃男女共にそれぞれの更衣室で着替えているはずだ。た。

男子は基本的に着替えるのは早い。それが いけなかった。

一応体育の時間くらいは学校指定ジャージを着る。私服高校とはいえ、さすがに体育までジーンズや革靴でやることは出来ない。

無論、番長もこの時ばかりはしっかりとジャージに着替えていた。そして悲鳴が聞こえるや否や、駆け出して行った。悲鳴があつたことで、女子生徒の身に危険が及んだよ判断したのだろう。今回は僕も気になった。別に女の子の前で良い顔をしたかったわけではない。番長について僕も走る。廊下を走るなどは良く言われることだが、そんな事に構ってる場合じゃない。

そして番長は目的の場所に着き、迷うことなくドアを開いた

禁断の扉を。

「きゃー……！！！！」

「大丈夫か！」

番長が中の女子生徒に向かって叫ぶ。だが女子生徒を助けるために駆けつけた彼の行為は、決して歓迎されるものではなかった。そしてまた、そのすぐ後ろまで来ていた僕も否応なく巻き込まれてしまったのだ。

番長が開けた扉にはこう書いてある。

？女子更衣室？と。

さて、普通に考えてみよう。この行為は露店風呂で女の子の悲鳴を聞いたとき、思わず「どうした!？」と言って勢いあまって堂々

と覗きを働くことと同等だ。つまり、反射的に相手を心配して行ったことが、むしろやってはいけないことであり、言い逃れが出来ない状況となる事である。

今はまさにそんな感じた。

だが番長はそれでも、恥じらうでもなく本気で中の様子を心配しているようだ。相変わらずの厳しい表情でじつと女子生徒を見ている。もっとも、目線の先にあるのは下着姿のクラスメート達なので。

「覗きよ！ 誰か先生を！」

番長は何が起こったのか分からない様子だ。珍しく戸惑っているようだ。だが気付け、仮にお前が女に興味がないとしても、明らかに覗きの現行犯だ。弁解は出来ない。

そしてそれを間近で見っていた、と言っても番長の巨体のせいでも女子更衣室の中は見えなかつたのだが、それでも現場近くにいたことを考えれば、その後どうなるのかは想像するに難くないはずだ。

ピシャツという音とともに勢いよく更衣室の扉が閉まる。その時には既に教師が二人、すぐ近く　と言うより真後ろまでやって来ていた。

当然の事ながら、僕と番長は職員室まで連行されていった。

うう、僕は無実なのに……

そこから職員室でどのようなやり取りがあつたのかは、僕の口からはとても言いたくはない。とにかくこの学校に入ってから一番酷い目に遭つた、という事だけは確かだと言っておこう。

ありゃほとんど拷問だろ……

決して暴力は振るわないが、そんなことをしたら当然体罰で教師側の方が分が悪くなるのだが、それでもあのプレッシャーは耐えられない。さすがに学年主任と校長、教頭の三人と向かい合うのはしんどいというものだ。

ただ、僕も番長も不思議なことに今教室で授業を受けている。停

学か、下手をすれば退学を言い渡されていてもおかしくはないというのに。

「で、番長、どうするよ？」

授業後、僕は番長と今後について話すことにした。とりあえず？条件？をクリアしないことには退学の危機を脱したことはない。いい。

その？条件？として、学校側からこう告げられた。

『一週間以内に覗きの真犯人を見つければ、処分は見送る。出来なかった場合、君達が犯人であるとして、処分を下す。退学を覚悟したまえ』

なかなかに厳しい。ただ、僕はともかく番長に至っては覗いたことと変わりはしないはずなのに……謎だ。

別に番長は言い訳をしたりはしていない。いつものように険しい顔つきでじつと構えていただけだった。だからこそ凄い威圧感を感じさせていたのだが、教師、それも校長達がそれに怯むとは思えない。

途中からは一人ずつ面談という名の尋問に切り替わったのだから、そこで何かが起こったのだろう。それをこの男は話すとは思えない。いつものように一言で済ますだろう。

ああ、思い出したら気分が悪くなってきた。あんな合法的かつ精神だけを蝕む方法を知ってるとは、恐るべし。

「探す」

番長は静かに呟いた。

「しかし、探すったってどうすんだ？　今回はまるで当てがないんだぞ？」

「聞き込む」

「普通ならそうなるんだろうけどよ……」

問題は今の状況だ。僕は未だ容疑者という扱いだ。それに、う

ちのクラスの女子はコイツが扉を開けたのを目撃している。悲鳴はその前だが、コイツも覗いたことに変わりはない。そんな男が話を聞こうとしても答えてくれるとは思わない。無論、僕もそうだ。先程から教室でもその話をしているクラスメートがいる。悪口も時折聞こえてくる。が、今回ばかりは反論は一切出来ない。

「問題が？」

番長からの質問が来る。いや、問題も何も、察しろよ番長。この状況下ではお前の味方になる奴なんていないぞ。

「嫌と言っただけにあるぞ。何か聞くとしても、間接的に聞くしかない」

視線をクラスの、それも女子の方へ向ける。目が合った瞬間に逸らされる。この様子から番長も状況を悟……っってくればいいのだが。

「了解だ」

どうやら分かってくれたようだ。ほんと、ヒヤツとする。コイツから発せられる独特なオーラには未だに慣れない。

半年の付き合いがある自分でこれだ、他の人間がコイツと話そうとしないのも理解出来る。僕だって入学式に声を掛けられていなければ話す機会なんてなかったはずだ。

ま、悪い奴じゃなんだ、ただちよつとズレてるだけで……さすがに？番長更屋敷？とまとめらるのは勘弁して欲しいけど。後ろの方からその単語が聞こえてくる度に胃が痛くなる。

とにかくも、まずは犯人を見つけるしかない。この前の連続盗難事件もなんとか解決したんだ、なんとかなる。

とにかく身動きが取れる放課後までにプランを考えなくては！

「あら、これはこれは、覗き魔の更屋敷じゃない」

放課後、最初に声をかけてきたのは土岐野だった。

「違えよ。オレは何もしてない」

「そうね、相方の鬼ヶ島だっけ？ アイツだもんね。お前はそれに便乗しようした後からついていった、そういうことでしょ」

「だからなんでアイツがすることはオレもしようとしているってことになるんだよ？ 大体、わざわざ体育前に更衣室覗く奴なんていねえよ。地下の体育室やグラウンドの通り道にあるわけでもないし」

あくまで僕は番長を止めに行っただけであり、それが間に合わずあんな事になってしまったのだ。アイツを追うくらいなら、地下に行くべきだった。そうすればこんなところで土岐野に嫌味を言われることもなかったのに。

「でも、アイツの近くまで来てたんでしょ？ やらしいっいたらありやしない」

「待て、なんでオレが番長の後ろにいたって思うんだ」

「はあ？ とぼけないで。更衣室のドアが開いたとき、あの鬼ヶ島の巨体と、それから後ろの方にいた、眼鏡外してたけど多分アンタらしい影が見えたのよ」

更衣室にいた？ ってことは土岐野はE組か。体育はD組とE組は合同だから、そういうことになる。

「全く、相変わらず根拠なくオレを悪者扱い出来るもんだな。なんだ、オレに何か恨みでもあんのか？」

事件のこともあり、僕は少しだけ苛立っていた。しかも今目の前にいるのは何かと突っかかってくる風紀委員。こっちの虫の居所だつて悪くなる。

「……気に食わないのよ。アンタの存在が」

「んだよ、それだけの理由でかよ？」

「うるさい！ ともなく、ムカつくのよ、アンタは」

土岐野は激昂していた。何もそんな顔を赤くするほどムキにならなくてもいいのに……

「あの男も、うちの委員長も嫌い。お前とは違って、真つ直ぐだから、正しいことしかしないからムカつく。あんな馬鹿げた姿をしてるくせに！」

「おい、お前……」

あまりにも唐突過ぎて僕はついていけなかった。こつちから先に強く出たとはいえ、こんなに本気で怒っている土岐野は初めて見た。「私はみんなのためにとまってこの活動をしている。模範的であろうと真面目にしてる。だから、学校みんなに悪影響なものと戦ってる。アンタみたいなチャラついてる奴やあんな物騒な人達は敵、敵なのよ！」

なんかもう無茶苦茶だ。言ってることに脈絡がない。このタイミングでこんな感情的になられてる意味も分からん。

「今日だつて覗かれるどころか、あんなことを。私は絶対に許さない！ 特にあの仮面野郎は、絶対！」

「仮面野郎？」

なんだ？ もしかして、最初の悲鳴の原因は……

「あんな狭い窓から入ってきて、私達の前で……ああ、いや思い出したくない！」

「おい、土岐野。なんなんだそいつは？」

「うっさい！ アンタもそいつの同類よ。ああ、なんて醜い覗き魔」

土岐野の顔は今度は青ざめている。相当な目に遭ったのだろう。ただ僕に罵声を浴びせるまでもないと思う。

「とにかく、その仮面が女子更衣室に侵入したってことだな？」

が、土岐野は答えなかった。顔をハンカチで拭き、眼鏡を直すとそのまま去って行ってしまった。

「まったく、なんだよアイツ」

本当に分らない。そういえば、小学校や中学校ではただ気に食わないって理由でいじめられていた奴がいた。もしかして、土岐野にとっては僕がそれに当たるのだろうか。

それなら理屈でどうにかなるものではない。アイツは今後何か口実を見つけては僕に当たってくるだろう。

いくら土岐野とはいえ、女の子に一方的に嫌われるのは辛い。かと言って、作楽先輩みたいな好意の向けられ方をされるのもあんまり気持ちのいいものではない。

それでも、収穫はある。番長が駆けつける前の悲鳴は仮面を被った人物の仕業であるということだ。とりあえずそいつの事は？仮面野郎？と呼ぶことにする。まだこの時点では男か女か分からないが、別にどう呼ぼうが問題ないだろう。

むしろ問題はその仮面野郎の情報をどうやって集めるか、ということだ。土岐野とは次に顔を合わせても多分教えてはくれないだろうし、かといってクラスの女子に聞くのはほぼ不可能。せめてもう少しだけ何か掴めれば……

「おや、少年。随分と悩ましい顔をしてるじゃないか。ははあ、さては覗いた女の子達の姿を思い出そうとしているな」

振り返ると、相変わらずのジャージにハーフパンツ姿の作楽先輩が立っていた。一年棟の廊下に二年生である先輩がなぜいるんだ？

「せ、先輩！　なんでいるんですか？」

「なんだ、それじゃまるであたしがここにいちやいけなみたいじゃないか」

「みたい、じゃありませんよ。ここは一年棟ですよ？　他の学年の人はよほどの用がなきゃ入って来ませんって」

「なんだい、暇潰しにかわいい後輩に会いに来たっていいじゃないか」

「そのかわいい後輩がオレってわけですか」

もしそうなら迷惑な話だ。この前の盗難事件を除けば、先輩と会

うのは校舎の外がほとんどだった。まして一年棟などで、考えられないことだった。

「まさか。キミはかわいくもかつこよくもないじゃないか。自惚れないでくれよ。こつちが恥ずかしくなるでしょ」

自分で自分を堂々と可愛いと豪語するあなたに言われたくありませんよ、などと突っ込む気にはなれなかった。先輩が（見た目には）可愛いのは、僕の主観、というか客観的情報からも明らかだったからだ。

聞き耳を立てていると、先輩の噂は流れてくる。『あんな格好でも学校で十指に入る美貌』 『性格と服装以外は欠点なし』 『残念すぎる美人』などと評判だ。

「堂々と言われると、分かっているても凹みますよ。それで、何しに来たんですか？」

「いやあ、今日何やら一年棟で女子更衣室に覗き魔が現れたって聞いてさ。で、噂を聞いたら何やら番長更屋敷なる二人組の仕業らしいってね。だからちよつとからかいに来たってわけ」

あれ、今言ったことと矛盾してないか？

「先輩、それ結局オレに会いに来たってことになりませんか？」

「キミはついでだよ。あたしの目的は番長君の方。まあキミはからかいがあるからちよつと遊んであげただけさ。こんな素敵なお姉さんに遊んでもらえるなんて、光荣でしょ？」

「……オレはおもちやじゃありませんよ。それに、光荣どころか何の罰ゲーム、つてな感じですよ、こつちとしては」

思わずため息が出てしまう。こつちはそんな遊ばれてる場合じゃないってのに。

「少年、毎度毎度失礼なことを言うじゃないか。お姉さんはショックだぞ？ こつち見えて繊細な乙女なんだから」

はいはい、ガラスのハートなんですわね、わかります。ええ、分かりますとも。いっそのまま砕けて下さい。そうすれば厄介なのは番長と土岐野だけになりますから。その二人もかなり厄介だけど、

多分あなたが一番ですから。

そんなことを思いはしたが、呆れた僕は口に出すことまでしようとは思わなかった。その労力ですら無駄だと感じたのだ。

「そうですか、すいませんでした。あと先輩、多分番長はもう教室にはいないと思いますよ。今頃真犯人を探してどっか行ったんじゃないですか？」

自信は無かったが、アイツがただ黙ってじっとしているようには思えなかった。無駄だと分かっても女子に迫っている気がした。真犯人の情報を集めるために。

「あ！」

そうだ、まだ番長に仮面野郎のことを伝えてない。せめてそれを教えてやらないと……女子を変に刺激しないためにも。

「先輩、ちよつと番長を探します。ちよつと言つとかなきゃいけないことあるんで」

「ならあたしも行くよ？ ちよつと事情を聞きたいし」

来るのかよ、先輩。つてかそもそもあなた鞆も靴も二年棟じゃないのか？

「多分外かもしれませんよ？ 今から二年棟戻ったら時間かかるんじゃないんですか？」

「ああ、それなら大丈夫。ほら」

先輩は自分の足元を指差した。履いているのはバスケットシューズだ。うちの学校は上履きに厳しい指定はないので、「室内専用の靴」なら基本何でもありとなっている。

「いや、そのバツシュ、上履きでは？」

「残念。実はこれ、スニーカー代わりに外で履いてるものなのだ」  
それ、見つかったら厳重注意でさらに没収ですよ。

「実は一回外出ただけで、そういえばって思ってたさ。二年棟に戻るのも面倒だからそのまま一年棟に上がりこんだ、ってわけ」

そんなくらいちゃんと戻れよ。むしろ、そのまま帰れ。

「じゃ、鞆は？」

「基本的に置き勉だから問題なし！」

筆記用具も学校置いてくのかよ。家でどうやって勉強してんだ、この人。

「部活は？」

「今日も自主休部ってことで」

やる気あんのかよ。ついこの間だって部活休んで六道館に張り込んでただろ？ ってか部員、ちゃんとこの人に部活動させてやって下さい。そうしないと主に僕が困りますんで。

「……分かりました。んじゃ、行きましよう」

こうなったら仕方ない。先輩がいると僕の精神的疲労が増えるが、もう我慢しよう。

番長、出来ればこの学校の敷地内にいてくれ……

「番長！」

思ったよりその姿は早く捉えることが出来た。というより、予想に反して彼は教室にいた。念のために教室も、と戻ったらそこにいた、というわけである。何やら真剣に考え込んでいるようだった。

「なんだ、まだ教室にいたのか。良かった。実は、犯人の事で分かった事があるんだ」

言うなり番長は立ち上がり、こちらに迫ってきた。口に出していないが「本当か？」という様子で、視線を僕の方へ向けていた。

「さつき耳にしたんだけど、なんか仮面を被った人物が更衣室の窓から入ってきて、女子達に何かしたらしい」

もっとも、肝心の何をしたかが分かっているのは痛い。被害状況が飲み込めないからだ。

「やほー、番長君。元気かい？」

完全にマイペースなノリで先輩が後ろから続いて教室に足を踏み入れてくる。正直番長も元気づってほどではないだろう。

「いやあキミの事だから覗きなんてしてないとあたしは思うわけだ。だから真犯人探しを手伝いに来た」

「俺はただ悲鳴を聞いて現場へ向かったただだけだ。その扉を開けたら女子に叫ばれた」

珍しく番長が二文節以上喋った。待て、それは自分の首を絞めるぞ。世間では何であれ、男が女の子の着替えや入浴シーンを意図しようとしまいと見てしまったら覗きつてことにされるんだ。今は自由と同じだぞ？

「うん、今キミは堂々と覗き宣言をしたように聞こえたけど、それはお姉さんの気のせいだよな？ 悲鳴を聞いて駆けつけた、ってこ

とでいい？」

先輩、そこスルーですか、そうですか。

「なるほどなるほど。でもなぜか現場近くにいた二人に疑いが向けられた。不運だねえ」

「あの、先輩……」

「ん、なんだい少年。これは完全に濡れ衣じゃないか。全くけしからん。これは捕まえて女性達の前に晒して辱めてやらないと」

とりあえず先輩の頭の中では、僕らは完全に無実だということになっていった。都合がいいと言えばそうだが、D組とC組の女子は少なからず番長の姿を見ているはずだ。土岐野の言葉からもそれは明らかなことである。

「よし、お姉さんが協力してあげよう。こういうのは女性であるあたしに任せなさい！」

もはや有無を言わず行動を開始する先輩。番長はそれを静観しているのか、ただ呆気に取られているのか、表情からはどちらかは分からない。この男の感情を読むのは非常に難しいことだ。

「よ、そのキミ」

先輩は僕らのクラスの女子に声を掛けていた。いきなり話しかけられてびっくりしているようだ。

「ちよつと聞きたい事あるんだけど、いいかな？」

先輩の前にいる二人の生徒は、訝しそうにしている。今日起こった出来事はそれほど口にしづらいことなのだろうか。それとも、単に僕や番長と交流のある先輩を煙たがっているだけなのか。

「おつと、ここじゃ話しづらいか。じゃ、二人ともちよつと来て」

先輩は強引に二人をベランダの方へ引っ張りこんだ。ガラス越ししか様子は窺えないが、何やら最初は言い争っているようだった。しかし、段々と先輩のペースになっていき、仕舞いには先輩が二人の話にじっくりと耳を傾けているようだった。

「やあ、お待たせ」

そして僕らの方へ悠然と歩いてきた。

「分かったか？」

番長が口を開く。

「いろいろと、な。まあこの教室じゃなんだから外行くよ」

確かに、まだ数えるほどとはいえ、女子も残っているこの教室では話しにくいものがある。単に僕の場合、視線に耐えられないというのもある。

移動した先は中庭の噴水広場前だった。ここなら、ゆっくりと話すことも出来る。

「で、さっきの子達からの情報だと……」

「先輩、それよりよく聞きましたね。最初は避けられてるように感じたんですけど」

「まあ、あたしにかかればあんなもんよ。人間、話せば分かってもらえるのさ」

「何一つ答えになつてませんが、まあいいです。それで？」

なんか先輩のペースに押し切られたからつてというのが一番ありそうだ。ちなみに、次の日以降先輩の噂がまた一つ増えることになる。

「男も女も、あの人の前ではあらゆる意味で平等だ」と。すごく深い意味がありそうだけど、あまり考えたくはない。

「随分冷めてるじゃないの。辛いことがあつたならお姉さんに相談なさい。あ、その前に覗き魔ね」

本音を言わせてもらえば、辛いのはあなたのペースに巻き込まれることですよ、作楽先輩。

「犯人は更衣室の上にある小窓から進入してきた。大人一人がギリギリ通れるかどうかだけど、外からだが高すぎて足場がなければ入れない。そこからするつと入ってきたとき、みんなが悲鳴をあげた。正確には、侵入してきた人物の仮面を被った顔を見た時、みたい」

女子更衣室は一階にある。中がどうなっているかは分からないが、校舎の外から見た時、教室のような大きな窓がない箇所があつたので、そこが更衣室であるような気はした。ただ、その窓はいわゆる換気用のものはず。その手の窓の開閉は室内のボタン操作だった

気がする。

「入ってきた人物の仮面は、なんかゲームに出てくる呪いの仮面みたいなデザインだったみたい。なんかどっかの民族が儀式で使ってるようなけつたいなものだとも。で、服は全身黒タイツ。体格的には男っぽかったつて。で、そいつが着替えてる女の子の下着を無理やり脱がせようとしたり、ロッカーの中の服を荒らしたり、身体に触ったりと好き勝手に暴れまわった」

それはまたなんて卑劣な。男としてそのような行動をする勇氣には感嘆する。ただし、まるで褒められたものではない。

「それで、身軽な身のこなしで窓から出て行った。窓は高さ二メートルのところにあつて、ロッカーを足場に器用に飛んでいったみたい」

「にわかには信じ難いですね」

先輩の話によれば、犯人はかなりの身体能力の持ち主だ。そんな人間がわざわざけつたいな姿で女子更衣室に侵入する意味が分からない。

「あたしも。そんな事するくらいなら堂々と覗けつての。根性無しめ」

「先輩、そこじゃありません。それにむしろ根性ありますよ、犯人は。いくら仮面で顔を隠していたとはいえ、黒タイツですよ。学園祭の仮装でもない限り、そんな格好はしませんつて」

顔を隠していさえすれば何をやっても恥ずかしくないというわけではない。祭り好きな人間ならその間は目立とうとするかもしれないが、日常生活でもそういう振る舞いをする人間は少ない。

……うん、そのはずだ。ここにいるジャージと学ランは少数派のはずだ、絶対。私服校だからよほどの事が無ければ服装の制限はないとはいえ、全身タイツで授業を受ける奴はいないだろう。いたら困る。いや、僕は別に困らないが、学校のイメージ的な意味で。

「少年、キミは今実にいい事を言った！」

先輩は何か閃いたように、手のひらをもう片方の手でぽんと叩い

た。

「何がです?」

「学園祭、それだよ、それ」

「え、言いましたけどそれが何か?」

「もうすぐ学園祭準備期間が始まる」

静かに番長が呟く。

「と、くれば何か変なものを見ても『学園祭の準備中に悪ふざけでもしてる』で済まされる」

「で、番長。だから」

そこではつととなった。今月の授業日程を思い返してみる。もうすぐ準備期間に入る、正確には……

「つてもうすぐつーか明日からじゃないか! ん、そうなるとおかしい。なぜ犯人はなぜ今日行動をしたんだ?」

もし明日以降なら校内をけつたいな姿で歩いていても問題ないし、侵入も楽だったはずだ。明日は確かS組とA組も体育はある。犯行には騒ぎを起こす以外特別意味があるとは思えない。

「ん、少年、分からないのかい?」

先輩は既に分かっているようだった。

僕も考えてはみた。明日ではなく今日である理由。うちの学校の生徒の多くは準備期間がいつからかは知っているはずだ。そうでなくとも期間中は生徒が休み時間や放課後に作業をしているので、自然と気づけるはずだ。

ということとは……

「犯人は学園祭準備期間が今日だと勘違いしていた学校外の人間、ということですか?」

「……少年、キミ馬鹿でしょ」

先輩は心底呆れたように言い放った。

「その犯人は、あえて今日にしたのだよ」

「どういう意味です?」

「明日から準備期間ということは、この学校の多くの生徒が知って

る事実。うちの学校も祭り好きは多いしな。裏を返せば、他校の人間はそこまでは知らないってことになる。すると、キミみたいに『犯人は外部』だと思ひ込む」

「じゃあ、犯人はうちの学校の生徒ってことになりませぬ」

先輩の言葉を信じればそうなる。こちらの裏を搔いてきた事に他ならないからだ。

「そうなるよな。まさかキミ達が身代わりになるなんて思っただけじゃなかったらうけどさ」

ただ、まだ頭の中はもやもやしていた。休み時間とはいえ、授業が終わっているわけではない。十分間のうちに着替えて侵入して逃げてまた着替えて教室に戻る、そんな芸当はほぼ不可能だ。クラスは全部で八組あるが、それは二階と三階にある。一階には一年担当の職員室と、女子更衣室、その他音楽室や視聴覚室のような特別教室があるくらいで、普通の教室はない。他の学年も大体同じ作りだ。

距離の問題で、二年生、三年生はまず不可能。窓から出ていったのならば、一年生にも無理。更衣室の位置は校舎の出入り口から離れているからだ。着替えてからどんなに走っても、教室までは五分はかかる。仮に出来たとしても、教室に入るのはギリギリ、息も絶え絶えという状態になる。騒ぎの後ならば疑われるだろう。

ただ、今のところそんな生徒がいたという話は一切聞かない。そう考えると一年でもないのだろう。

「でも先輩、学校にいる人間には不可能ですよ」

「正確に言えば、『登校している人間』には、な。欠席者のこと、頭にある？」

「あ……」

そうだった。すっかり忘れていた。この学校の人間でも、今日学校を休んでいればいくらでも行動が出来る。

「休んでる人だって、仮病だってこともある。あたしも何度かズル休みしてるし」

いや、ズル休みするなよ。普段バスケット部サボってばかりだから驚きはしないけど。

「それじゃ、今日の欠席者を調べましょう」

「甘いぞ、少年。この学校の教師がそう簡単にクラスの出席簿を見せてくれると思う？ ただでさえ名簿の盗難事件があったばかりなのに」

それもそうだ。いかなる理由にせよ、生徒に見せてくれるとは思えない。しかも、うちの学校の場合、教師はパソコンで出欠を取っているのだ。

「……と、普通はそうなるのだけれど、実は抜け道がないわけでもない」

「どうするんですか？」

「キミはこの学校の出席簿のシステムをどれだけ知ってる？」

「パソコンを使ってデータ上で記入している、としか知りません」

「じゃあそのデータはどうしてると思う？」

「え、先生のパソコンの中に入ったままじゃないんですか」

データとして取っておくならそうなる。要はパソコン＝出席簿なのだから。

「違うんだな、これが。その日の出席データは次の日には教師のパソコンから消去される」

「え、それじゃ年間の出欠確認が出来ないじゃないですか」

そうだ。一日で消えてしまっていたら、後々確認することが出来ない。そうなると、そのデータがどこか別の場所に保管されてるとしか考えようがない。

「そ、だからデータはこの学校のホストコンピュータに移される。それで、成績通知表を書くときにそこに保管されてるデータを参照するってわけ。しかも、ネットワークは校内専用回線だから、外からハッキングに遭う心配もない」

「なら尚更調べるのは難しいじゃないですか」

それだけ嚴重に管理されているなら、僕らのような一生徒に成す

術はない。はずなのだが……

「ところがそうじゃないんだな、これが。学内専用回線、ってことは校内からなら接続することが出来る、ってことでしょ？」

「でもパソコン室の生徒用とは分断されてるんじゃないんですか？」

「うちは一応進学校ですし、ハッキングが得意な人がいないとも限りませんし」

「それでも、あの部屋にもちゃんとあるでしょ　教員用のパソコンが」

「一台、確かにある。それで生徒用のコンピューターの管理とかを情報の教師がやっていた気がする。そうか、あれなら……」

「分かりました。じゃあ行きましょう！」

よし、僕は立ち上がった。そのまま一年棟のパソコン室へと歩を進める。放課後ならパソコン室にもそんなに人はいないはず　ん、待てよ。もし誰もいないってんなら鍵閉ま

ってんじゃないか？

「……やっぱりか」

一年棟、パソコン室前。不安が的中したというか、案の定鍵は閉まっていた。開けるには情報の教師か職員室から鍵を借りなければならぬ。

ここで、もし僕が不良高校生だったなら、間違いなくピッキングという手段を試みるだろう。ただ、僕は不良ではない。それに、鍵と言ってもカードキーだ。これではピッキングのしようがない。

「どうします？ 二年棟のパソコン室にでも行きますか？」

「うーん、多分二年棟も閉まっているはずなんだよな。かと言って三年棟に入るのはいくらあたしでも気が引けるし……」

今日のところは諦めるしかないのか。

「問題ない」

そう言ったのは番長だった。すると彼はぺしゃんこな鞆から薄型のノートパソコンを取り出した。あれ、鞆の中それってことは勉強道具はどうしてるんだ。コイツは？

「おい、何をやる気だ？」

番長は答えず、カードリーダーがあるパネルを器用に開く。その中に使われてない端子があったようで、そこにケーブルを差し込んでいた。

目にも止まらぬ早さでキーボードを打ち込む番長。すると、かちやっという音が聞こえてきた。

「開いたぞ」

番長が扉を押すと、すんなりと開いた。まさか三十秒もかけないで開けるとは。つーか見た目とやっつてることが合わな過ぎるだろ。それと、このご時世にケータイを持ってないのになんでコンピユ-

ターに強いんだか。これも理系の成せる技か？

「どうやったんだ、これ。カード無しで開けられるもんなのか」

「直接回路に繋いで認証させた、それだけだ」

簡単に言ってくれるなよ。こっちは中学からパソコンいじってるのに、ワードとエクセルすら満足に使えないつてのに。

パソコン室に入り、照明のスイッチを押すも明かりはつかない。

それもそのはず、ホテルとかと同じで、カードキーを室内にある装置に差し込まないと、全ての電源が入らないようになってるのだ。「参ったな、入れても電源がつかなきや意味ないぞ」

するとまた番長は装置のパネルを開け、中にケーブルを差し込む。もちろんそれは彼のパソコンと繋がっている。

「あれ、電気が……点いた」

番長がやってくれた。ただ、ここで考えを改める。明かりが点いたら、見回りが来た時に無断で入ったのがバレる。それはまずい。「番長、やつぱり明かりは消して。ただパソコンの電源だけは入るようにしてくれ」

彼がパソコンを操作すると、電気は消えた。

「よし、あたし教員用のパソコン触ってみたかったんだ」

先輩は教員用パソコンの電源を入れた。起動音が鳴り、画面が表示される。

「あちゃー、今度はIDとパスワードだつて」

先輩は困ったような顔をして画面を凝視している。そこには教員用のIDとパスワードの入力フォームが表示されていた。

「番長、これ何とかなんねーか？」

僕が呼びかけると、彼もまたこちらにやってきた。パソコンはパネルに繋ぎっぱなしだが、どうやら今はあのパソコンが電源のコントロールパネルになっているらしい。

「簡単だ」

ただ一言、それだけでまた自分のパソコンに戻る。いや、パソコンを教員用のやつ隣の隣に持ってきて、また別のケーブルで二つのパ

ソコンを繋いだ。

今度はパソコンの画面におびただしい数の数字や記号が羅列されている。見ているだけで頭が痛くなりそうだ。

番長はただ静かにキーボードを叩いていた。それが終わると、今度は教員用のパソコンにIDとパスワードを入力、すると通常のデスクトップ画面が映し出された。

「おお、番長君、さすがさすが」

「……コンピューターに直接新しいIDとパスワードを記憶させた。ただし、一回電源を落とせば次は使えない。後になって調べられても見つかることは、まずない」

「お前、よくこんな事出来るよな。ただ好きでいじってるだけじゃこうはならないぞ？」

「興味の範囲だ」

ただ、やってることはその範囲を超えてる気がする。しかもこれから今度はホストコンピューターに侵入しようとしているんだ。

ん、番長がまさかのパソコンスキルの持ち主だったおかげで今こうしてるわけだけど、もし誰もパソコン関係が駄目だったらどうするつもりだったんだ？

忘れてた、パソコン室へ向かおうと言い出したのは僕だった。教員用のパソコンならホストコンピューターにアクセス出来ると踏んでいたから、ここに来ようとしたんだ。

「おっと、またパスワードか。もう、どうせ教職員しか使わないんだからそんな嚴重にしなくてもいいと思うのに」

「先輩、むしろ教職員でも悪用しようとする人はいるんですから。ちゃんと使用記録とかアクセス記録が残るようにしないと、機密情報持ち出し放題ですよ」

「あら、珍しくまともな事言うじゃない。キミはただの馬鹿キャラだと思ってたのに」

「誰が馬鹿ですか。基本的に僕はしっかり者なんですよ」

「どうだろうな。あたしはそんな姿見たことないなあ。良かったら

今度見せてちょうだいよ。腹抱えて笑ってあげるから」

「なんで笑うんですか。絶対にお断りですよ」

「ちえ、つれないの」

先輩は拗ねた。待て、僕は何も悪くないぞ。まず脈絡ない事言ったのはあなたでしょうが。

「うむ……」

番長は画面と睨み合っている。口では何やら呟いているが、何かの呪文のようで僕にはよく聞き取れなかった。この男、独り言になるとやたらと口数が多いと今になって初めて気づいた。

「サーバーとは繋がっている。ならばここはそのプログラムを開いて改ざんすれば……いや、そうすると怪しまれる。なら既存の情報か、いや、そうすると今のIDと認証者が一致しなくなる。だとすると……」

まだ番長は考え込んでいるようだった。時間だけがただ流れていく。あまり長く居ると、それだけでまた自分達に対する疑い、むしろもう罪か、が増えることになる。それは絶対に避けたい。

「よし」

番長はようやく何か思いついたようで、自分のパソコンのキーボードと教員用の方のキーボードの両方を目にも止まらぬ早さで叩いていく。しかしその目は画面しか見ていない。

両方の画面に何やら意味の分からない文字列が並んでいる。それが画面の中を流れていく。

それがあるタイミングで止め、その文字列を書き換えていく。それが何を意味するのかは僕には分からない。ただ、それによってホストコンピュータにアクセス出来るようになるような予感を感じた。

その通りで、教員用のパソコンにはホストコンピュータのコンテンツが表示された。当然、そこには機密事項も大量に含まれている。

その中であつた『出席簿』を開き、学年、クラス別に見ていくこ

とにする。どうやら印刷に関しては出来ないように設定されているらしい。番長にかかれればそれさえも可能に出来そうだが、万が一セキリテイに引つかかったら洒落にならない。下手をすれば、前の事件の容疑も突きつけられることになる。僕らが見逃したため、犯人は捕まっていないのだから。名簿そのものはちゃんと元の場所に戻ってはいるのだが、だからといって盗難に遭ったという事実がなくなるわけではないのだ。

「へー出席簿ってこうなってたんだ。あたし初めて見たよ」

「多分生徒で見たことある人なんていないんじゃないですか」

出席簿は思っていたより見づらかった。多分エクセルの表なんだろうけど、細か過ぎて目が痛くなってくる。？　？は出席で、？欠？は欠席か。

今日の部分を調べていく。

途中、廊下の方から足音が聞こえた。まずい、誰か来たのか？

「番長、先輩、一旦隠れて」

教員用パソコンの場所は外からは見えないから、別に隠れる必要もないのだが、こちらから入り口のガラス扉が見えるため、反射的に声に出してしまった。

「誰か通ります」

別にまだ完全下校時刻ではないのだから、足音が聞こえること自体は不思議ではない。が、ここは別だ。パソコン室付近には放課後に生徒が入りする教室はない。運動部は学生会館の裏手に全て集中している。もちろん、グラウンドも体育館も部活動専用のものがある。校舎の地下にある体育室よりも大規模なものが。

だからこそ僕らは容易に入り口まで来れたと言っている。そうでなければ、番長のピッキング（になるのか？）の現場が目撃されていたはずだからだ。

「あれは、土岐野？」

遠目にだが、恐らくそうだ。あんなOLみたいな服装、それもバリバリのキャリアウーマンみたいな姿の女子高生など、彼女以外に

この学校にはいない。何かを探しているようにきよるきよると辺りを見渡している。

「少年、誰がいるんだい？ 教えてくれよ」

「風紀委員です。何かを探しているようです」

「ひよつとして、向こうも犯人の足取りを追ってたりして」

有り得ない話ではない。土岐野は僕らに、九十九パーセントは番長ではなく僕だが、よく突っかかってくる。ただそれは、単に気に食わないという理由、だというのが今日分かったばかりだ。それでも彼女は風紀委員、今回のような事件が起こったら動き出しても不思議ではない。

「大丈夫です、通り過ぎました」

ここの鍵は中の装置と連動している。ただ、番長のことだ、ちゃんと鍵はロックしていた。土岐野がこの中も調べようと取っ手を掴んだものの、扉が開かなかつたのをこの目でちゃんと見ていたからだ。

「ふーん、風紀委員ねえ。あっちも最近事件が多いから、ウハウハじゃない」

「それじゃ事件が起こって良かったみたいじゃないですか。さすがにそんな不謹慎な事考えてるわけじゃないですよ」

「どうだかね。実際問題、あの人達って風紀を守るって言うより、悪を問答無用で裁きたいっていう人種なんだよ」

「冷めた事言いますね。何かあつたんですか」

先輩にしては珍しくドライだった。人類皆兄弟みたいな思想の持ち主だと思つたが、それでもない、ということか。

「ま、ちよつといろいろと……な。特にうちの風紀委員なんて、下手なチームよりもずつと性質が悪い」

「どうのことですか？」

「チームの存在が悪だと判断したら、徹底的に潰す。当然、学校や自治体の同意も得た上で、ね」

「それってチームってのが不良の集まりだと思われてるからじゃな

いのですか？」

チームとか、集団を作って争ってるなんて聞くといいイメージは浮かんでこない。それというのも、暴走族やカラーギャングやチーマーというものを連想するからだろうか。

「実際そういうものもある。けど、四大勢力の一角とその傘下を除けば、他はそんなに害はない。チーム同士で争うことがあっても、それは当事者以外を巻き込まない方法で行われる……ってちょっとしやべり過ぎたかな。さて、名簿チェック、と」

先輩は途中で話を打ち切った。どうにもチームとやらの実態が掴めて来ない。当事者以外は巻き込まないってことは、何かしらチームと関わることにならなければ知るのには難しい、ってことか。

「うーん、うちの学校は優秀だ、欠席者が思ったよりもずつと少ない。これなら容疑者は絞り込めるかも」

既に名簿は大部分を調べ終えていた。先輩と話している間に番長が一人でやってくれていたおかげではあるが、このペースなら完全下校時間よりも大分早くここから出れる。

「絞った後はどうします？」

「本人のもとへ突撃！」

「住所までは分かりませんよ」

「電話帳があるじゃないか」

まあその通りだ。ただ、いきなり見知らぬ他人に「あなたは仮面と全身タイツで女子更衣室に侵入しましたね？」と聞かれても、ぽかんとするだけだろう。それ以前に犯人であったとしても、「はい、そうですか」と認めるはずがない。

「少年、大丈夫だ。あたしには秘策がある」

「なんですか、それ」

「教えることは出来ない。秘策と言ってるのに人に言ってしまったら秘策でもなんでもないじゃないか」

それを自称秘密結社とやらにでも言っちゃって下さい。人に知れてる時点で秘密じゃないよな、ほんとに。

「分かりましたよ。おっと、これが最後のクラスですね」

画面は三年G組のものを映していた。余談になるが、うちの学校のクラスは成績優秀特待生専用のS組と、準特待並びにS組を除いた（S組には特別選抜試験と呼ばれる、一般入試とは別枠の試験があるため）入試での得点上位者が所属しているA組がある。残りは成績に順に分かれている。そのためHクラスのアルフアベットが傍から見たら合わないのである。AからHではなく、S+AからGという編成なのだ。

「G組には欠席者はいない、と。番長、今日の欠席者は？」

「十二名だ」

「思ったよりも大分少ないんだな」

クラスに一人くらいはいるものだど踏んでいたが、ちゃんと来てるもんだな。欠席理由が分かればもつといいんだけど…

「名前の枠内が色ついてるのは不登校だな。後期になって一度も来てない人とかだけだし、ついてるのは」

先輩は名簿を戻しながら説明する。なるほど、この学校には四人も不登校がいるのか。これを多いと見るか少ないと見るか…

「じゃ、長居は無用。行くよ、明日からとりあえず不登校以外の生徒当たってこよう」

となると八人か、明日来るかは分からないがまだ知らぬ秘策も先輩は持っているんだ。なんとかなるだろう。

速やかにパソコンの電源を落とした。その間、番長は自分のパソコンで今の記録を全部消していた。もはやハツカーだな、コイツはなんで有り得ないほど数学が出来てコンピューターに精通しているくせに、地図が読めないんだ？ それだけの思考力があれば地図なんて数字的な座標に置き換えたりもできるだろうに。疑問だ。

「よし、誰もいない、と。出るよ、二人とも」

番長は先輩の声を聞いてロックを外し、パソコンをパネルから外して鞆の中に戻した。どうやら扉は中の電源が完全に切れるとオートロックが作動するらしく、廊下に出て扉を閉めると、そのまま鍵

もかかった。

時間は、午後六時半。完全下校まであと三十分。

僕ははひとまず明日の相談をして、とりあえず昼休みに集まろうということになった。なんかこの展開はこの前の事件の時を思い出す。もつともあのときは放課後に重点を置いてはいたのだが。

聞き込みも考えたら、確実に校内のどこかにいるであろう昼休みの方が、捜査も進むだろう。いなければ放課後にその人の自宅に直行すればいいだけだ。作楽先輩が。

この時はそう考えていた。もしこの後何事も無かったら、予定通りに行動を開始するはずだった。しかし、そうはならなくなってしまうなどと、この時の僕には考えることが出来なかった。

正門を出て、先輩と別れてバス停まで歩いていく時だった。途中までは方向が同じ番長も隣にいる。まあこの男の性質上、あまり会話は盛り上がらないので、積極的に話すことはあまりない。

そんな僕らの前に、予想だにしない人物が現れた。民家の塀の上からこちらへと飛んでくる影があった。暗がりの中でそれに気づけたのは、ちよう街頭があったためかもしれない。三人分の影は二人では映りえない。

「っっ！」

そいつは飛び蹴りをしかけてきた。気づくのが早かったおかげで、なんとか避けることが出来た。咄嗟に僕も身構える。

蹴りには失敗したが、着地は成功したようだった。すぐに体勢を立て直し、こちらを向き直る。

その姿は、作楽先輩から聞いていた犯人の特徴と一致していた。どっかの民族が使っていきそうな木彫りの仮面。黒の全身タイツ。そいつが目の前に立ちあはだかっている。

こいつを捕まえられれば。

だがそれは難しい。プレッシャーからするに、相手はかなり手強い。辞めてしまったとはいえ、小さい頃から中国武術を習っていた身だ。形意拳、だったっけか、正確な名前はどっだった方がいいが、自分よりも強い人間や師範代の発する気迫のようなものに当てられてきたため、相手の強さはある程度読める。

さらに先輩の話を参考にするならば、相手の身体能力はかなり高い。僕みたいな喧嘩もろくにしたことのない、さらに体育でも並程度の能力だと判断されているんだ、勝ち目は薄い。

しかも隣の番長に圧倒されている気配はない。これは、番長を決し

て見た目だけで判断していないからだ。そして、自分の分があると確信している。

そしてこの事が意味するのは、番長が目の前の人物より喧嘩は強くないであろうということである。間違いなく前の仮面野郎、改め？ タイツ仮面？は何らかの武術、もしくは格闘技に精通している。

自分以上に、相手の力量を纏う空気を感じることが出来ているはずだ。番長に気圧されていないのが何よりの証拠である。僕は彼の見た目にかつて圧倒された経験があるからだ。

達人になれば、その気配を絶つことも出来るというが、どんなに強面ででかい図体をしていても、たかが高校生にそんなことは不可能だ。

相手は数瞬様子を窺い、僕ではなく番長の方へ飛び込んでいった。「ぐおっ」

番長は避けなかった。仮面野郎のストレートパンチをもろに腹に食らっていた。続いて足払い。たださえ体勢を崩しかけているその巨体が、これによって完全に傾く。

まずい！

咄嗟に僕は飛び出した。仮面野郎が倒れゆく番長の頭部にかかと落としを食らわそうとする直前だった。

「……つてえ」

さすがに腕一本で受け止めるのはきつかった。むしろ受け止め切れなかった。右腕が嫌な音を立てる。

「番長！」

僕が受け止めたおかげで、今の一撃は防げた。それでも番長のダメージは大きいようだ。

タイツ仮面は後方へ飛び、態勢を整える。あのまま一度に二人をまとめて倒そうとは思わなかったということか。

こちらも構えを解かずに警戒を続ける。間合いは十分、向こうも確実に仕留められる見込みは薄いと考えたのか、様子を見ている。

しかしその膠着状態は一分もしないうちに解かれた。

番長が敵に向かって自分から飛び込んでいったのだ。一步、たった一步踏み出した瞬間、僕はこの後の展開が予測出来た。

「バカ、行くな！」

だがもう遅い。敵の間合いに入った瞬間、番長はやられる。それを黙って見過ごすことは出来ない。いくらアイツが僕にとって迷惑でも、見捨てるのは心苦しいからだ。

タイツ仮面の動きは早い。番長とは下手をすれば頭一つ分くらいの身長差があるのに、その場で身体を捻りながら軽く跳躍、そこから繰り出されるのは上段回し蹴りだ。

確実に仕留める気だ。軌道は弧を描くように番長の首筋に向かう。  
「っ！！」

番長の目は見開いていた。その巨体の裏から回り込み、陰から敵の不意をつこうとしたが、僕はそれに失敗した。相手の蹴りの方が早かったのだ。

「な、ぐあっ！」

横倒しになる番長の身体に押し潰される。まさか相手はこれを狙ったのか？

だが、僕に全体重がのしかかることはなかった。

「……………」

番長の顔は見えない。だがその表情は苦悶に満ちていただろう。何せ彼は咄嗟に右腕だけで自分の体重を支えていたのだから。下手をすれば地面に手をついた時点で骨が折れている。

そのおかげで僕は一度転倒したものの、起き上がることが出来た。番長も再びその態勢から立ち直る。

それを待ち構えていたと言わんばかりに、僕の頭をタイツ仮面は踏みつけてきた。

コンクリートにぶつかる衝撃音が僕の頭に直接響いた。痛いという感覚はない。ただ、何か頭が揺れるのを感じた。ぐわんぐわんと変な耳鳴りがしたり、視覚が乱れたりしている。何だ、これ気持ち悪い……………

もはや立ち上がるのは困難だった。かろうじて見えている目の先にはサンドバッグのように袋叩きに遭う番長がいた。

「ば、ばん、ちょ、う」

もう声もろくに出ない。あれだけの集中攻撃を浴びているのに、番長は立ち上がり続ける。何度も。どれだけ足掻いたところで目の前の敵に勝ち目はないというのに。

「や、め……ろ」

もちろんこの声は聞こえていない。タイツ仮面は番長が完全に倒れるまで痛みを与え続けるつもりだ。

「……」

ただ何も言わず、機械であるかのごとくその手は休むことを知らない。

「もう、だめ……か」

自分は今にも気を失いそうになっている。番長も何度も立ち上がるが、そろそろまともに立っているのが辛そうだ。

その時だった。

「……っ！！」

ひゅん、とタイツ仮面の眼前を何かが掠めていった。

それはそのまますぐ脇のコンクリート塀に突き刺さる。

木刀？

おかしな光景だった。普通、コンクリートに木が刺さるか？ だが、目の前には確かに存在している。もし当たっていたら、ただでは済まなかっただろう。

敵の視線はもう僕にも番長にも向いていない。木刀の飛んできた方向をただ見つめている。

現れた第三者は敵か、味方か？ 僕らを助けてくれたのか、それともこの仮面とは別に僕らを狙っている人物なのか。

視界はぼやけており、その姿を正確には捉えることが出来ない。

ただ、今目の前にいる敵よりも強力な殺気を感じる。まともに向かい合ったなら、立てなくなるであろうほどの。

敵もヤバいと感じたのだろう、機敏に塀の上に飛び乗り、器用にその上を駆けるようにして逃げていった。

「助かった……のか？」

まだ安心していいわけではない。だが目の前の脅威はひとまず去っていった。気が緩んだのか、一気に意識が遠のいていく。

番長も限界だったようだ。息を上げながら、その場に膝をついている。ぼんやりとはあるが、その姿は捉えられた。

かつかつと足音が聞こえてくる。木刀を投擲した張本人だろう。

背はそれほど高くない。男なら低く、女なら平均より高いくらいだ。

服装はどつやら制服のようだ。それに髪が長い。

僕が覚えているのはそこまでだった。目の前が真っ暗になり、気付いた時には家の近くにあるバス停のベンチに座っていた。

気を失っていたのは確かだが、ここまで運んだのはあの木刀の人だろうか？

「真犯人、見つかったつてさ。良かったな、少年」

次の日の昼休み、僕は作楽先輩と顔を合わせていた。番長はいない。と、言うのも番長は怪我のため休むと学校に連絡があったからだ。無断欠席しないあたり、律儀なヤツだ。もつとも理由は、「道端で転んだ」というものだったが。もちろん嘘だ。それは昨日一緒にいた僕が良く知っている。

「それにしても、まさかうちの学校の不登校、それも三年生だとは。しかも不登校の癖に道場通いで鍛えて、だって」

「なるほど。どんなものは知りませんが、あの身のこなしからすれば納得は出来ますよ」

「へー、まるでその目で見たようなことを言うんだな」

僕はまだ昨日のことを先輩には喋ってない。僕は午前中に病院に行っただが、幸い脳にも異常はなく、右腕も打撲程度で済んでいた。衝撃の度合いを考えれば、骨にヒビが入るか、下手すれば折れていてもおかしくなかったというのに……

「言ったじゃないですか先輩。更衣室に犯人がどうやって入り出ていったのか。その話だけで想像出来ますよ」

「おっと、そうだったな。ごめん、ごめん」

「まったく、しっかりして下さいよ」

あはは、と先輩は笑う。この先輩のことだ、こうやってとぼけたように見せかけているだけの可能性もある。未だに心のうちが全く読めない人なのだ。

「いやいや、実は寝不足なもんでさ。頭が働かなくて三歩歩いただけで記憶喪失に……ああ、ここはどこ？ キミは誰？」

「ここは学校、オレは更屋敷修です。つてか三歩歩いて忘れてたら

日常生活送れませんよ。あれ、じゃあ二ワトリってどうして生活出来るんだろ?」

「それはね、本能に忠実だからなのだよ少年!」

「普通に記憶あんじゃねーかよ!」

「なんだい少年、先輩にはもつと敬意を表したらどうだ。口が悪いぞ?」

ああ、もうめんどくせ。

いつものコミュニケーションとはいえ、この人はこんなこととして何が楽しいんだか。しかもポケたいんだかツツコミたいんだか……  
「はいはい、すいませんでした。それで先輩、犯人が見つかったとはいえ、結局のところ動機とか分かったんですか?」

見つかった、というよりは捕まったという方が正しいのだろう。

まだ警察に届けられているのかは把握していないが、やったことは明らかかな犯罪である。

「それが『むしゃくしゃしてやった。今は反省している』だってさ」「うわー、何ですかその定型文は。もし犯罪の動機集なんて本があったら最初の方に載ってますよそれ」

ベタ過ぎる。大体、むしゃくしゃした程度で話にあるようなアクロバティックな動きをしたり、昨日のように一方的な暴力を振るうか? 後者の方は分かるが、あの戦い方はどう見ても冷静な人間のものだった。

「と言つても今日だからなー、そいつだって分かったの。詳しいことは今後分かるんだろ?」

先輩は楽観視しているようだ。僕にはそうは思えない。それどころか、今回の事件に関しては何も真相は明らかにならないような気さえした。

なぜだろ?」

未だに謎が多すぎる事件。

今回の仮面タイツによる覗き。

前回の名簿盗難。

そして、昨日僕らはなぜ襲われたのか？

「そういえば先輩、気になったことが」

「なんだい、少年？」

先輩は快く笑顔で質問に応じる。

「前に物騒な事件が起こってるって言ってましたよね。うちの担任、たまに朝のホームルームでその事に触れるんですが、詳しいことは何も教えてくれないんですね。それってもしかして、学生が暴行を受けた、とかそういう類の事件なんですか？」

帰りは気をつける、とその際に先輩が言っていた気がする。

「正確に言えば、どつかしらのチームに属してる学生、だな。一ヶ月くらい前、例の盗難事件があるよりも前からだよ、それは」

「チーム同士の抗争ですか？」

「有り得なくはない、かな。あの可愛らしい坊やも絡んでそうだけど、そんな事が出来そうではないのはよく知ってるはずだよ」

名もなき新興チームに属しているという、少女系の少年、音川優盗難の件も考えれば、彼のチームが関わっていきそうではある。ただ、その実態は不明。音川にはその後何度かあったが、特に変わった様子はなかった。なぜいつも女の子の姿なのかは不明だが、その格好じゃ男子校に通えないだろ。もしかしてお前は真正なのか？

「ですね。彼にはおそらく無理です。そのチームの他のメンバーについては分かりませんが」

「あたしもチームについての細か過ぎる所は分からないよ。前にも言ったように、チームは関係のない人間は巻き込まないからな。この事件にまで首を突っ込む必要もないのだよ、少年」

むしろもう事件は御免被りたい。この場にもし番長がいたら嫌でも関わることになっていただろうが。あの正義感、もとい正義漢はこういうことを放っておけないのだから。

「大丈夫ですよ、番長と違ってそんな気はありませんから。ん……？」

ちようどそこまで口に出した所で、近くにいた人の姿に気づいた。

土岐野だ。今は中庭にいるから、別に出くわしたって不思議ではないが、なぜ目が合ったからってこちらにやって来る必要があるんだ？ 気に食わないんなら無視しろよ。

「命拾いしたわね、更屋敷」

「何だ、また嫌味でも言いに来たのか？」

僕は呆れていた。まったく……

「ふん、私がいつ嫌味を言ったのよ。勘違いも甚だしい」

「お前ほどじゃねーよ！」

「いつつも勝手に人を悪者扱いしてるお前に言われたかねーよ。」

「お、モテモテだな少年」

「何をどう見たらそうなるんですか」

「あなたは黙っていて下さい！」

二人して先輩にツッコミを入れる。少しは空気を呼んで下さい。

「……だめよ、愛沙ちゃん。そんな風に強く当たっちゃ」

聞き慣れない声の中庭に響く。誰だ？

「……委員長」

土岐野の視線の先にその人物はいた。ウェーブのかかった肩まである髪、ロングスカートに白いワイシャツ、その上にカーデを合わせている。少し目つきは悪いが、それでも知的で穏やかな女性である印象を受ける。

「まともそうな人だ。この人が風紀委員長、ってことか。」

「ごめんなさいね、うちの後輩がまた変な思い込みをしてたみたい

で。あら、<sup>しの</sup>凌ちゃん」

風紀委員長は作楽先輩の方へ視線を向けた。

「お、久しぶり！ 相変わらず目つき悪いねー」

先輩は笑顔で答えている。

「凌ちゃんこそ、相変わらずジャージで、バスケ部らしいわよ、ほんとに」

「あはは、褒められた。いやー、これぞマイ・アイデンティティ。

この姿じゃなかったらあたしは所詮一般生徒Aに過ぎないのだ」

「褒めたつもりじゃなかったのよねー、ふふふふ」

顔を合わせて笑い合ってる。別におかしなところは何もない、はずだ。会話の内容を無視すれば。

以前先輩は風紀委員に対してあんまりいい感情を抱いていないよ  
うな素振りを見せた。昨日のことだ。ただ、目の前の先輩を見てい  
るとそこまで仲は悪くはない、ようには見える。ただ何か怖い。

「先輩、知り合いなんですか？」

「おうよ少年。この委員長殿とは浅からぬ因縁があるのだ。腐れ縁  
ってやつかな。今三年生つてこともあって、最近はあまり合う機  
会がなかったんだな、これが」

ってことはやっぱり三年生だったか。すごく大人びてるもんな。

僕や先輩よりも背は低いのに、雰囲気からは子供っぽさを感じない。  
その隣の土岐野にしたって、見た目だけはOLなんだが、性格が性  
格だからガキっぽいんだよなあ。

その彼女は居心地の悪そうな子を顔をしている。

「失礼します」

土岐野は一言だけ委員長に残してこの場を去っていった。

「愛沙ちゃん、なんか私のこと苦手みたいなのよね」

「そうなんですか？」

「委員会活動中は大丈夫なのよ。でも、普段は目も合わせてくれない  
のよ」

意外だ。いい人そうなのにな、この先輩。僕の隣のジャージ先輩  
にも見習って欲しいくらいだ。

「キミは仕事の時と普段でギャップがあり過ぎるんだよ。そりゃー  
さっきの子も戸惑っちゃうさ」

「凌ちゃんもじゃない。お互い様よ。そうだ、久しぶりに顔を合わ  
せたことだし、ちょっといい？」

「いいとも、積もる話もあるからな。ということだ、少年。また会  
おうー!」

「あ、ちよ……」

唐突だ。まあいいか、少し早いけど、教室に戻るとするか。

「ふう行ったようね、彼」

更屋敷修が去った後、残った風紀委員長と作楽凌は中庭のベンチを離れ、校舎の影で向かい合っていた。

「相変わらずの名演技だ、天晴れだよ」

「ふふふ、そんなあなたこそ」

お互いの感情は決して友好的なものではない。むしろ、探り探り様子を窺っている、という感じだ。

「で、どう思うんだい、風紀委員長さん」

「今日の件かしら？ 間違いない偽物、ただの身代わりよ」

「どうしてそう思うのかな？ 根拠はあるんでしょ、さすがに」

「昨日私が見た人物は、そのまま逃げていったわ。少し追いかけたら気を失ってる仮面を被った人間がいたの。で、とりあえず学校と警察に報告。仮面を外すとうちの学年の不登校児だった」

「あたしは根拠を聞いてただけだな」

作楽は顔は笑っていたものの、わずかに敵意を見せていた。

「そう急かすものじゃないわ。あたしが投げた木刀をかわせる、それでいて男二人を全く傷を負わずに叩き伏せる。それが出来る人間がそんな簡単に道端に転がってるはずがないわ」

「それはそれは、説得力のある言葉をどうも。四大勢力の武闘派でも軽く蹴散らすキミが言うんなら間違いないな」

「お褒めに与り光荣だわ。あれは只者じゃない。もしかしたら？ 零ゼロを取り巻く者アラウンド？の幹部と同等かそれ以上よ」

「あいつらと同じって……そんなのがもし四大勢力に手を出したら、下手すりゃ今のチームの均衡状態が崩れるじゃないか」

作楽は驚きを隠せなかった。この風紀委員長は嘘をついているわ

けではない。それは話し方からも分かる。

「だからこそ、早いとこ処理したいのよ。この辺り一帯の学校に通う生徒を守るためにも。本来なら、チームという集団も駆除したいところよ」

「どこのチームでも、キミを敵に回そうとは思わないよ。命あつてのなんとやら、つてもんだ」

たとえ四大勢力といえど、その中において決して刺激してはいけない外部の人間が囁かれている。それが今目の前にいる女だ。

「ところで、いつまでそんな喋り方を続けるんだい？ そろそろ普段通りになつてもいいだろうよ」

「あつちはあくまで仕事用。この姿じゃ似合わないわ。然るべき格好じゃないと決まらないのよ」

「どうだか。こつちが本性であつちがキャラ作りつてことかい？」

「そうかもしれないわね、バスケット部のエース、？サイレント ストリーム静かなる流動？さん。それとも？ミラージュ プリンセス蜃気楼の姫？の方がいいかしら」

「あらら、あたしのあだ名も有名になつたもんだな」  
作楽は恥ずかしそうに笑つた。

「知名度でいったらかなりのものよ。つてそんなことは今はいいわ。私のことよりも、もつと心配することがあるんじゃないの、さつきの更屋敷君のことか」

「ははは、あの少年なら心配いらないよ。危なっかしいことには巻き込まれない限り首を突つ込まないからな」

「……もつ巻き込まれているとしたら？」  
「どういうことだい？」

巻き込まれている？ 確かに窃盗犯と一緒に捕まえたり、犯人に間違えられたりと多少は関わつた。ただ、それは両方とも済んだ話だ。それとも……

「昨日の事、彼から聞いてないなんだ？」

「だから、もつたいぶらないでよ」

「昨日、仮面の男が生徒を襲つたの。襲われたのはさっきの更屋敷

修ともう一人。私がそれを発見してなかったら、彼は間違いなく病院送りよ。もつとも、もう一人の方はそれに近いわ」

もう一人？ 作楽は、今日は来ていない番長の事を考えた。まさか……

「なぜチームに属してない二人が巻き込まれたのか？ ひよつして心当たりがあるんじゃないかしら、凌ちゃん？」

「なくはない、かな。ただ、もしそれが原因ならあたしのせいだ」  
音川少年を逃がした時の事が悔やまれる。あのかわいらしい少年は脅されるかなんかで盗みを働いていたように感じたが、もしかしたらあれすらも演技だったのかもしれない。

「とにかく気をつけるといいわ。近いうちに何か悪いことが起こる気がするの。そうならないために私や他の委員がいるわけだけど、どうしようもないことだつてあるわ」

「弱気だね、珍しく。軽トラックを木刀で叩き壊したりする癖にそういうところは女っぽいんだから」

「仕事モードの時は気を引き締めてるからいいの。私は見ての通りごく普通の女よ」

普段は、と彼女は続けた。

「今のキミはかわいくていいんだけどなー、あたしのタイプだし。惚れちゃいそう」

「やめて、あなたの冗談はどこまでがそうなのか分からないから」

「なんだ、乗ってくれると思ったのに。あたしの知ってる方の『普段』なら脳天叩き割られてるつて考えるとちよつと怖いけどさ」

作楽は苦笑した。

「もう、そんなにかかわらないで。とにかく私達橙学風紀委員で事件は追うから、変な気だけは起こさないでよ」

委員長は困ったような顔をした。この学校の風紀委員は少数ながら、校内だけでなく地域にまで活動の場を広げている。他の五校に關しても、似たような事をしているところは多い。作楽はそのことをよく知っている。

「はは、もし何かそっちにとって困ったことをしたらどうする?」「軽い気持ちで聞き返した。

「その時は」

委員長の雰囲気が変わる。それまでの女性らしさを一切感じなくなつた。

「お前のチームを潰す。一切容赦はしない。覚えておけ」  
殺気。

目を細め作楽を睨みつけている。彼女ではなく、これが更屋敷だったらその場にへたり込んだことだろう。

「……なんだ、いつも通りの喋り方も出来るんじゃないか」

そう呟くものの、既に委員長は元に戻っていた。「分かったわね?」という意味が込められた微笑で作楽を見て、教室に帰っていった。

「いやー、ほんと怖い怖い。心臓止まるかと思つたー」

知ってる者が皆去つた中庭で作楽は一人ごちた。

「ああは言つたけど、なんとかしなきゃあたしの面子も立たないんだよな。番長君の様子も気になるし、それに何より」

にやりと笑つて、

「少年め、あたしに隠し事をするとは。後でたつぷり可愛がつてやらないとな、はははは」

と更屋敷を困らせる算段を取るのだった。

1 .

盗難事件以上にあっけなく終わってしまったタイト仮面事件から数日、その間僕の身にはこれといった出来事は無かった。

番長は犯人が見つかった次の日から学校に来た。とはいえ、かなり怪我は酷いようで、顔は半分くらい包帯で隠れていた。それが際立って、今まで以上に誰もアイツに近づこうとはしない。

今でこそ軽い怪我は治ったものの、まだ完治するには時間がかかるとのこと。骨も何本かヒビが入っているらしい。あれ、それってかなりの重傷じゃね？

「怪我は、どうだ？」と尋ねても、「問題ない」と返ってくる。いや絶対問題あるだろ。

あれから作楽先輩とは顔を合わせていない。こちらから行くことは基本的にないとしても、向こうから来ないのが何日も続くのは初めてだ。僕にとってはありがたい以外の何物でもないのだが、少し気になる。

だからと言って会いには行かないけど。

様子が違うのは土岐野もそうだ。顔を合わせればやたらと突っかかってくるのがいつもだが、最近はそれもない。何やら風紀委員が慌ただしく動いているみたいなき事々程度に聞いたことがあるから、それのおかげで僕と会う事がないのか。

こうして考えると、今は本当に平和だ。嬉しいことに今は学園祭準備期間。この学校はこの手のイベントが好きなき者が多いため、上手く立ち回れば今まで話さなかつた人とも仲良くなれる。僕は積極的に準備に参加しているため、これまでよりは、少なくともちゃんと普通に日常会話が出来る程度にはクラスメートとの距離を近づけられた。

番長の方は怪我の具合もあって、すぐに帰ることが多い。今までのように教室で話すものの、作楽先輩と三人でいる時のようにはならない。

実に平和だ。むしろこれが本来の高校生活なのかもしれない。これといって特筆すべきことはないが、決して退屈なわけではない。学園祭が終わったらどうなるかは分からないが、少なくとも今はそうだ。

中学時代のように普通でしかないとはいえ、そもそもあんな強烈な個性に囲まれていた事が異常なのだ。その普通から抜け出したいと考えていたが、あんな風な人間と同列で見られるのならば、いっそ普通で構わない。僕はそう考えるようになっていた。

「更ちゃん、お疲れ」

今日の分の仕事が終わわり、帰ることにした。外はもう暗い。

「お疲れ、また明日」

一人帰路につく。さすがにまだ一緒に帰ろうと言い出す気にはない。誘いがあれば乗るだろうけど、さすがにそこまでする人はいない。

いつものように正門を出て、バス停まで歩く。その間、特に誰か知り合いに会うこともなかった。

バス停が近づき、前にタイヤ仮面に襲われた辺りに差し掛かる。

木刀の刺さった痕はまだ塀に残っていた。あの時助けてくれた人はどんな人なんだろう？

あのままだったら僕は間違いなく重傷を負っていた。下手をすれば死んでいたかもしれない。向こうは殺す気は無かっただろうけど、どちらにしたって今こうして学校に通うことは出来なくなっていたはずだ。

脳が揺らされるような衝撃が来た後の記憶は曖昧で、僕はあの時の状況を正確に思い出すことが出来なかった。覚えているのは、当てられただけで寿命が縮むほどの殺気。それだけだった。

せめてお礼くらいはしたいな。

多分会う機会は無いだろう。相手の顔を覚えていない以上、それが誰か知る手掛かりはない。作楽先輩なら、チームとやらにも精通しているし、何か知っているのかもかもしれない。あの人が素直に教えてくれるかは微妙だけど。ま、今は考えてもどうしようもないか。

時刻は午後の六時五分。この時間のバスは十五分ごとに運行されており、次のバスまで十分待つ必要があった。しかしバスなのでよく遅れる。六時の便がこの時間に来ないということは、今日はさほど遅れていないのだろう。

珍しくバス待ちの人がいない。もともと僕と同じ方向の人は、この辺りの学校の生徒にもあまりいないのだが、それでも誰もいないというのは滅多に無いことだった。

そう思った時、新しい影が急くように走って来る。バスの時間まで余裕はあるのに、こういうことだろうか？ 気にはなったが、すぐにそちらから視線を外した。

「あの、すみません」

突然声をかけられた。今走って来た人か？ 僕はとりあえず振り向いた。

その時、僕はあまりの驚きに昇天しそうになった。

な、なんとということだ！

そこにいたのは女子高中生である。希望ヶ丘女学院の制服を着ている。だが、問題はそこじゃない。

緩く巻かれたセミロングの髪、おっとりとした雰囲気、清楚系のお嬢様と言っ言葉がよく似合う。ぱっちりとした目、整った目鼻立ち、もはやそれは芸術品と言っても差し支えが無い。いや、待てかわいすぎるだろ、なんでこんなところで僕の一番のタイプの清楚系美少女がいるんだよ。

「あの……」

美少女はこちらを見ていた。どうやら僕は茫然と間抜けな顔をし

て立っていたようだ。なんと恥ずかしいことか。

「あ、いえ、な、なんででしょう?」

落ちつけ、落ちつくんだ僕! これはチャンスじゃないか。僕にもついに運が向いてきたんだ。

「この辺で、パスケース見ませんでしたか? うっかり落としてしまったみたいなんです」 待合所のような場所の中に僕たちはいるが、近くに落ちている気配はない。あれば先に入った僕が気付いている。

「いや、見てませんね。どういうやつですか?」

「はい、色は赤でアルファベットの刺繍が入ってます。カゲツ・ヒメミヤって筆記体で」

困ったような調子で彼女は言う。澄んだ優しい、女性らしさ溢れる声だ。なんてことだ、声までピンポイントでタイプだぞ、どうしてくれる。

「見当たりませんか ん?」

ちょうど僕の目線の先。

彼女の掲げてる希望ヶ丘の指定鞆の前ポケットから何かはみ出している。

「そのパスケースって、どこで失くした事に気づきました?」

「えっと……ここからバスに乗る時に確認して、一度ブレザーのポケットにしまいました。でも降りるときに見たらなくて……」

彼女はポケットに入れる際に誤って落としてしまったと考えているらしい。

「その鞆から出てる赤いのは違いますか?」

僕は気になったままを言った。

「鞆に入れた覚えは……あ」

驚きの表情を浮かべた後、今度は顔を真っ赤にし、両手で押さえ

る。  
「す、すいません。これです。てっきりここに落としたとばかり思い込んで鞆を確認してませんでした。お恥ずかしい限りです、うう

……」  
いや、そこは気づいとけよ。でもかわいいから許す。僕が許すとか許さないとかいう問題じゃないけど。

もしかして、天然さんか？

「ありがとうございます。あと、見苦しい姿をお見せしてしまい申し訳ありません」

「あ、大丈夫ですよ。そんな気にしないで下さい。それよりも見つかって何よりです」

カツコよく見つけて彼女を助ける、ということとは出来なかったけど、まあ結果オーライか。あ、でも彼女は帰り同じバスってことになるよな？

「帰りはこっちなんですか？」

「はい。失くしたとばかり思って、すぐにここまで戻って来たんです。やっぱり走ると遠いですね」

「え、走ってここまで来たんですか？」

どこのバス停で降りてるかは知らないけど、ここから乗るってことは結構家は遠いはずだ。こんな大人しそうなお嬢様タイプの子が

……

「はい。一時間くらいかっちゃんしました。もうへとへとですよ」  
その割には汗もかいてないし呼吸も乱れてないんだが。見かけ以上にかくましいんだな、きつと。

「まあ、もうすぐバスも来るんでゆっくり出来ますよ」

「そうですね。あ、まだお名前をお聞きしてませんでした」

おっと、これはなんともいい流れじゃないか。別に大したことはしてないのに、名前を聞かれるとは。これはフラグか、そうなのか？  
もはや僕は有頂天だった。

「更屋敷修、橙学の一年です」

「わたしは姫宮ひめみや香月かづきです。同い年だったんですね、大人っぽいから年上かと思いました。宜しくお願いします」

丁寧な頭を下げる美少女の姫宮さん。なんて礼儀正しい子だ。さ

すがは希望ヶ丘のお嬢様、作楽先輩や土岐野なんかとは出来が違う。「こちらこそ。帰りが同じなら、今後また会うこともあつたろうし」さすがに姫宮さんが何時にこのバス停に来るかは分からないから、それは運任せではあるけど。さすがにそれを念入りに調べたらストーカーだ。そこまでは絶対にしない。

「わたし、帰りが一緒の人が友達にいないので良かったです。暗い中一人だと不安なんです。最近、物騒な事件も多いじゃないですか」

「女の子一人じゃそうだよ。襲われないとも限らないし……」

ふと自分の右腕に視線を移す。まだ痛みは少しばかり残っている。

「つてごめん。そんな不安がらせるような事言っちゃって」

「いえ、気にしないで下さい更屋敷さん。あ、バス来ました」

時間はちょうど六時十五分。僕たちはバスに乗り込んだ。

それからバスの中では、いろいろ話をした。不安がらせないように事件の話題には触れないように注意し、なるべく姫宮さんの事を知らうと心掛けた。と、いうより彼女の事はもっと知りたい。

「そんな人たちがいるんですか？」

今はちょうど僕が番長や作楽先輩の話をしているところだ。身の回りの人の話題になったから、あの二人を出したってわけだ。

「嘘みたいだろ？ でもあの二人ほど濃い人間ってのは滅多にいないと思うぞ」

姫宮さんは笑っている。ああ、笑ってる時が一番可愛い。

「わたしの周りもいますよ、そういう人。希望ヶ丘は校則が厳しいんですけど、みんなその穴を突こうとするんですよ。虎穴に入らば虎児を得ず、みたいな感じですよ」

「姫宮さん……多分それ違うよ」

穴は穴でもその穴から虎児は得られませんよ。いや、虎児どころか何も得られませんから。

「じゃあ、あれです『穴があつたら入りたい』」

「まず穴から離れましょうか？」

穴って漢字をどうしても使いたかったら、『同じ穴の貉』むじなだろう。この場合は校則破りをするという行為ではなく、それをする人達を一まとめに言うわけだが。

抑圧されると反発したがる、という意味で言ってるんだらうが、残念ながら僕はそういうことわざや慣用語は知らない。

それ以前に姫宮さんの言ってることは何かがおかしい。変な人が周りにいるっていつからその人のことでも話すと思ったら、なぜか校則が厳しいってことになった。

待て、焦るな更屋敷修。これは単なる前置きなのかもしれない。お前が余計に口を挟んだせいで続け損ねたんだ、きつと。

「うーん、なんて言えばいいんでしょう。日本語で難しいですね。そうそう、なんかその友達はチームっていう集まりに入ってるみたいで、よく学校を抜け出すんです」

そういうことか。授業中に学校から出るのは校則違反になる学校は多い。その事を含め、あんなことを言ったのか。

「普段は大人しい子なんですけどね。一度熱くなるとどこまでも突っ走るって感じなんです。猪突猛進……あ、これ使い方合ってます？」

「うん、大丈夫」

今度は問題ない。というかわざわざ言い直す必要あったのか？

「すごいですよ、この前なんて『いけない、今日アニソンオフ会が入ってるの忘れていた。姫、悪いが早退するから先生によろしく頼む』って残して教室飛び出してっただんですから」

そんなんで学校休むなよ。ってかオフ会かよ……オフ会ってなんだ？ チームのメンバーとの会合のことか？

「でもとつても頭が良いんです。常にテストは全教科満点で、もう希望ヶ丘では敵なしなんです。だから多分許されるんですよ。ちよっぴり悔しいです」

「うちの学校のSクラスの人たちなんて皆そうだよ。特待生なだけ

あつて、点数と最低限の出席さえ取れてれば何しても問題ないんだし」

全国模試で上位百人に全員がランクインするという、化け物の集まり、それがSクラスだ。勉強が出来るのもそうだが、噂によると一筋縄ではいかない変人が多いとか。なんであの番長はSクラスじゃないんだ？ 理系科目の出来を考えれば間違いなくそのレベルだと言つのに。まあ、国語の点数が相当酷いみたいだから、きつとそのせいなんだろう。

「特待生クラス、うちの学校もありますよ。今の友達がそうなんです」

「そうなんだ。ん、てことは姫宮さんも」

「はい、落ちこぼれですけど一応そうです。特待と言っても、入学試験の時点での成績ですから」

ばつが悪そうに苦笑している。もしかして、この子すつごく頭良いい？ 希望ヶ丘はこの辺の女子校じゃ群を抜いている。その中の特待生となると、うちの学校の化け物どもと同等ってことだ。

「すごいなあ。オレなんて勉強出来ないから尊敬するぞ」

「うっ、褒められると恥ずかしいです」

微笑を浮かべ、顔を両手で覆っている。その仕草がまたなんとも可愛い。

「それに姫宮さん、かわいいし。もう完璧じゃなか」

「そんなことないです、全然そんなことないですよ。みんなから『姫ちゃんってたまに変よね』って言われるし、よく笑われるし…うっ。更屋敷さん、そんなに褒めてくれたの、あなたくらいですよ」

「い、いやー、僕はあくまで思ったままを言ったただだよ」

ああ、もうそんなに顔を近付けないでくれ。こっちが恥ずかしくて直視出来ないじゃないか。おかげで素が出てしまった。気付かれないよな？

「更屋敷さんって優しいんですね。今まで男の人と話したことな

んであまりなかったからちよつと緊張してたんです。でも更屋敷さんはいい人で、短い時間ながら楽しかったです」

「うわー、もう止めてくれ、ほんとに。僕の理性がそろそろ限界だから。」

出会ってからまだ一時間も経ってないのに、なんでこんな話してるんだろう僕は。姫宮さんが想像していた以上に話しやすい人だったからってのもあるが、僕も僕でらしくない。

「姫宮さんみたいなお人になられると、なんだか照れるなあ。オレも楽しかったよ」

「また近いうち、こうやって会えそうですよね」

そうこうしているうちにバス停に到着した。僕ではなく、姫宮さんが降りる場所だ。そこはちょうど高級住宅街、やっぱりこの人はお嬢様なんだなあ。

「ありがとうございます、お気をつけて」

彼女はバスを降りて、歩いていった。

振り返ると、街灯の明かりのおかげで彼女の姿が目映った。この明るさなら帰りに襲われる心配もないだろう。それなりに人の目もある。

今日はいい日だ。こんな事が現実起こるなんて。

まるで僕はライトノベルやギャルゲーの主人公のようだ。あんな突拍子もない出会いをし、しかも短期間で絆を深めていくなど所詮は男の願望を表しただけの空想の産物に過ぎないと考えていた。撤回しよう。ボーイミーツガール、万歳！

2 .

更屋敷修と姫宮香月が出会っていた頃、街は騒がしくなっていた。

「これで何人目？」

「十五人目です。止めをさせられなかったという二人を含めて」

とある裏通りに二人の人間の影があった。一人は男、もう一人は女。いずれも高校生くらいの年齢である。目の前には気を失って倒れている人間がいる。

「四大勢力に気づかれずにこれだけの人数をやれる事自体、有り得ないことです」

「そんなことは分かっている。この辺りは我々？クロイツェン ナイツ十字騎士団？の支配下。今までは他のチームの領域だったが、まさかな」

女は冷静に分析している。しかし、その中には焦りと戸惑いがあった。

「これまでに入った情報によりますと、南と西の緩衝地帯で二人、これが止めをさせられずに無事だった者です。それでも多少怪我をしたと思われますが。他、南地区で三人、西地区で二人、北地区で五人、東地区で二人ですね。それにここ、北と西の緩衝地帯で今一人目を発見、という感じですよ」

メモ帳を開いて男は読み上げる。

「緩衝地帯でも被害が出ている、というのはおかしな話だ。四大勢力だけでなくどこかしらチームに所属している者なら、ここで何かしらをやらかすことの意味を分かっているはずだ」

「たしか『緩衝地帯で他のチームを刺激する行為をした場合、そのチームは戦争をしかけたものとして判断される』、ですね」

男は簡潔に説明した。

「昔は無数のチームがそうやって緩衝地帯を設けて、戦争に備えて

いた。今の緩衝地帯は四大勢力間でだけだ。つまり、我々を敵に回したということになる。とんだバカがいたものだ」

「しかし、それがどのチームかは分かりません。ほとんどのチームは四大勢力のどこかしらの傘下か、同盟です。新興チームだとしても、こんなことをしたら即潰されますよ」

部下の言葉に女は苛立っていた。

「だが潰すどころか足取りも掴めない。お前は四大勢力がどれほどの規模か知っているだろう？ それでなお見つからないんだ。この意味、分かるか？」

男を睨みつける。彼は動揺している。先輩、この場合は上司と云うべきか、その彼女の剣幕に怯んだようだ。

「分らんようなら教えてやる。このままだと、大戦争が勃発する」女はさらに続ける。

「見つからないということとは、裏を返せばどこかのチーム、それも四大勢力内に身を置いているからに他ならない。幹部の中には他のチームが均衡を破ろうとしていると疑う者も出てくるだろう。我々は均衡を保ってはいるが、決して同盟を組んでいるわけではない。この状況が長引けば、しびれを切らした四つのどこかが動き出すぞ」その表情は硬い。事態は当に楽観視出来るものではなくなっている。

「大戦争……今の四大勢力がそんなことをしたら、関係ない人も巻き込むことになります」

「だから、戦争なんだ」

その一言の後、しばらく沈黙が続いた。

「とりあえず……救急車だ。こいつは起きても立つ事は出来ないだろうからな」

携帯電話を手に取り、電話をかける。

「さて、私は本部へ戻る。この場はお前に任せる」

「はっ、かしこまりました」

男は一礼し、女を見送った。

(さて、女王様はこの事件をどう捉えるだろうか。過激な事を考えてなければよいが……)

3 .

姫宮さんとの劇的な出会いから二日、あの日が金曜日だったから、ちょうど日曜日、僕は繁華街に繰り出していった。

決してヒマ潰しではない。人に会うため、ここまで出てきたのだ。そして僕は今、その人と向かい合って喫茶店にいる。

「で、今日はどうしてオレを呼んだんだ？」

「あの……実は、ですね  
相手は、女の子である。」

ただし、「見た目は」と付け足すことを忘れてはいけない。

「更屋敷さん、しばらくは……周りに気をつけて、下さい。あと、危ない事には絶対に関わらないで……下さい」

目の前の少女、否少年 音川は僕に警告する。

「なんだ、それじゃまるでオレが狙われてるみたいじゃないか」

「みたい、じゃなくて……そう、なんですよ」

音川は告げる。ただ、僕は彼の言葉以上になぜ今日も女装なのかが気になった。しかも、私服でバッチリ決めている。

「確かにオレは少し前に襲われた。ただ、その事件はもう終わったはず」

犯人は見つかった。しばらくして退学になったという知らせが僕の元に届いた。先生方も、疑った事は悪いと思ってたらしい。

「……終わってません」

「どういうことだ？」

音川は言い難そうにしていたが、続けた。

「更屋敷さん、九月からずっと続いている 学生連続暴行事件、ご存じ……ですか？」

「詳しくは知らないな」

最近物騒な事件が起きている。担任や先輩から何度となくそれは聞いてきた。この前、姫宮さんも言ってたな。それもあって不安そうな顔をしてたみたいだし。

「更屋敷さんは……標的に、なってるんです」

「何だつて!？」

「少し前に襲われた……つて言いました、よね? その時、完全に更屋敷さんを倒せなかったから、今度は確実に仕留めに、きます」

まさかの言葉に耳を疑った。なぜ僕が狙われるのかも分からない。「なぜオレなんだ?」

「更屋敷さんは、関わってしまったからです……あいつらの計画に知らず知らずのうちに。しかもそれは……ボクのせいです」

音川のせい? そうなると一つしかない。

「あの名簿窃盗、あれが関係しているのか?」

音川は答えない。

「これ以上は……言えません。謝って済むことでもありません、でも、本当にすいませんでした」

かろうじて出たのがこの言葉だった。

一つ確信した。音川が入っているという新興チームが深く関わっている。これは間違いない。

「言えない、か。あそこでお前を逃がすんじゃないな」

残念だ。僕達が甘かったのかもしれない。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい」

音川は目に涙を浮かべ謝罪の言葉を繰り返している。

「もういい。オレもこれ以上追及はしない」

僕は席を立ちあがった。

「会計、先に済ませといてやるから。じゃあな」

もうこの場所にいる意味はない。が、一つだけ思い出した。

「最後に一つだけ聞く」

音川は顔を上げた。

「……なんでオレと会う時、いつも女装してるんだ?」

「……秘密、です」

そう答える時、音川は頬を赤らめたような気がした。気のせいであって欲しい。

店を出た僕は、特に何かをする気になれず、そのまま家へ直帰した。

思えば、この時音川はかなり勇気を振り絞って僕に対して告げたのかもしれない。そのことを僕が確信するのはもう少し先の事である。

そして窃盗も含めた彼の行動の真意も、いずれは知ることになる。

4 .

次の日、朝のホームルームではいつものように連絡事項や近頃の事件について担任が話している。

ただ、今度の事件の内容は今まで以上に生徒を不安がらせるものだった。

女子生徒連続失踪事件。

金曜の夜から昨日までに、二人の女子生徒が行方不明になっている。二人ともいなくなる兆候はなかったらしい。

「あれって誘拐じゃない？」

「ちよつと、最近暴行もあるじゃん。怖い」

「もう一人で外なんて歩けないじゃない、これじゃ」

クラスの、特に女子からそんな声が聞こえてくる。最近の物騒さを考えたらそうなるだろう。

番長の様子を窺う。真剣な顔をしていることを考えると、また事件を解決しようとしているに違いない。

「今回は足を突っ込まない方がいい」

取りあえず無駄だとは思うが忠告する。

「嫌な予感がする。それにお前、まだ万全じゃないだろう？」

「問題ない」

「またそれだ、そう強がるな。それに、またタイツ仮面みたいなヤツが出てきてみる。万全の状態でも勝てなかったんだ。今の状態じゃまず無理だよ」

「……」

番長の目つきが変わる。表情の変化は乏しいものの、何やら悔しそうである。一方的にタイツ仮面にやられたのがそれほどに応えているのか？

「お前、まさか」

「みなまで言うな」

「どうやらその通りだったようだ。」

「俺は、弱い」

番長が呟く。

「だが、もう負けられない。倒れるわけには、いかない」

そこには決意のようなものがあつた。この男を駆り立てるものは一体何だ？

「なあ番長、何がそんなにお前を突き動かすんだ」

ずっと気になっていた。コイツの正義感は筋金入りだ。自分の身を犠牲にしても、誰かを助けようとする、他者に対しても親切だ。そのあまりに敵つい見た目と、無愛想さ、それに番長スタイルが合わさり、人から理解される事はない。それでも自分の芯を曲げようとするしない。

「……約束だ」

「誰との？」

それから番長は珍しく自分の事を語った。

「昔、姉貴と俺が連れ去られそうになった事がある。十年以上前のほんとに小さい頃だ。俺も姉貴も、なされるがままだった」

番長の子供時代は初めて聞いた気がする。

「犯人がどうして俺達を攫おうとしたのかは分からない。子供二人に対して相手は五人。どうあがいても勝てない。そんな時、目の前に一人の男が現れた」

「男？」

「学ランを着た高校生だ。当然、犯人の一味はそいつを取り囲む。全員刃物を持っていた。」

それでも、高校生は一切怯まなかった」

五対一、それも真つ当じゃない人間を相手にする。その高校生には決して勝ち目などないと僕は考えていた。

「『なんだてめえ』とか『お前殺されてーのか』と睨みを聞かせて

いた。言葉は覚えていないが、そんな事を言っていたはずだ。その高校生はただ一言だけ言い放った『知るかボケ』と」

随分威勢がいいな、普通そんな事言えないぞ。

「その後は早かった。高校生が自分身体だけでその場の五人を倒した。倒れている方は誰一人として動かない。俺は尋ねた、『おにいちゃん、せいぎのみかた?』と。返って来た答えは、『違う。この人たちよりずっと悪い人だよ』と。その顔はどこか寂しそうだった」  
一体その高校生は何者だったのだろうか?

「俺はまた聞いた『じゃあ、ぼくたちもこのひとたちみたいにするの?』と。答えはなく、ただ自分の学ランを脱いで俺と姉貴の背中にかけた。それから去り際に俺にこう告げた。

『俺には決して憧れるな。キミは正義の味方になれ。俺みたいなヤツを倒せるくらいに。どこまでもまっすぐ、誰よりも優しく、そして決して曲がらぬ信念を持って 約束だ』」

悪だつて? その当時の高校生が何者かは知らないけど、とても素晴らしい人間であろうように思える。

「この学ランは、その時のだ。俺達にこれを残し、消えていった。見ての通り、サイズが合っていない。だがこれは約束の証だ。今の俺は、あの人と同じ高校生になっている」

その目には強い光が宿っていた。

「ただ、俺以上に姉貴が強くなってしまった。姉弟喧嘩では一度も勝ったことはない。姉貴からは『お前は弱い。正義は私が貫く』とまで言われる始末だ」

番長は自嘲気味に語った。僕にとっては、この男の姉がどれほどの人物かの方が気になる。確かに番長は図体の割に弱かった。敵が強過ぎただけかもしれないが。それでもこの姉は話し振りからすれば相当なものだ。

「お前の姉ちゃんってそんなに強いのか」  
「化け物だ」

きっぱり言い切った。

僕の想像では、もはや女とは思えない姿が映っている。番長をそのまま女にした感じた。

ダメだ、これ以上このビジョンは危険だ。姫宮さんの笑顔を想像しよう。

「……とんでもねーな」

「しかもこの学校のSクラス特待生だ」

「嘘っ！」

それって正真正銘の化け物じゃねーか。強い上に頭も良いのかよ。ま、コイツの姉ってことは相当目立つことだろう。そのうちお目にかかることが出来るはずだ。

「まあ、とりあえずお前の姉ちゃんは分かった。にしても、そんな理由があるとはな」

コイツも譲れないものがあつたんだな。

「無理だけはするなよ。正義を貫くんなら、その身体が大事だろ？」  
もし事件に首を突っ込もうとしても、今回くらいは付き合ってるか。自主的な番長更屋敷はこれが初めてだ。さすがに二度は御免だ。

悪いな、音川。大人しくはしてられそうにない。

まずは僕らで情報を集めるしかなさそうだ。作楽先輩は……やめておこう。首を突っ込まないと約束したんだ。またあの人にいじめられるのは勘弁だし。

しかしここで問題があることに気づいた。さすがにチームの事はネットでは調べられない。噂くらいは分かるだろうが、その程度だ。番長は多少チームについて知っていたが、深くは知らないだろう。

さて、どうしたもんだらうか……

「同盟を組む？」

番長と更屋敷が事件を追うことを決める二日前の某所。そこではある会議が行われていた。

「姐さん、言いたいことはわかる。でも、罷だつて可能性もある」

「ん、それはないよ。相手は？ 十字騎士団？ だからな。あそこの女王様はエグい性格してるけど、卑怯な真似をする人じゃない」

リーダーらしき人物が言う。この場には彼女も含め、十一人が集っている。

「あの団長と参謀にしたつて同じだよ。平和主義だからね、さすがは希望ヶ丘の生徒会をバックに持つだけのことはある」

「おいおい、ちったあ待ってくれ。うちの連中もやられてんだ。そう簡単に結論出していいのかよ？」

反対意見の方が多い。突然の同盟の話の不審がつているのだろう。「すぐに結論を出すとは言っていないじゃないか。一度四大勢力の代表者で集まって、そこで正式に同盟の話をするってことになってる」「四大勢力が！？ まるで何か大変な事が起こるみたいじゃないですか」

「うん、今この辺りは深刻な事態に直面してるのだよ。被害人数は昨日で十五人。あと、この子」

リーダーらしき影は一枚の写真を仲間に見せた。

「希望ヶ丘女学院の生徒だよ。昨日からいなくなつて未だに見つかからないらしい。しかもこの子、どこかのチームに属しているわけじゃない」

「暴行を受けた十五人は、全員どこかのチームに所属していたはずだ。姐さん、これは……」

「暗黙の了解が破られている。無関係な人間も巻き込まれている以上、このまま見過ごすわけにはいかないな」

その場の空気は重い。改めて全員が事の重大さを認識したようだ。「付け足すと、暴行を受けた十五人のうち、二人はチームとは無関係だよ。ちよつとしたことで多少踏み込んだじゃったけどさ」

場の空気がざわめく。

「せっかく久しぶりに幹部十一人が集まってることだし、みんなにちよつと頼みたいことがあるんだよね」

「何でしょうか？」

その中の一人、真面目そうな風貌の男が声を発する。

「その二人を四大勢力の会合に立ち会わせたい。今のところ、唯一事件の中で無事だからな。それにまた狙われないとも限らない。うちらで保護した方がいいんだよ」

「つつたてよ、どうやって連れて来るってんだ？ 向こうはこっちの顔も知らなねえ、こっちも向こうの事は知らねえときてる。どうすんだよ、姐御」

少し不良然とした男が不機嫌そうに言い放つ。

「写真はあるよ。で、手段はそうだな……」

その後の言葉に何人かは驚愕した。

「拉致つてきて。ちよつと強引にでいいから」

「姐さん、そんな……」

「話してる時間あったら、文句を言わさず連れてくりゃいいんだよ。事情はあたしが直接説明するから大丈夫」

リーダーは笑ってそう告げる。が、他のメンバーは誰も笑おうとしない。

その時、誰かの携帯電話の着信音が響いた。

「姐さん、鳴ってるぞ」

それはリーダーのものだった。彼女はそれを手に取り、話し始める。

「やあ、鉄仮面ちゃん、相変わらず無愛想な声だね。はは、まあそ

んなに怒らないでよ、冗談冗談。うん。なるほどね、了解だよ」

通話の内容は他の面々には聞こえない。

「じゃ、女王様によるしく。あ、団長は今どっかの国に留学中だったか？ そんじゃーねー」

その男勝りで明るい話し声だけだと、彼女が四大勢力の一角のリーダーにはとても見えない。

「で、姐さん。なんと？」

「会合は火曜日だったよ。で、代表者と護衛合わせて三人までで頼むとも。まあ今のチームのボスってのはあたしも一度しか会ったことないし、出来ることなら情報を漏らしたくってことなんだろうな」

「他には？」

「？零を取り巻く者？は今内部で何やら立て込んでいるとか。？十三使徒？は同盟を組む意思はないと。両チームともそんなわけで不参加だったよ」

結局、同盟は組むとしても二チームという結果になった。

「そんなわけで、火曜日に例の二人を拉致ってきてね。多分放課後に橙学の周辺張ってれば見つかると思うから。一度この本拠まで連れてきたら、さっきも言ったようにあたしが対応するから」

「で、その役目は誰が？」

やることは分かっているが、リーダー以外の十人の誰が実行するのだろうか？

「うーん、確かマツはバイク乗れたよな？」

「ち、オレかよ」

嫌々ながらも承諾したようだ。

「あとは、そうだな……ドクとデリジャーが適任か。マツをうまく止められるのもこの二人だし」

「おいおい、別に何も問題は起こさねっつーの」

「この前、振られた腹いせにチンピラ五人を病院送りにしたのは誰かな？」

「う……」

「まったく、もしバツクにヤクザとかいたらどうするんだよ。あたしもそこまで面倒見切れないよ。そうじゃなくなったら最近では暴力沙汰には目が厳しいんだから」

リーダーは呆れていた。マツは曲がった事が嫌いな性格ではあるが、感情的になりやすいのが玉に瑕なのである。

「それじゃ、よろしく頼みますよ、マツ」

「安心しろ。お前がバカやりそうだったら止めてやるから」  
残りの二人がマツを見遣る。

「はは、何あたしもちゃんと三人が仕事を果たせるようにちょっとした仕掛けをしておくから。ま、安心しな」

彼女は三人に笑いかける。

「ところで姐さん」

三人のうちの一人、ドクと呼ばれた男が言葉を紡ぐ。

「なんだ、ドク？」

「……今度からカレーを食べながらの会議は止めましょう。臭いが気になって仕方ありません」

「じゃ、そろそろ寒くなってくる頃だし、鍋にしようか？」

「いえ、もつと真面目にやりましょうよ。なんで今日はキャンプ場なんですか？」

「たまにはアウトドア気分を味わいたかったのだ！」

彼らは屋外でテーブルを囲んで会議をしていた。

「だからってオレ達に調理とか全部やらせんじゃねーよ！」

「いやあ御苦労御苦労。おかげであたしは労せずして美味しい晩御飯にありつけたよ」

「なんでこんなのがボスなんだか……」

マツと呼ばれた男は呆れかえっている。

「ごめんごめん、反省する」

「分かってくれましたか？」

「キャンプファイアーはあたしが全部準備するから安心しな」

「そっちじゃありません！」

6 .

「よう、少年！」

「あ、お久しぶりです先輩」

「おお、番長君もいるな」

火曜日の放課後、僕は番長と共に学校を出ようとしていた。直接自分の足で現場を回った方が手掛かりがあるのだろうと考えたからだ。

昨日は番長とインターネット上の掲示板とかを調べて情報を集めた。明らかな嘘は多かったものの、それなりに信憑性のある情報も存在していたのは救いだ。ちょうどそれらを調べようとした今日、まさかの作楽先輩の登場である。

「いやー、最近は真面目に部活に行くなんてらしくないことをしてたからな。淋しかったかい？」

「それがあるべき姿だと思いますよ」

この人の場合、部活に通うのが当然だ。仮にも部長であり、エースなのだから。

「ま、そのおかげでこの前の一回戦は余裕だったのだよ。さすがあたし」

「はいはい、おめでとうございます。それで、今日もヒマ潰しですか？」

この人が本当に用事があったって僕の前に現れることはない。

彼女は僕と番長の二人を交互に見た後、

「少年、お姉さんに隠し事とは言い度胸だな」

と言った。何やら良からぬ事を企んでいる顔をしている。

「何の事ですか？」

「タイツ仮面に襲われたこと、何で黙ってたんだい？ 番長君もそ

う、二人ともお仕置きが必要だな」

「待った待った、何でそんな事知ってるんですか？」

僕は教えてない。この事を知っているのは番長と僕しかいないはずだ。先輩はどっからこの話を仕入れたんだ？

「ははは、このあたしの千里眼を舐めてもらっては困るな。そんなこと、目を見れば分かる」

ねーよ。アンタはサイコメトラーか。

とはいえ、この先輩が素直に言わないだろうことは予想していた。

「そんなわけで、ちよっとパシられてもらおうか、二人とも」

番長がぴくりと動く。

「なんで番長もなんですか？」

「連帯責任ってやつだよ」

「了解した」

番長は素直に引き受けた。なんとというか、潔いな、お前。

「んじゃちよっと、山村屋の特製豚まん買ってきて。あそこ有名だから場所は分かるよな、少年？」

「ええ、すぐそこですし」

山村屋とは橙学の近くにある老舗の中華まん屋だ。正門を出て右に進み、二百メートル程度歩けば着けるため、うちの生徒を中心に高い人気を誇る。

「ちなみにおごり、な」

うわ、マジかよ。今月そんな余裕がないのに。こんなことなら音川に代金払わせりゃ良かった。喫茶店って何気に高いんだよなー。

「……分かりましたよ。じゃ、ちよっと行ってきます」

番長と僕は山村屋へと向かっていった。

「うわっ！」

山村屋の手前五メートルの所で、危うくバイクに轢かれそうになった。十字路になっているとはいえ、正門前の通りとは違う小路の方から出てくるとは。

バイクに乗っていた人物は近くに停め、僕らの方に歩いてきた。  
「更屋敷修と、鬼ヶ島刀祢だな？」

なんで僕らの名前を知っているんだ、こいつら。それよりも轢きそうになっただから謝れよ。

ヘルメットを被ったままのため、顔は分からない。が、どうにもヤバい感じがする。この前のタイツ仮面ほどではないが。

「なんだ、一体？」

答えは無く、ただ僕は二人組のうちの一人に胸倉を掴まれた。

「つべこべ言わずに来いや、ためえら」

この口調、どう考えても不良だ。それもかなり小物臭のする。なんだ、まさかコイツらが事件の……

「マツ、そんなことしたら誤解されますよ」

山村屋の方から声が聞こえてきた。眼鏡をかけ、松林高校の制服に身を包んだ、いかにも真面目そうな男がこちらへ歩いてくる。手には特製豚まんがある。

「うん、ここの豚まんはやっぱ最高です。溢れ出る肉汁、野菜と肉のバランスといい文句なしです。姐さんが気にいるのも無理はありません」

何やらこの二人の知り合いのようではある。が、雰囲気は全然違う。それに松林といえば、最高峰の大学の合格者数全国トップの超名門校だ。こんな不良じみた人間とでは明らかにそぐわない。

「失礼しました。ちよつと彼は短絡的などころがあります。マツ、まずはこれでも食べて落ちついて下さい」

彼はマツと呼ばれた男のヘルメットを脱がせ、口の中に豚まんを突っ込む。ヘルメットの下は、両耳にごついピアス金髪の坊主頭だ。  
「む、ぐぐ」

何か言おうとしているが、豚まんのせいで喋れない。

「これで大丈夫でしょう。僕は、そうですね博士と名乗っておきましょう。チームではドクと呼ばれています。こっちの悪そうなのは狂犬、通称マツ、もう一人は騙し《デリ》打ち《ンジャー》です。」

彼だけはしつくりくる略称がないのでそのままです」

あだ名、というよりはチームでは通じるのだから二つ名というところか。このドクターとやらとは話が出来そうだ。

「それで、オレ達をどうすんだ？」

「ちよつとうちのリーダーに頼まれてましてね。今から御連れしようとしたところです。ボスがあなた方と話したいということですので……暴行事件で唯一無事だったあなた方二人なら何か知ってると思いますので」

く、音川の言う通り、あれは終わって無かったのか。僕らも情報は欲しい、だけどここでついて行っていいのか？　これが畏という可能性は。

「それで一緒に来いと？」

番長が聞き返した。コイツはかなり警戒している。

「そういうことです」

「断る、と言ったら？」

今度は僕が質問する。

「その時は仕方ありません。力づくで連れて行きます」

ドクターの顔つきが変わった。友好的なものから、いきなり真剣な表情になった。

「ちっ……」

その場から逃げようとした。が、番長は動かない。

それもそのはずだ、番長はこの数瞬のうちに気絶させられていたからだ。

何が起きた？

「がっ！」

次の瞬間、首の後ろ、延髄の辺りに衝撃が来た。僕の意識はそこで途絶えた。

7 .

「目は覚めたか？」

あれ、ここはどこだ？ 確か僕は先輩に頼まれて豚まんを買いに行つて、それから、

「っ！！」

そうだ、どこぞのチームの三人組に遭遇して、番長が気絶させられて……僕も気を失っていたのか。

「気がついたようですね」

声が聞こえてきた。松林の制服を来た男が目の前に立っている。

「お、お前……」

「すいません、あのままだと素直に来てくれそうになかったものでして。もう一人も無事ですすよ。それと、ここは僕らのチームの本拠です」

窓があつたため、そこから外を見る。建物の中である事に変わりはないが、外の景色から場所は判断出来ない。

「オレ達をどうする気だ？」

「お話した通り、リーダーに会つて頂きます。今、案内しますので彼は僕を先導する。歩いているうちに建物の構造がなんとなく分かつてきた。学校か、病院に似ている。

「この中でお待ち下さい。もう一人の鬼ヶ島君はもう入っていますので」

中は、劇場のようになっていた。それともホール型の講義室か？ 決して広くはないものの、座席があり、奥にはステージもある。

「番長、大丈夫か？」

「問題ない」

先にいた番長は前の方の座席に座っていた。

「なんだってこんな所に案内したんだ？ さっきの部屋に直接リーダーを連れて来いよ、ほんとに」

突然、照明が消えて真っ暗になる。

「こ、今度は何だよ」

すると、どこからともなく声が聞こえてきた。

「さあよくぞ来てくれた！ 我々はキミ達を歓迎しよう」

女の人の声が聞こえてくる。この人がリーダーなのか？ なんとなく聞き覚えがある声だけど。

次の瞬間、ぱっと一斉に部屋の明かりが点いた。その眩しさに一瞬目を閉じた。

ステージの上には黒のスーツに身を包んだ十一人の男女がいる。

一人を除き、全員が中央の人物に対して片膝をついた姿勢を取っている。まるで忠誠を誓い、ひれ伏すように。真ん中の丈の短い黒いドレスに黒のロングブーツの女性だけが後ろを向いている。その人がリーダーなのだろう。

「我らは鴉。十一の彷徨える漆黒」

『我らは鴉。十一の彷徨える漆黒』

女性の声のあと、周りは復唱する。なんだこのパフォーマンスは？ 痛いにもほどがあるだろ。

ばん、と音が鳴る。スモークのようなものがステージから吹き出す。そして中央の人物が振り返る。

「？十一羽の鴉？それが我らの総称」

「……作楽先輩、何してんですか？」

そう、黒いドレスのリーダーらしき女性。それは他でもない、作楽先輩だったのだ。

「少年、舞台は最後まで見るものだよ。せっかく演出を考えたというのに」

「周りの方々、恥ずかしそうですよ」

何人かは顔を伏せているが、中には必死で笑いを堪えている者もいる。きつとこの人に無理やり付き合わされているんだろう。

「それよりも少年、リアクションが薄いな」

「へ？」

「いや、ここはさ、『まさか先輩がリーダーだったなんて!』とか『そんな、あの優しくて美人で素晴らしい先輩がどうして?』とか驚くところじゃないか」

「なんか、先輩なら納得がいきますよ」

多少はびっくりしたが、そこまでではない。先輩ならこのくらいの事をやっていたって不思議ではない。

「……姐さん、恥ずかしいんですけどですか？」

「ダメ。あたしが見てて面白いからもう少しそうしてて」  
うわ、僕を相手にするより酷いぞこの人。

「先輩が?十一羽の鴉?のリーダーだったのか？」

「遅えよ、番長!」

お前がボケてどうする。ただ、その顔は驚愕に満ちていたので、本気だったのだろう。

「ってことは先輩、放課後に声かけたのって……」

「そ、せっかくだから驚かしてやろうと思ってさ。ま、これもキミがあたしに隠し事をした罰だよ」

はははと先輩は小気味よく笑う。僕達をからかっているのは疑いようがないが、なんだか怒る気にはなれない。さっきまで、僕らを連れて来いと命じたリーダーに対して憤っていたというのに。

「んだよ、姐御も人が悪いなあ。知り合いならそう言えよ」

「マツ、あたしが知り合いだって教えてたら絶対に行かなかったでしょ。この方がキミ達が普段あたしの指示をどう実行してるかわかるし、なかなか楽しかったな」  
「な、てめえ」

「『他者を意味もなく刺激するような行為はしない。された場合の反攻は認める』これはうちのチームが創始されて以来のルールだよ。キミはほんと学習しないな」

先輩はマツと呼ばれる男を責め始めた。楽しんでいるように見え

るのは目の錯覚ではないはずだ。

「るせえよ。だったらなんでオレを幹部から外さねえんだ!？」

「そうやって反抗してくるのが可愛いからだよ。そんなキミを手なずけるのもな。あれだ、猛獣を手なずけるって、出来たらすごい達成感があると思うんだ」

「オレは猛獣じゃねえ!」

「あら、狂犬が何を言うんだかな」

「……ぜってえいつか殺す」

どうやら本気で怒ってるらしい。目が血走ってる。

「はいはい、もう少し大人になったらお姉さんが相手してあげるかな。あたしもまだ十四歳の、まさしくザ・中二病を相手にするほど子供じゃないのだよ」

おい、十四歳だったのかよ。バイク乗れねーだろ。

「オレは十六だ。ただ二回事故って学校行けなくてダブっただけだ」

「中学ダブリとかもう傑作だよ!」

なんだ、びつくりした。でも中学生なんだまだ。タメなのに。

マツはぶるぶると震えている。

「姐さん、そろそろ遊ぶのはやめて下さい。ここで暴れられたらめんどくさいんで」

「はいはい、じゃあドクに免じてここはキミで遊ぼうか」

「勘弁して下さい」

なんかもう自由過ぎるんですけどこの先輩。よくこのチーム、まとまってるよな。

「あの、先輩。そろそろ本題に入りましょう」

「ちえ、これから面白いのに」

ドクターはどこかほっと胸をなで下ろしているようだ。この人も苦労しているんだな。

「教えて下さい。なぜこんな事をしてまで自分のチームに僕らを招いたのか。今、この辺り一帯で何が起こっているのかを」

僕が質問をすると、先輩がいつになく真剣な表情になった。

これがチームをまとめる人間の顔なのか。

いつもと雰囲気が違う。服装のせいもあるけど、今この状態が先輩の本当の姿なのだろう。

「そうだね。少年、番長君、かなりの長丁場になるけど覚悟はいいかい？」

じつと僕と番長を交互に凝視する。眼を合わせて意思を確認しているようだ。

「よし、じゃあ話そう……と言いたいところだけど」  
「……え？」

「演出とかちよつとここで遊んだりとゆっくりし過ぎた。ちよつとこれから大事な会合があるからキミらも一緒に来て！」

おい、今の流れはどう考えても淡々と真実を語る場面だろ。マンガだったら来週へ続くかもしれないが、それでもここでやっとなんか明らかになるはずなのに。空気読めよ、先輩。

「まったく、間に合わなかったらどうするんだ？ 誰のせいどころなつたんだか」

「……お前だ！」

幹部一同、ついでに僕も便乗して突っ込んだ。

8 .

「愛沙ちゃん、資料はまとまった？」

「……はい」

時同じくして、橙光学園の風紀委員会室。土岐野愛沙と風紀委員長は一連の暴行事件と失踪事件について調べていた。

「ありがとう。それにしても、ここまで手掛かりがないのはおかしいわね」

「そうでしょうか？」

「暴行事件だけで十五件。失踪は二件、今日で三件になっちゃったけど……未だに不審者の目撃情報がないのよ。一つを除いて」

その言葉を受け、土岐野が確認するかのように尋ねる。

「タイト仮面、ですか」

「そう。それと愛沙ちゃん、そいつの正体は退学になったうちの生徒じゃないわ」

「じゃあ誰なんです？」

土岐野は苛立っていた。

「正体までは分からないわ。でもきつと、更衣室を覗いたのには意味があるとは思うの。女性徒の失踪が何か関わっているんじゃないかと思つて」

失踪事件、最近になって女子生徒が行方不明になるという事件が起き始めている。

「二人ともうちの学校の一年E組なのよね、いなくなった子。愛沙ちゃん、同じクラスだよな？ 何か聞いてないかしら？」

「いえ、特には」

土岐野はきつぱりと答える。

「そう……あら？」

委員長は何かを発見したようだ。

「メールが一通、なになに『四大勢力が本日密会を行う』という情報を入手した』ふうん。それで場所は……」

「委員長、四大勢力って何ですか？」

土岐野はチームの事は詳しく知らない。だからこそ、四大勢力についてピンとこなかった。

「この辺りを支配した気になってる不良集団よ。その中の大きな四つね。そいつらが今日集合するかもって情報が来たの。外回り組からね」

「そいつらが集まるとどうなるんですか？」

「いいことはないわね。たださえ今は事件が頻発しているのよ」

委員長は困り果てた顔をしたように見えた。

（凌め、忠告してやったというのに）

「何か言いました？」

「いえ、なんでもないわ。気にしないで」

一瞬何か呟いたようだが、どうやら気のせいであっただらしい。土岐野はそう考えた。

「委員長、行くんですか？」

ちようどロッカーに向かい委員長は着替えを手に取る。

「ええ、もしかしたら何か分かるかもしれないわ」

土岐野の目の前で彼女は着替え始める。男がいないとはいえ、よく平然としていられるものと土岐野は思う。

「よし、と」

着替えが終わる。その瞬間、室内の空気が一変する。愛沙はこの殺伐とした雰囲気嫌いだっただった。

「あとは任せるぞ、愛沙」

口調がいつもの委員長とは違った。服装も、いつもの女性らしいものではない。いや、女性らしいと言えばそうだが方向性が違う。

（なんでわざわざあんな格好するの？ バカなんじゃないの、あの人）

内心で毒づく。彼女は委員長の事を苦手としているだけでなく、嫌ってもいた。この人とD組にいる番長こと鬼ヶ島に至っては、その時代錯誤かつ不良然とした姿が許せなかった。作楽に至っては、この前顔を合わせたただだが、その印象だけで嫌いな人間の力テゴリーに入った。

それに対し、更屋敷を嫌うのは彼の性格が気に入らないからでない。彼が自分の事を完全に忘れていたからだ。

（更屋敷もバカよ。何で忘れてるのよ）

彼女が初めて更屋敷修と会ったのは、形意拳という中国武術の道場だ。十年前、よく話をした。それだけでなく、道場では弱くいじめられていた彼女を守ってくれていたのが更屋敷だった。

更屋敷は当時、自分達の年代では二番目に強かった。一番の子と更屋敷と土岐野、三人は仲が良かった。挫折して彼女は小学校に入ってしまったが、それを弱いなどと責めはしなかった。

またいつか会おうね。

最後にそう言ってくれた。遠くから通っていたこともあり、小中と学校は違っていた。高校に入って偶然再会したのだが、更屋敷は自分の事を一切覚えていなかった。裏切られた気分だった。その言葉信じずつと会えるのを楽しみにしていたのに。

一方的な当てつけだとは気付いている。あの時はまだお互い小さかった。分らないのも無理はない。ただ、素直になれなかった。自力でなんとかしても思い出してもらいたかった。

（まったく、ほんとには私だってアンタを悪者扱いしたくないのよ  
シュウちゃん）

かつて人を守ろうと奮闘した姿、それが自分なりの学校を守るといふ正義感の源になっているのだと、彼は気付いてはいないだろう。

ガタッ

(え、何?)

どこか近くから物音が聞こえてきた。先輩が戻って来たのか？ それにしては早過ぎる。

土岐野はゆっくりとドアを開け、廊下の方を覗きこむ。

時刻は午後の六時半。学生会館は文化部があるため、普段なら遅くまで人が残ってるはずだが、学祭準備期間ということもあって皆クラスの方にいるようだ。運動部の部室棟とこの学生会館は、前日まで準備が解禁されない場所である。そのため作業場としても使用が出来ない。

(気のせいね)

学生会館は四階建てで、風紀委員会室は一階だ。生徒会室は三階だからその音が聞こえては来ない。この建物で、まだ生徒がいるであろう場所は生徒会室くらいだ。

しかし、

「つつ！！！」

彼女は何者かに不意をつかれた。

その日、土岐野愛沙は四人目の行方不明者となった。

9 .

「ふう、七時ジャスト。いやー間に合った間に合った！」

僕と番長、先輩と幹部の一人、ドクターの四人は目的地に到着した。

「ここが……」

そこは高級ホテルだった。僕達の学校がある区には高級住宅街がある。そう、姫宮さんの家がある辺りだ。その入口周辺にはお金持ち向けの高級ホテルが何棟か存在している。

「さすがは十字騎士団。せっかくだからここまでのタクシー代せびつてやるのかな」

僕達はここまでタクシーで来た。先輩のチーム、十一羽の鴉の本拠は公民館のようだった。もっとも、今は使われてないらしく、表には「閉鎖中につき立ち入り禁止」の札が下がっていた。

バイクは適さないという理由で却下となった。先輩達も、さすがにこんなところに改造バイクを乗って来るのは気が引けるのだろう。僕らは免許がないから関係はないが。

「こんなところでやるんですか？」

「会議室を一つ丸ごと貸し切ってるだつてさ。一応あたしたち正装に見えなくもないから浮かない、浮かない」

黒ドレスに黒カーデガンは一見そうかもしれないけど、そのロングブーツとじゃ正装にはなりませんよ先輩。ドクターはまあ普通に背広だから問題ないですけど。

僕もまあ普段の私服がフォーマルっぽいからいいけど、番長の学ランだけは浮くだろ。これ、何の集まりかぱっと見分らないぞ。

ただし、この考えはすぐにかき消されることになる。

「時間ぴつたりに入ってきて来るとは。随分律儀じゃないか？ 屋気楼の

姫？」

「や、鉄仮面団長代理殿。その硬い口調はどうにかならないのかな？」

「騎士を統べる者、勤勉であるのは当然の義務だ。まして私は女の身、舐められては困るのでな」

出迎えたのは女の人だった。ただ、その格好はどこかおかしい。ファンタジーに出てくる女剣士と違ってこんな格好だよな？ ヴァルキリとか。髪も長いし、なんか剣腰から提げてるし。それ、本物のわけは無い……よな？

「で、女王様は？」

「女王様は間もなくの御到着だ」

十字騎士団の女王と言うのだから、その名の通りの姿形をしているのだろうか。十一羽の鴉が、その名の通りに黒に身を包み自分達を表しているように感じる。なら、女王は騎士団なら、ジャンヌ・ダルクみたいな感じだろうか？

「少年、とあえずちゃんと紹介しておこう。番長君と同じようにほとんど無表情なこの子が、四大勢力の一角、十字騎士団のナンバースリー、鉄仮面団長代理こと戦乙女<sup>ヴァルキリ</sup>だよ。本来の団長は、海外留学中」

おっと、二つ名までヴァルキリかよ。見かけ通りとは。

「あのバカは騎士道を学ぶだとぬかして単身ヨーロッパに行きよった。まったく、何年学生として居座るつもりなのだ？」

その口ぶりからすると、ここにはいない団長はもう高校生の年齢ではないようだ。

「ところでミラ。その二人は何者か？」

女、ヴァルキリーの方が先輩に質問する。なるほど、先輩の二つ名は屋気楼<sup>ミラージュ</sup>の姫<sup>プリンセス</sup>。だからミラなのか。

「分かりやすく言うと事件の鍵、かな。例の暴行事件で無事だった二人だよ」

団長代理の顔が驚きの色に染まる。

「この子達、学校の後輩なのさ。詳しくは女王が来たら話すよ」

なるほど、十字騎士団のナンバーワンであるだろう女王がこの会合の主催者というわけか。

「噂をすれば、派手な到着だね」

ホテルの前にいかにもという感じのリムジンが現れた。運転手が座席のドアに手をかえ、開く。

中から出てきたのは真っ白なロングコートを着た女の人だった。肌も透き通るように白い。身体は細い。コートを着ていても華奢だと思っただけである。

「おいでなすつたね、女王様」

「お久しぶりですわ、？ 静かなる流動？ さん。いえ、十一羽の鴉のリーダーになつた今は

？ 塵気楼の姫？の方がよろしいかしら？」

「最近、リーダーになる前の名前はあまり呼ばれないから新鮮だよ、クイーンズ ドール？ 女王の人形？」

「その名を知っていらしたの。でもここは？ クロス ホワイト白き十字架？ でお願ひしたいですわ。わたくしも今はリーダーですよ」

何やら高飛車そうな女だ。同じお嬢様でも、姫宮さんとは違う人種だ。

「はは、十字騎士団の十字架を自ら背負うとは大したものだね。さすがだよ」

「からかつてらして？」

「違うよ、単純にすごいと思っただけだよ。それだけチームの事を考えてるんだって、な」

チーム同士ってのはこんなに殺伐としているのか。さっきからこの二人のやりとりは危なっかしくて見てられない。

「そうですね。まあいいですわ。いつまでもこんなところにいる仕方がありませんわ。移動しましょう」

そこでようやく広い部屋に移動した。テーブルを挟んで十字騎士団と十一羽の鴉が向かい合う。

「今日の本題は同盟の件ですわ。こちらとしてはこれ以上荒らされるのを防ぎたいと考えておりますの」

「それはこっちも同じだよ。ちよつと今回の事件の首謀者はやり過ぎてる。一般人を巻き込んだ以上、慈悲はいらないよ」

「でも、相手が分からずにはどうしようもありませんわ」

「そこでちよつとこの二人の出番だよ」

先輩は僕と番長の二人に顔を向けた。

「こちらは？」

「暴行事件十五件の中で唯一無事だった二人。犯人も目撃してるし、今後狙われる可能性もあるから引き込んだのだよ」

「そう、あなた方が。詳しい事を教えて下さるかしら？」

僕は自分の身に起こった事をありのままに話した。もちろん、それまでに関わった事件全てを。名簿盗難事件、タイツ仮面による覗き、もとい不法侵入、その人物による襲撃。

タイツ仮面に関しては先輩は知っているはずだ。ただ、初めて聞くことも多かったようで、何かを考える素振りを時折見せた。

「なるほどな。学校に侵入したのは、連れ去る人物を選ぶためか。

あれは下見……その上生徒をわざと不安がらせて恐怖を煽る。タチが悪いな」

「それだけじゃありませんわ。偽物をわざと掴ませることで、犯人は捕まったと安心させる。そこに付け込んで連れ去る。悪魔のような所業ですわね」

双方の代表者がそれぞれ推論している。僕の発言から何かを感じ取ったのだろうか。

「名簿を盗んだのは、四大勢力の関係者を洗い出すためだよ。重傷を負わされたのはみんな関係者だった。どうやって特定したのかは分からないけどな」

「チームの情勢に詳しい正体不明の請負業者？真正な《マスター》<sup>フレイク</sup>の鷹者？あたりならそれだけでわたくしたちを特定出来ますわ。それを使っただんなら納得がいきますわね。それと事件は四大勢力の領

域だけでなく、それぞれの緩衝地帯にまで及んでいます。この意味分かってらして？」

「意図的にあたしたちを刺激している。『見つからないだろ、間抜けめ』って挑発してるみたいだよ。そうじゃなかったらわざわざ緩衝地帯なんて危険な場所で犯行には及ばないさ」

先程から僕も話を聞いているが、さっぱり分からない。完全に置いてけぼりだ。元々部外者なのだから仕方ないと言えば仕方ない。

「宣戦布告、ですわね。ただの愚か者だと思いましたが、未だに我々の目に留まらないと考えると、かなりの脅威ですわ」

「？十三使徒？は四大勢力の中に裏切り者がいると疑っているだろうな。だから断った、違うかい？」

「悔しいけど、その通りですわ。今頃はその名の通りユダ探しにでも夢中切らしてらっしゃるのではないかしら」

そこで誰かのケータイが鳴った。団長代理のものらしい。彼女は話すために一度席を外した。

「四大勢力の目に留まらないってことは、その四つのどこかが裏切ってるって考えるのが妥当だからな。情報なんていくらでも誤魔化せるし」

「傘下のチームをけしかけて知らぬふりをする、特に下になればなるほど幹部より上は知らないから、上にまで影響することはありませんわ。それほど、四大勢力は大きくなり過ぎましたわ」

「その分悪い事も出来なくなっただけだな。ただのサークルも同然、になっただと思っただのにこれだよ」

先輩は残念そうに溜息をつく。

「悔やんだところで始まりませんわ。とにかく、事件を早くどうにかしませんと」

「そうだね。そのための同盟の話だったな」

「ここは協力する場面ですわ。答えをお聞かせ願えるかしら？」

同盟の意思確認を切り出す。と、その時

「失礼します。大変です！」

「どうなさいましたの？」

慌ただしい様子で、団長代理、ヴァルキリ が駆け寄っていく。

「？零を取り巻く者？の傘下二十のチームが反旗を翻し、脱退を表明したとのことです。そして新しいチームに合流すると」

その知らせに、室内が戦慄する。僕にはその意味が分からない。しかし、何かとんでもないことが起ころうとしているのを感じた。

「その合流するというチームは分かっていますか？」

「？軍団レギオン？と、そう名乗っているそうです」

「……それは確かですか？」

「あのチームのボスから直接伺ったことですので間違いございません。今日この場に来れなくなったのは、それらの対処に追われていたからとも言っていました」

レギオン、そいつらの仕業だと言うのか。しかもただ力を誇示するためだけに事件を起こしたと？ そのせいで僕や番長が巻き込まれたと言うのか？

「加えてその軍団というチームからメッセージが届きました。我々のもとに。どうやって調べたのやら……」

「内容は？」

「『一連の事件は自分達がやったことだ、我々が四大勢力を潰し、この区の支配者となる』と」

「それで彼らは宣戦布告してきたってわけだ、手始めはお前たちだつて」

「そうだ。既に戦闘の準備は万端らしい。ご丁寧に自分達の居場所も明記されていた。負けるはずがない、という自信の表れだろう。ふざけた連中だ」

チーム同士の抗争、話しているのはそれが始まるという内容だった。

「まさかキミ達んところに来るとはな。十字騎士団も甘く見られるんだな」

「上等ですわ。確かにこちらは武力という点で、他の三チームに劣っているのは事実ですわ。だからと言って確実に勝てると言われるのは癪ですの」

女王はムキになっているようだった。

「ここで引き下がるのはプライドが許さない、ってことかい？」  
その時、

「先輩、一体今どんな状況になっているのですか？」

つい、僕は口を挟んでしまう。二人の話にずっと耳を傾けてはいたが、それだけでは分からないことが多かったからだ。

「少年、まだチームの事は説明してなかったな」

「聞こうとした時、時間がないとか言ったからですよ」  
ここに急ぐため、話しているヒマが無かったのだ。

「まあその女王様との話である程度は分かったと思う。狙われる可能性のあるキミ達を保護するっていうのと、襲われた時の詳しい状況を教えてほしかったのだよ。今日の会合に向けて、な。正直手掛かりが少なくて困ってたんだ。これまで襲われたのはみんな病院だし、証言もバラバラ、関連性も見えなかった」

それは僕の話でもそうだろう。それに、事件は終わったかと思っていた。音川の話もほとんど信じていなかった。

「ただ、あの名簿盗難事件、それに校内への不審者、まあタイツ仮面だったわけだけど、それらと関わったキミ達が襲われた。一連の事件は繋がっている、だからキミらは巻き込まれた」

先輩の説明は続く。

「もう一つ、あたしは少年、キミに聞きたいことがあったのだよ。最初の事件の後、何度か音川君に会っていたよな？」

「はい。何度か接触しました」  
「彼に不審な様子はあったかい？」

「最後に会った時を除けば、特には。最後は僕に危険が迫ってることを教えてくれました」

音川はおどおどしながら話していた。今思えば、チームと繋がっ

ていたことを気に留めなかった僕は愚かだった。

「あたしも正直あの子は脅されてやったと思つてたんだ。だから逃がした。名簿もちゃんと返してもらったからと安心していた。新興チームの事も特に気に留めていなかった。別にチームが出来るのは不思議なことじゃないからな」

なるほど、先輩はそう考えていたのか。

「けど、そうじゃなかった。この前の日曜日に偶然にもキミと音川君を見つけたものでな、ちよつと不審に思つたのだよ」

「まさか、音川は……」

待て、それならなぜわざわざ僕に警告する必要があつた。

「キミを警戒するチームからの差し金だった、でも助けてもらった恩があるから狙われていることをキミに教えたとこじゃないかな」

そうか、あいつは葛藤していたのか。

「もちろんそれが仲間にバレたらただじゃ済まない。もしかしたらもう処分されてるかもしれないよ」

処分？ 一体どんな目に遭うというのか。ただ、そのチームがや

つて来た事を考えると、ただでは済まないだろう。

「少年、同情はするなよ？ もしかしたら脅されただけかもしれないが、それでもキミを騙していたことに変わりはない」

そうは言われても、まだ中学一年生だ。そんな残酷な世界なのか、チームというのは。

「この話題はこのくらいでいいか、次はチームの事だな。前にあたしはチームは単なる仲良しグループだって言つたけど、それは半分正しく、半分は間違いだよ。元々はカラーギャングとか、不良集団のようなものだった。十五年くらいの月日をかけて今のようになったのだよ」

何か引つかかっていたが、そういうことだったとは。ところどころ先輩の話に矛盾があつたのはそのせいかな。

「その最初期から存在するのが、今の四大勢力。チーム同士の戦い

の中で、生き残ってきたのさ。この四チームは決着がつかないままただ規模だけが大きくなっていき、最終的に支配地域を定めて停戦状態に入った。それが今の状態」

「なんだかマンガの世界の話みたいだ。日常生活とは別に、若者が集団を作って争っていたとは。超能力者は魔法使いが出てこない分、現実味はあるけど。」

「その際にいくつかの決まりごとを作った。明文化したわけじゃないけど、それは暗黙の了解となったわけさ。だから均衡が保たれたのだよ」

「チームの歴史をある程度知ったものの、やはり全部を一気に理解するのは難しい。番長はじっくりと聞きいつてる。ただ、彼は多少知っているようで、ところどころ頷いている。」

「今はまだこっちの女王様との話の途中だからこれくらいにしておこう。番長君、大丈夫かい？」

「問題ない」

番長は答えた。

「あら、もういいんですの？」

「この二人はかわいい後輩だから、学校でもどこでも話せるから大丈夫だよ。」

「分かりましたわ。それで、同盟の話はどうなさいますの？」

「組ませてもらおうとするよ。宣戦布告を受けたんだ、ここは四大勢力を敵に回すという意味をみっちり教えてやるうじゃないか」

「どうやら話はいいたらしい。先輩と十字騎士団の女王が握手を交わしている。」

「それで、敵の本拠地はどこですか？」

「ファンタジーワールド、あの亡霊遊園地です」

亡霊遊園地、僕もその場所は知っていた。小さい頃に何度か行ったが、閉園した時は淋しい思いをしたもんだ。その後は心霊マニアすら近づこうとしない最恐の心霊スポットと呼ばれるようになってしまったが。

「あんな所をアジトにしていらしたの。それじゃあ足取りなんて掴めせんわ。この辺りの人はどんなに怪しがつても近付きませんもの」

そこが心霊スポットと言われる所以は、何より不可思議な現象が多発することにある。遊園地を取り壊そうとした際、業者が事故に遭い死者も出た。さらには行方不明者まで。そのため、作業は一時中断となり、未だに再開の目途が立っていない。

その後、興味本位で近づいた人は皆恐ろしい目に遭ったという。以来、その場所は嚴重に封鎖され、地元の間人は誰も近付かない場所となった。

「軍団とやらのボスは元々この区の間人ではないのかもしれないな。どんなバカでもあそこのヤバさは知ってる。さすがに亡霊にはあたらしくも勝てないよ」

「ですわね。なんであそこにおいて無事なのか、それは見当もつきませんけれど」

「もしかしたら、凄腕の霊媒師がメンバーにいるのかもよ？」

先輩は冗談のつもりで言ったのだろうが、この雰囲気は和らぐことはない。

「まあ、あたしとしては女子連続失踪事件が気になるけどな。一連の事件、つてことならそれも連中の仕業つてことになる。そうなるよ、あの遊園地に監禁されてる可能性が高い。さすがにあそこじゃ女の子達の精神も長くはもたないだろうな」

「でしたら行動は早い方がいいですわね　三日後、金曜日というのはどうでしょう？　それまでに準備を整えておけば、こちらから攻め込めますわ」

「鉄仮面ちゃんの口ぶりだと、相手は攻めて来いって挑発してるみたいだけどな。畏かもしれないよ？」

「あら、あなたにはそんなものなんの意味もなさないでしょう？」

屋気楼のお姫様

「はは、まあね。よし、じゃあ三日後だな」

「どうやら話はまとまったようだ。」

「よろしく願いますわ。では、これにてお開きに致しましょう。あとはうまく連絡を取り合って決めていきますわ」

「よろしく！ よし、みんな帰るよ」

僕達は十字騎士団の二人に別れの挨拶をし、ホテルを後にした。

なんの手掛かりもなく、事件について調べようとしていた僕と番長であったが、今までの事件と同じようにあっさり解決してしまっ  
そっだ。

金曜日には決着がつくことだろう。決戦は金曜日、昔の歌にそんなタイトルの曲があった気がする。まあ関係はないか。

あとは先輩達に任せておけばいい。この前は下手に首を突っ込んで  
だせいで手痛い目に遭っているんだ。番長はどうするのか分からないが、少なくとも僕にはもうすることはない。

この時の僕は、まさか自分がこの事件の結末に関わることになることは、予想だにしていなかった。

10 .

二つのチームが会合を行っているホテルとは異なる場所にその人物はいた。風紀委員長である。彼女は木刀をいつでも抜けるようにして佇んでいる。

「おかしい。ここのはずだ」

そこは公園だった。彼女の受けた知らせではこの場所で会合が行われているはずだった。

「外回りのヤツの勘違いか。後で灸を据えてやらねばな」

人影の一つたりとも周囲にはない。どうやら情報はガセだったようだ。

「この機会に潰してやりたかったが……まあいい。楽しみはまだ先に取っておこう」

彼女はその場を立ち去っていく。戻るのは委員会室である。完全下校は過ぎているが、彼女にとってそれはさしたる問題ではなかった。学生会館の管理室に行けば鍵は素直に貸してくれるだろう。

戻って部屋に足を踏み入れた時、彼女は一枚の紙切れがドアに挟んであるのを見つけた。爪で紙を押して字を書こうとしたらしい。

『たすけ』

その後に横棒が一本、『て』と書こうとしたが間に合わなかったらしい。

「なんだこれは……」

鍵は開けっぱなしになっていた。管理室の人は自分が帰るまで戸締りを確認しない。部屋の中はファイルや資料が散らばっている。

最後までここに残っていたのは……

「愛沙！」

委員長は土岐野愛沙の身に何かが起こったのだと、知った。

1 .

会合の後、？十一羽の鴉？の本拠に戻った僕は、先輩からさらに詳しい事を聞いた。まず本拠地に使ってるのは、区内の旧公民館だということ。使われなくなって長いが、取り壊される予定はないため、今は勝手に使っているという。不法占拠だろ、と突っ込みたいが、なぜか所有者はチームの関係者になっているらしい。

ほんとの廃墟を使ってるのは零を取り巻く者だけとのことだ。廃工場にたむろう不良の図を想像してしまったのは、そのチームが大勢力の中で最も不良が多いと、この時に聞いたからだろう。マツって人より酷いのだろうか？

また、盗難事件の際に犯人を追い込めたのは、六道館に通うチーム所属の生徒の協力を仰いだからだ、と教えてくれた。なるほど、だからあの日あんなに生徒が残っていたのか。番長が追いかけていたのも頷ける。

一通りの話をした後、先輩は「あとはあたしらがなんとかするか、この一件にはもう関わるな」と告げた。予想通りではあるが、僕達をこれ以上巻き込むわけにはいかない、そう考えたということだろう。

番長は不服そうだったが、先輩の説得に応じて諦めたようだ。

これで僕らはもうチームとかいうものに関わることは無いのだろう。帰り際にそう思った。

「更屋敷さん、どうしたんですか？」

今僕は家へと向かうバスの中にいる。今日は姫宮さんと同じ時間だった。一週間ほど前に知り合い、会うのは二度目だ。相変わらず魅力的だ。

「あ、別になんでもないよ」

二つのチームが同盟を結ぶことになったのは昨日の話だ。先輩達は今頃事件を追っていることだろう。

「そうそう、もうすぐ学園祭シーズンですね。高校の学園祭って初めてだから楽しみなんです」

「うちの学校は祭り好きの人が多くてさ、一年生も気合を入れて準備してるんだ。オレも初めてだけど、きっと盛り上がるんだろうな。希望ヶ丘も準備とかしてる？」

「こつやって話してる時間は新鮮だ。チームだとか、事件だとか、どうでも良くなってくる。実際、もう関係ないことだけど。」

「うちの学校、すごいんですよ。準備期間は二日しかないんですけど、その間授業が全部休みになるんです。その間に校舎を飾り付けたりするんです。中等部の頃、隣でやってるのを見て、早く高校生になりたいななんて考えてました」

楽しそうに笑顔で話している。この人もイベント事とか好きなんだな。おっと、中等部ってことはその時から希望ヶ丘だったのか。

「あれ、中等部でも同じ学校なら入れるんじゃないの？」

「女子校って厳しいんですよ。一般の方は生徒から招待状を受け取ってないと入場出来ないんです。自由に出入り出来るのは希望ヶ丘の高等部の先生と生徒だけなんです」

「うっひゃ〜厳しいんだね。誰でも自由に出入り出来るうちなんかとは大違いだ」

「だから毎年招待状を偽造してまで入ろうとする人がいるみたいなんですよ。でもどんなに精巧でもすぐに見抜ける人達がいるみたいなんです。十字騎士団なんていう人達が招待状のチェックや場内警備を担当しているとも聞きました」

あのチーム、そんなこともしているのかよ。あの女王とかいう人は確かに金持ちだろうけど、希望ヶ丘の生徒だったってわけか。しかも公認ってことは生徒会や教職員も手なずけることになる。とんでもない人だ。

「十字騎士団、あの人達がかあ」

「更屋敷さん、ご存じなんですか？」

「ああ、ちよつとね。名前くらいは」

おつとつい口が滑ってしまった。

「わたしの友達にいるんですよ、騎士団の人。昨日バスを降りて歩いてたら女剣士みたいな格好してホテルの前にいたのでびっくりしちゃいました。あの子、アニメ好きだからきつとホテルでコスプレのイベントかなんかあったんだと思います」

ちよつと待て、あのヴァルキリーって人のことかそれ。まあ確かにあの口調とか格好とかなんかのアニメかゲームにありそうだけ。つか姫宮さんの友達だったんだ。

「……なかなか変わったお友達ですね」

思わず敬語になってしまった。

「チームっていう集まりにいるのは聞いていたんですけど、十字騎士団だったつてのはこの前知ったばかりなんですよ。先日更屋敷さんにお話した面白い子つてのがその子です」

ああ、そうだったのか。その時はチームのことも彼女の事も知らなかったもんな。未だにオフ会という単語だけは分からないけど。

「ああ、よく学校を抜け出すつて友達のことか」

「そうですね。今日学校でその事を話したら、びっくりしてました。わたしもあの着たいつて言ったら、『姫、あれは遊びじゃないんだ』つてなぜか怒られました。しょんぼりですよ」

姫宮さん、あなたはその方向へ行かないでください。願わくばそのままです。お願いですから。

「でもああいうのつて憧れますよ。自分の好きな事に夢中つて感じで。ほんとに彼女はいつも五里霧中なんです」

「正しくは無我夢中だよ」

好きな事に熱中してるのに、方向を見失うつか迷つてどうする。まあ確かに昨日見た感じ、方向性を見失つてるような感じはするけど。騎士団にヴァルキリー つてどうよ？

姫宮さん、あなたもそのポケはわざとですか、それとも本気ですか？

「そうでした、うつかりです。やっぱり日本語って難しいですね」  
この人は四字熟語とか慣用句を使いたがる癖があるようだ。確信した。にしてもこれでもかの希望ヶ丘女学院高等部の特待生だもんな。だったら間違えるなよ。いくらかわいくてもちよつと引くぞ。いや、このくらいは僕にとってはまだかわいいものだけど。

「あ、着きました。それでは更屋敷さん、また会いましょう」  
彼女は前の時と同じようにバスから降りようとした。

しかしあたふたしている。  
ふと彼女が座ってた席を見る。赤いパスケース、どこるか鞆があった。

「……姫宮さん、鞆忘れてますよ」

「ああ、すいません！」

恥ずかしそうに僕から鞆を受け取り、運転手に見せて降りていく。なぜ忘れた？ 手ぶらで違和感を感じなかったのか？

なんとというか、姫宮さんって抜けてるよな。かわいいけど、なんだか不安になってくる。

忘れ物くらいならいいか、うつかりしてたっただけで誘拐されたりしそうだ。可愛いし、多分お嬢様だろうし。

2 .

「五人目だつて!？」

軍団と名乗るチームと四大勢力の一角、零を取り巻く者が決戦を行う前日、作楽のもとに五人目の行方不明者の知らせが入った。

『ああ、昨日の帰宅途中にいなくなったらしい。しかも今度はまた希望ヶ丘の生徒だ』

電話の相手はヴァルキリーだ。他のチームとの接触は基本的に彼女が行っているらしい。

「そうかい。そういえばその子も含めた行方不明者全員の名前、分かる?」

『今からメールでそちらに送る』

「助かるよ、ありがとう」

すぐに着信音が鳴る。

「お、きたきた」

作楽は行方不明者のリストを目で追った。

そこには見覚えのある名前があった。

土岐野愛沙。

風紀委員の子である。

作楽は風紀委員も動いていることを知っている。その一人が行方不明になったということは、

「あらら、敵さん、タブーを一つ犯したただじゃなく、一番敵に回しちゃいけない人物を敵に回しちゃったんだな。明日は大変な事になるぞ」

作楽は笑ってこそいたが、内心ビビってもいた。あの怪物委員長は敵勢力だけでなく、四大勢力までも潰しにかかってくるだろう。

果たしてどうなってしまうのだろうか……

土岐野が行方不明になった。

しかも既に行方不明者として知らされている二人は彼女と同じクラスだった。うちの学校は個人情報をあまり流したがらないのだが、さすがに一つのクラスから三人もいなくなったことで、情報を開示せざるを得なくなったのだろう。

土岐野は僕を嫌っている。正直いらない方が僕としてはありがたい。不謹慎ではあるが、事実としてはそうなのだ。だが、

あいつ、何やってんだよ。

やはり顔見知りだと気になってしまふ。今日、先輩達が解決してくれればいいんだけど。

そう、今日こそが決戦の金曜日なのだ。

なぜか今日、番長は学校を休んでいた。良からぬことを企んでいなければいいんだけど……多分先輩が説得したとはいえ、アイツは自分の正義を貫くだろう。前に言っていた「約束」とやらが嘘でなければ。

「やあ、少年！」

帰り際、作楽先輩が声をかけてきた。今日はまだいつものジャージハ パン姿である。

「なんですか先輩、今日が決戦の日じゃないんですか？」

「そうだよ。だからその前にキミに会っておきたかったのさ」

これが映画とかだったら、大体この後思いもよらぬ告白の後、死亡フラグが成立する。

「これからあたし達は今回の首謀者たちのチーム、軍団を潰していく。だから安心してくれよ」

「わざわざそれだけ言いに来たんですか。大丈夫ですよ、先輩なら

その程度やってくれそうですから」

四大勢力の力を見せつける、なんて意気込んでいたじゃないか。それにこの先輩はその場のノリで普通の人が出来ないことを平然とやってのけそうだ。別に痺れも憧れもしないが。

「うれしい事を言ってくれるじゃないか。そんなわけで少年」

そこで僕に呼びかける。

「今度は何ですか？」

「この前食べ損ねたから、次会った時は山村屋の豚まん、奢ってちようだいな」

「分かりました、高いけど気にしませんよ」

先輩、それ軽く死亡フラグじゃありませんか？ 気のせいならいいんですけど。

「よし、約束だ。じゃあな、少年！」

先輩は決戦の地に赴いていった。その際、彼女のポケットから一枚の紙切れが落ちた。渡しに行こうと考えたが、先輩はもう正門の方まで歩いていった。

「なんだ、これ」

そこには手書きでいろいろな単語が書かれていた。メモとして使っていたのだろう。先輩、意外と字が汚いな。

先日知った軍団とやらのアジト、ファンタジーワールドの名前がある。その下には失踪事件で行方不明になっていると思しき人物の名前が書いてあった。

え？

嘘だろ？ 確かにちよつと不安だったけど、まさかそんな……だつて、一昨日普通に話したばかりじゃないか。

もう一度名前を見ていく、三人目までは知らない名前だ。

四人目以降はこう書いてあった。

土岐野愛沙 橙学

姫宮香月 希望ヶ丘

どうする？ 先輩にはもう関わるなと言われている。だが姫宮さんが、姫宮さんが危険な目に遭ってるかもしれないのだ。何でも無ければいい。だが、この流れでは事件に巻き込まれてるのは間違いない。

何を迷っているんだ、更屋敷修。一目惚れだろうがなんだろうがここで助けに行かなければ一生後悔するぞ！

自分の心の声に耳を傾ける。

僕はもう何も考えていなかった。気付いた時には 駆けだしていた。

先輩に怒られても構うものか。そんなことより大事なものがあるんだ。

ただ僕は無我夢中だった。頭の中には姫宮さんのことしかなかった。

4 .

ファンタジーワールド跡は学校からは遠く離れている。かつては遊園地前にバス停があったが、今はその路線は廃止されている。今一番近いバス停は、その場所から徒歩三十分の場所だ。行くためにはそこまでバスで行って歩くか、タクシーを使うしかない。後者の場合、間違いなく運転手は行くのを渋ることだろう。

だから僕はバスで行くことにした。降りてからは全力疾走、一刻も早く姫宮さんを助けたかったのだ。

だんだんと周囲から人気がなくなっていく。ファンタジーワールドの付近にはあまり建物がないのだ。かつてはホテルやレストランが立ち並んでいたが、こちらは取り壊されている。あくまで怪奇現象が起こるのは園内だけなのだ。

走ること十五分、ようやく入口の巨大ゲートに辿り着いた。西洋のお城の門をイメージしたもので、長さ二十メートル、高さ十メートルという無駄な大きさである。

ここは封鎖されているはずなのだが、その門の脇にある関係者向けの通用口のドアが壊されていた。それでも人一人がなんとか通れるくらいだ。

よし！

僕は迷わずそこを進む、ようやく場内に潜入。と言いたいところだが、まだ来客用の駐車場だ。敷地の外周を囲んでおり、このスペースだけで五千台入るといふ。まだ看板が残っていたため、分かった情報だ。

この先に本当の入場口がある。四か所あるうちのどのゲートが使えるかはこの時点では分からない。まずはメインゲートから見ていくことにする。

駐車場には作業用のクレーンやトラックが放置されている。それらが動き出さないか不安だった。事実、面白半分でここに踏み込んで、轢かれたという人もいるのだ。不注意は下手をすると死を招く。メインゲートは半壊しており、そこから入るのは難しそうだった。結局入れそうなのは真反対にある裏門だけだった。

ここままで大きく時間をロスした。駐車場へ入ってから場内に入るまでに三十分もかけてしまった。外はすっかり暗くなっている。

もう先輩達は戦っているのか？

先輩のあとをすぐに追ったとはいえ、その姿を捉えることは出来なかった。きつともう中に入っていることだろう。

裏門を抜けると、遊園地の定番のアトラクションが僕を出迎えた。コヒーカップ、メリーゴーランド、空中ブランコがまず目に留まった。空中ブランコに至ってはワイヤーが千切れ見る影もない。あとは原型を留めていた。

ふとその時、遠くに明かりが見えた。普通ならば、こんな廃墟に明かりがとるわけがない。  
いる。

おそらくそこにいるのは敵である軍団だろう。もしかしたら行方不明になっている女の子達が監禁されている場所かもしれない。

僕はその明かりの場所へ向かうことにした。場所は園内の中心部、女神の神殿の辺りだ。営業していた頃はアトラクションであり、レストランであり、お土産物屋だった。そしてまた、観覧車に次ぐこの遊園地のランドマークでもあった。

こ、これは！

そこへ向かう途中、至る所に気を失って倒れている人がいた。中には、学校内で見た事のある人もいる。近くに角材や鉄パイプが転がっているところを見ると、敵側の人達だろう。まさかうちの学校の生徒もいたとは。彼らは全て知っていたのだろうか。

倒れている影を横目に、僕は先を急いだ。やられた敵は、ある程度間隔を開けて集中している。ポイントごとに襲撃して返り討ちに

遭ったってことか。

「ぐ、うつつ」

ふと、声が聞こえた。誰かが起き上がったか、それとも遊園地の亡霊か？

声の辺りを振り返ると、顔を腫れ上がらせた人物がいた。前者だったようだ。

「おい、何があった？」

今は暗い。心配するように駆けよれば、味方だと判断してくれるかもしれない。ダメでも相手は手負い、また気絶させればいい。

「な、アンタ味方か」

「そうだ。状況を見に来た」

適当な事を言っておく。今のところは疑ってないようだ。

「いきなりだ、黒い女が……ありゃあ、化け物だ」

黒い女、先輩のことだろうか？

「なんで、ここに……分かったんだ？ 地元の連中は、怪しがつても近付かない……はずなのに」

あれ、何かおかしくないか？

「零を取り巻く者から離脱して、この軍団に入ったんだ。今までの生温いチームとやらを変えるって、こっちのボスが言ったから……だからもう少し四大勢力の力を弱めていくはずだった。なんで、バレたんだ？」

痛みを堪えながら呟いている。

確か、宣戦布告したのはそっちのはずだ。それは火曜日に僕も聞いている。矛盾してないか？

「なあ、お前、何か知らないか？」

「……いや、知らない」

「そうか……所詮俺達はただ鬱憤を発散したかっただけだったのかもしれない。この軍団はそれを叶えてくれると、思った。だから二十ものチームが、零を取り巻く者を離れた、はずだった、でもそうではなかった、ということか」

このチームを潰す為に潜入したチームがいるかもしれないって事か。

でも、それでもまだ納得がいかない。それなら直接零を取り巻く者とやらに知らせればいい話だ。なぜ十字騎士団に、しかも挑発するような内容で知らせたのか、それがどうにも引っかかる。

「このチームは、もう終わりかもな。期待したのが、間違いだった。四大勢力を敵に回す恐ろしさが初めて、分かった。う……」

そこまで言うとなんか男はまた倒れてしまった。意識はあるようだが、起きてるのは辛いようだ。

一体、何がどうなっている？

ここにきてまた一つ謎が増えた。十字騎士団に情報を送ったのは一体誰なのだろうか？

「おやおや、まだこんなにいるとはな」

女神の神殿に辿り着いた時、先輩は得物を構えた者達と向かい合っていた。敵は三十人くらいいる。

先輩に姿を見られても面倒なので、物陰から様子を窺うことにする。

「な、なんだこの女。なんでここが分かった？　つーか何しに来やがった!？」

敵の声は明らかに動揺している。やはりここに拠点を構えてるところが知られていると考えてなかったみたいだ。

「何を言ってるのかなー、この坊やは。そちらさんが十字騎士団に対して宣戦布告したんでしょ。いつでも攻めて来い、みたいな感じでご丁寧に挑発までしてくれちゃったって」

先輩は楽しそうに喋っている。そこには余裕さえ感じられる。

「お、俺は、知らねえぞ！　ボスも何も言っただけ」

「んじゃ、後でボスに文句を言うんだな。この先にいるんでしょ。

ちよっと通らせてもらおうよ」

「さ、させるか!」

三十人が大挙して先輩に襲いかかる。いくらなんでもこの人数が相手じゃ先輩でも……

「まったく、どうしてこうもワンパターンなんだか」

一分もしないうちに三十対一の戦いの決着は着いた。

「あ、有り得ねえ、何者だ、女？」

倒れていたのは三十人の男達だった。先輩は無傷である。

「そうだな、？ 静かなる流動？ って言えば分かる人はいるかな？」

「まさか、？ 十一羽の鴉？ のリーダー、？ 蜃気楼の姫？ とも呼ばれ、二つの通り名を持つ……なぜ、こんなところに」

「ん、ちよつと子供のおいたが過ぎたんでね、あたし自らお仕置きに来たつてわけだよ。もうしばらくしたら十字騎士団とうちの連中が大挙して押し寄せてくるだろうさ」

先輩は余裕の笑みを浮かべている。

「今、お前何したんだ？」

「ただ、流れに身を任せただけだよ。あとは勝手に同士討ちしてくれただけじゃないか」

敵の顔は驚きに満ちている。

そう、先輩は僕から見れば、言ってる通りだった。

ただ敵の中を歩いただけだ。まるで流れるように、敵の攻撃をすり抜けていた。厳密に言えば、敵の攻撃が逸れ、他の仲間当たっただけだ。僕からすれば大人数で勝手に自爆しただけのようにしか見えない。

？ 静かなる流動？ ？ 蜃気楼の姫？ その二つの異名の意味を僕は知った気がした。静かに、ただ自然に流れるようにして敵の隙をつくしかも相手に自分の居場所を錯覚させる。なぜ先輩がバスケット部で無類なきエースなのも、この力のせいだろう。

「バカな、そんなことが……」

「頭で考えてるうちはあたしに攻撃する事なんて出来ないよ。大体人間が何かアクションをするときって、先に筋肉が動くんだよ。それを感じ取れば、隙について相手が認識出来ないところに自分の身

を移動させたり、自分の居場所を錯覚させたり出来るんだな」

簡単そうに言っているが、そう単純なことではない。一応僕も道場通いの経験がある。感覚に頼って相手の隙をついてあたかも瞬間移動やその場から消えたように錯覚させる技術はある。が、それを身につけているのは師範代にもほとんどいなかった。滅多に出来ない師範がマスターしていたくらいだ。

それをわずか十七歳でやってのけているのだ。先輩、あなた普通じゃありませんよ。

「まあ、分かったところでキミらじゃどうにもならないよ。さ、ボスを呼んでもらおうか」

しばらく間が空いて、その後人影がその場に現れた。

うわ、でけえ！

番長が巨体であるならば、現れた男は巨漢だ。二メートル以上はあるだろ。身長、番長の二倍くらいの太さの身体。しかも、一切無駄な贅肉がない。服の上からでもそうだと分かるほどだ。

「はん、もう来やがったのか。俺様が招待した覚えはねーがな」

「やあ、キミがボスかい？ 随分とでかい図体してるもんだ」

先輩は一切物怖じせず向かい合っている。

「は、だらしねーな、てめえら。こんな細っこい女一人にやられるなんてよお。なんだ、この街の男は女にやられるほどの腑抜けばかりなのか」

自分の仲間であろう者達を完全に見下している。この街の男、つてことは最近この区に来たということか。

「話には聞いてたぜえ、鴉共のリーダー。大層な名前を持つてるじやねーか、作楽凌さんよお」

「あれ、なんであたしの本名を知ってるのかな？ 四大勢力各チームのボスと一部の幹部しか知らないはずなんだけどさ」

そうだ、確かにチーム関係の人は彼女を本名で呼んでいなかった。「くかかかか、あの音川って小僧のおかげだ。あの腑抜けが盗んできたこの辺りの学校の奴らの名簿、あれって便利なもんだよなあ。」

名前と連絡先だけありやあ分かるヤツには分かつちまうもんなあ。が、てめえに関しちやあいつが直接顔を見てたからなあ。そんなもつて、一緒にいた小僧が作楽って呼んでたそうじゃねえか」

「音川少年は仲間だったってわけか。まさかそつからあたしの事まで分かるとはな」

音川のヤツ、あの後も繋がっていたのか。しかもちゃんと報告までしていた。

「ああ役には立ったぜえ、だから失敗も一度は見逃してやった。ところがよお、あいつ怖気づきやがったんだ。使えねえから始末したかな」

「始末した？ へえ、用が無くなったらゴミ箱へばい、か」

「使えねえものいつまで持ってたってしゃあねーだろうが。この辺りを俺様のモノにするためにはゴミはいらねえんだよ！」

この軍団のボスは、仲間をなんとも思っていないのか？ なるほど、音川はこいつにこき使われていたのか。あいつはこんな暴虐な野郎の下にいながら僕に勇気を振り絞って告げたんだけだ。それに気付かなかったとは……

あの口ぶりからすれば、音川はただじゃ済んでいない。僕を事件から遠ざける代わりに犠牲になったのか。くそつ。

「なんで我がモノにしたいんだい？ キミのおかげでこつちは今までのバランスが崩れそうで大変なんだよ。十五人も手にかけて、女の子を五人も連れ去って、あたし達を刺激してまで欲しがる必要なんてあるのかな？」

先輩はまだ笑顔のままだが、明らかに苛立っている。目の前の暴君に対して許せない気持ちで一杯なのだろう。

「俺様が全てのチームや不良共をまとめ上げ、縛りつければ誰も悪さは出来ねえ。強い者には誰も逆らえねえってことだ。こんでも俺様は平和主義なんだ。が、その平和を手に入れるためにはどんな汚えこともやるし、恨みも買ってやるがなあ！」

なんて勝手な言い分だろうか。僕もこの男に対しての怒りが爆発

しそうだった。結局こいつは自分が頂点に君臨したいだけなんだ。

ふざけやがって。

「ここに来る前も同じような事があってなあ。目ざわりな勢力があったから白黒はつきりつけてやろうとしたってえのに仲間に根性無しがいてよお。だからそいつをちよいと痛めつけて目を覚まさせてやろうとしたんだ。だが、逆効果だった、思い出すだけで腹が立つぜえ。そのせいで俺様は学校を追われ居場所を失くしたんだ」

ボスは壁を殴りつけた。壁には大きな穴が開く。つーか、コイツ、もはや外道だ。一度失敗してんのに悔い改めないとは。

「だが今度は上手くやってやる。俺様にはそれだけの力があるってえ事を証明してやる！」

僕は今までこんな自分勝手な人間に会った事はなかった。

「話は済んだかい？ 生憎、一つも共感出来るものがない。ちよつとキミはお仕置きだけじゃいけないな」

先輩の眼差しは鋭い。もう臨戦態勢、いつ飛び掛かってもおかしくない状態だ。

「はん、上等だ コイツらを倒せたらな」

先輩が入っていった入口に、武器を持った男達が押し寄せる。その数は五十、さつきよりも多い。

「なんだい、そんな連中何人いようと……」

そう言いかけた時だった。

「……っつ！！」

不意打ち。かろうじて避けたが、先輩にはその攻撃が予測出来ていなかったようだ。

それも当然かもしれない。一部始終をずっと覗いていた僕でさえ、その人物がいつの間に現れたのか分からなかったからだ。

現れた人物はボスの横に立っていた。戦隊もののヒーローみたいな格好をしている。確か、『リアルヒーロー』とかいう格闘ゲームのシリーズにいた、ガッツマンとかいうキャラだ。僕の記憶が正しければ、であるが。

ただ、おそらくアイツはタイツ仮面だろう。明らかに他の者達と雰囲気が違う。その風貌を抜きにして、だ。

「はは、あたしに一切気付かれずに背後に回り込むとは……やるじやないか、ヒーローもどき君よ」

余裕そうに言い放ってはいるが、顔には少し焦りの色が浮かんでいる。

「さあ、どうすんだ？ ザコ相手はいいだろうが、戦ってる際の不意打ちは予想出来ねえだろ。コイツははっきり言って強えぜ。俺様の次にな」

さすがに先輩の力を持ってしても、自分が感じ取れない場所からの攻撃は避けられない。

ましてたった今不意打ちを食らったばかりなのだ。

前にはただならぬ強さのタイツ仮面と思しき人物。背後にあたる入口には五十の軍勢。

絶体絶命。

先輩からすればまだ致命的な状況ではないのかもしれないが、それでもこれを無傷で切り抜けるのは難しいはずだ。

僕のいる位置からでは、その大人数が邪魔をして中の様子が見えにくくなっている。建物のガラスが割れていたりするおかげで、なんとか遠目ながら見えるという程度だ。

だからこそ、次の瞬間に何が起こったのか、まったく分からなかった。

グシャ！

入口にいた人間が何かに叩きつけられるような音が聞こえてきた。この距離で聞こえるということは、相当な勢いだったはずだ。

「なんだ、何が起こったってえんだ？」

ボスである巨漢は、目を見開いている。仮面は危機感を感じたのか、先輩を向いたまま踏みとどまっていた。

五十人、先輩に襲いかかろうとしていた者が、一斉に音のした方を振り返る。しかし、厳密に言えばその人数はもう少し少ない。最

も外側にいた人は地面に伏していたからだ。

「ぐうえっ！」

その場に突っ立っていた集団の一人が、勢いよく飛んでいく。その衝撃で次々と将棋倒しになる。人数が多いと、他の人間は巻き込まれやすくなるのだ。

最終的に、全員が室内の壁一か所に次々と激突していった。

しかもそれは信じられないことに　突如現れた一人の闖入者が一瞬のうちにやってのけた事だった。

「うっわー、一番ヤバい人が来ちゃったよー」

先輩は苦笑していた。僕は先輩の前に佇むその人を凝視する。

セーラー服、しかもスカートは足が一切見えないほど長い。そして木刀、まるで昔いたというスケバンだ。番長の女バージョンみただいな。

ウェーブのかかった長い髪、ふと目に留まった横顔に僕は見覚えがあった。

橙学の風紀委員長である。

そうか、以前僕を助けてくれたのはこの人だったのか。

「……うちの委員に手え出したのは貴様か？」

だがその口調は僕が知っているその人のものではなかった。しかも、先程の作楽先輩以上の剣幕である。視線だけで射殺されそうだ。

「なんだてめえは!？」

突然の思わぬ来襲に敵のボスもびっくりしているようである。

「風紀委員長だ」

きっぱりと言い切った。

「ふざけてんのか、コラア！」

男は咆哮するかのように怒声を上げた。だが、それでも委員長はまるで動じない。

「うおおおおお！」

二人が話しているところに、敵の一人が飛び掛かる。まだ立てるヤツが残っていたのか？

「邪魔だ」

一閃。

木刀で薙がれた男はその一撃で地面に叩きつけられた。コンクリートらしき床がえぐれている。

「ふざけてんのはどっちだ、デカブツ。貴様、自分が何をしたのかわかってるのか？」

「はん、威勢がいいじゃねえか。ああ、分かってる、分かってるぜえ」

「今まで誘拐した女子はどこにいる？ 答える！」

声が室内に響き渡り、僕の方まで聞こえてくる。

「この敷地のどっかにはいる。だが今は監視をつけてねえ。もたもたしてつとお化けに連れてかれっちまうかもよお？」

かはははと笑いながら答えた。それは委員長達を嘲笑っているようだった。

「そうか、ならば貴様を殺すまでだ。貴様はあまりにも私を怒らせ過ぎた。私が飽きるまで殺し続けてやる」

「出来るもんならやってみるよ！」

ボスが挑発する。その顔には自分は負けないという自負がある。それは委員長も同じ事だろう。

同時にタイツ仮面らしき人物　ガッツマンもどきは跳躍し、入口側に降り立つ。そして振り返り、先輩と向かい合う。

「そちらさんもやる気満々か。へえ、こいつは手強そうだ」

ちようど委員長と先輩が背中合わせになった。お互いに対峙する人物を見据えたまま、話し始める。

「あれ、一緒にやるのかい？」

「勘違いするな。貴様ら四大勢力もこの機会に潰すことに変わりはない。ただ、私は先にそいつらをぶち殺さないと気が済まないだけだ」

「はは、じゃあこれが終わったらあたしはすぐに逃げなきゃな。さすがに連戦でキミとやり合うのは堪える」

「私から逃げられると思ってるのか？」

「はは、それでも逃げ切るさ」

「軽口を叩いていたが、二人はそこで気を引き締め直した。

「じゃあ、始めようか」

5 .

この敷地のどこかに姫宮さんが、いる。

戦いの一部始終を見届けた僕は、ファンタジーワールド内を駆けまわっていた。この敷地内に行方不明の人達がいると知った以上、じつとなどしていられなかった。

ただ、この遊園地は広い。しかもいくつかの通路は老朽化して使い物にならないため、迷路のようにもなっている。施設を一力所一か所見ていくだけでもかなりの時間がかかること必至だ。

「おい、お前」

走っている、敵の一員と顔を合わせてしまった。中学以降喧嘩などほとんどしたことのない僕には、相手をしている余裕などなかった。

ここは逃げるしかない。うまく撒く事が出来れば、姫宮さん達を探し続けられる。

しかし世の中うまくいかないものである。追っては二人、三人と次々に増えていく。これはまずいぞ。

「待ちやがれえええ!!」

待てと言われて待つヤツなどこのご時世にいるものか。いい加減にそのテンプレめいた言い回しは止めてくれ。

とはいえ、僕の体力もそんなに長く持つわけではない。だんだんと疲れてきていた。敵の方は敷地の至る所から飛び出してくるため、途中で離脱する人がいても、常に全力で追いかけてくるヤツがいる。

くそ、やるしかないのか？

だがどうやって？ 腕力だけでは話にならない。何かがあれば……

ここは廃墟だ、考えようによつては、武器はそこら辺に散らばっている。使えそうなものはどこだ？

錆びたポールが目飛び込んできた。元々電気が灯り、街灯の役割を果たしていたのだらう。それが何本もある。強く蹴れば折れるだらう。よし、

「喰らえ！」

力一杯それを蹴る。通路に倒れることで、障害物の役割を果たすはずだった。

「うわ、あんまり意味ねー」

確かに倒れる際に一瞬敵は怯んだ。だが、それでも長く足止めは出来なかった。

これではもはや探すどころではない。やはり先輩達がやったように、全員打ちのめさないといけないのか？

そんな時、売店などが集まっていた一角の瓦礫の中から、ある物が覗いてた。

お、これなら。

そこにあつたのは装飾が付いた自転車だった。営業していた頃、従業員が移動用に使っていたものらしい。

すぐさま僕はそれを引きずり出した。運がいい事に、鍵はついてなかった。タイヤもパンクしていない。

「おらー、どけええええー！！！」

自転車を跨り、自ら敵へと体当たりしていく。いつそのまま引いてやるうか？

「ち、そんなのありかよ！」

さすがに疾走する自転車の前に身を挺してまで止めにかかる人はいなかった。おかげで、ひとまず窮地を脱することが出来た。

ふう、撒いたか。

追いかけてくる様子はない。だが、敵は確実にいる。この中で女の子達の監禁場所を探すのはかなりハードルが高い。

再び自転車をこぎ出す。先程とは違うルートを使って移動するが、

常に警戒しなければいけないので、かなり精神的にしんどかった。

推定、西ゲート付近。四つのゲート付近は、どこも街のような外装をしている。僕は自転車を降りてその中へ入っていった。どうやらまだここには敵はいない……

「見つけた！」

待ち構えていた。

人数は五人、決して多いわけではない。だが、僕一人でどうにかなる人数ではない。さっきの委員長や先輩、あのチームの幹部の人達と違って、あくまで普通の人間なんだ、この更屋敷修という男は「いい度胸してんな。ここまで入って来るなんてよ」

じわじわと取り囲む輪が狭まっていく。

く、ダメもとで足掻くか。

「おい」

僕は最初五人の一人が言ったものだと考えた。しかし、その声に對して全員が反応を見せた。

「だ、誰だ？」

「俺の友に手を出すな」

現れたのは大柄で目つきが鋭い男だった。黒い学ランに、ゲタ。

そんな時代錯誤な格好した人物を、僕は一人しか知らない。

「ば、番長！」

「大丈夫か」

なぜ、ここに來たんだ、お前？ 今日学校を休んでいたんじゃないのか。

「なんだてめえ！」

五人の視線が番長に集まる。が、目の前にいるのは自分達よりも大きい、それでいていかつい風貌の男だ。彼らは圧倒されていた。足が震えている。

「失せろ」

番長はただ静かに、告げた。それでも敵は動かない。

「失せろ、と言ったんだ」

二度目。鋭く、それでいて低い声で言い放った。そこには相手を威圧するほどの強さがある。

「く、覚えてやがれ！」

五人は番長に勝てないと判断したのだろう、逃げるように去っていった。

「なんでお前、ここにいんだよ？」

「やはり黙って見過ごせない。先輩には申し訳ないが、俺は戦う」

ああ、やっぱりか。もはや事件に飛び込むのはコイツの本能だもんな。

「それで今ようやくここに辿り着いたってわけか」

「この場所は学校から遠い。だから朝からこの場所を探し回っていた」

「お前、だから学校来れなかったのか？」

番長はこくりと頷いた。なるほど、じゃあなんで着いたのがこんな時間なんだ？

「そつだ。ここを探すのに苦労すると思っていたが……気付いたら他県にまで行っていた。おかげで時間を食った」

いくら方向音痴でもそれはねーよ。その前に道間違えたって気づけ。

「とにかく番長、ここどこかに行方不明の女の子がいる。探すの手伝ってくれ」

「了解だ」

番長としては敵のボスと対峙したかったことだろう。だがそつちは委員長と先輩の領分だ。あの二人なら心配ない。

まさか委員長があそこまで強いとは思わなかった。風紀委員が下手なチームよりタチが悪いっていう先輩の言葉の意味がようやく分かった。

しばらくして、僕と番長はようやく当たりを見つけた。中心部である女神の神殿からそれほど離れていない、スタッフ用の衣装倉庫

だ。

扉を開いて中を見渡すと、連れ去られた女の子達がいた。

「姫宮さん!」

僕はすぐさま姫宮さんに駆け寄った。が、反応はない。

「そんな……」

他の女の子達も同様に動かない。ずっと眠ったままだ。

安心して下さい。彼女達は眠ってるだけです。

暗がりの部屋の奥から声が聞こえてきた。

「うわっ!」

その瞬間、倉庫内に明かりが灯った。いきなりの光に一瞬目が眩

む。ただ、そのおかげで目が治ったら、声の主をすぐに発見出来た。

「お、お前は……」

6 .

「そろそろ始まつてる頃ですわね」

希望ヶ丘女学園の一室に、十字騎士団の女王はいた。団長代理のヴァルキリーという女性も一緒である。

「なぜ私を行かせてくれなかったのですか？　あなただって姫の事が心配なはずでしょう？」

「あの子なら大丈夫ですわ。どんくさいようで、結構しっかりしてらっしゃるのよ」

「ですが……」

「今回の同盟を組んだ目的、それは荒事をあちらに押し付けるためですわ。知つての通り、うちは情報とお金で四大勢力の一角を維持しているに過ぎませんの。騎士団という名前の通りの強さだったのは昔の話ですわ」

女王はティーカップを手に取り紅茶をすすする。

「オレンジペコーというのもたまにはいいですわね。気分が癒えますわ」

「悠長な事を言ってる場合ですか」

「大丈夫ですわよ。鴉は力ではなく技のチーム、こちらが情報でサポートすれば十二分に活用してくれますわ」

「それで行方不明者の詳細や敵の推定規模などを偽りなくお教えしたのですか」

「ええ。わざわざ嘘をつく必要はありませんわ。今回は好き勝手暴れてる部外者を排除すること、それだけですわ」

彼女の考えはそれだけではない。このような事態があつた以上、今の体勢も見直す必要が出てくるだろう。そのためにも、今のうちに他の四大勢力に手を回しておくのも策の内だ。

「どうしても心配なら、今からでも行っただいいですよ。着く頃にはきつと全て終わってるでしょうけど」

その言葉により、ヴァルキリーは部屋を飛び出していった。

「ふふ、あの子が大好きなんですね。最初から行かせるべきだったかしら？」

彼女にとっても姫宮香月は大切な友人だ。決してそれだけではないのだが、だからこそ女王は彼女が無事だと心の奥底で確信していた。

「そういえば、一つだけ鴉さんに伝えてないことがありましたわ。大した問題ではないと思っただけですが……」

彼女は一枚の用紙を眺めた。そこには今回の事件とは直接関係がないだろう、別の一件についてのレポートがあった。

「最初の暴行、及び盗難事件が起こる一ヶ月前に行方不明になっただんですわね。それにこの名前……どこかで聞いた覚えがありますわ」

そこには一人の人物の名前があった。

音川優、と。

7 .

「わざわざ警告までしたのに……自分から飛び込んでくるとは少々驚きですよ、更屋敷さん。おや、あの時のお友達も一緒なんですね」  
目の前にいるのは、一人の少年、いや少女か。男とも女とも取れる端正な顔立ち、細身の体躯。そのような特徴を持っている人物を一人知っている。だが、

「お前、音川なのか？」

その姿は僕の知っているものとは違う。雰囲気は近いものの、スカートは履いていない。髪は男にしては長いものの、今まで見た長さではない。

なにより、今の彼におどおどしさは一切存在しない。堂々と僕と番長を見据えている。

「正確には音川優だった……ですね。ちょっと彼の存在を貸して貰ってました。九月くらいからですね」

「どういうことだ？ それじゃお前は誰なんだ？」

「そうですね、？ 真正なる贗者？ と名乗っておきましょう。と言ってもあなたは御存じないでしょうけど」

通り名がある、ということはこの軍団以前の何らかのチーム関係者ってことか？

「それより更屋敷さん、どうして来ちゃったんですか？ 一度は助けられたから、せつかく遠ざけてあげようと思ったのにな？」

「大切な人が巻き込まれたからだ」

「なるほど、あなたも案外単純なんですね。もう少し賢いかと思いましたが」

音川だった人物は僕をあざ笑うかのように嫌らしい表情を浮かべている。

「無関係な人まで巻き込んでおいて何を言っただい！」

さすがに僕も怒っていた。コイツは明らかに今の状況を楽しんでいる。

「嫌だなあ。僕は提案はしましたが、何もしてませんよ。ああ、確かに名簿は盗んでましたね。それだけですよ」

「何を言ってる？ お前は軍団の一員として動いてたんじゃないのか？」

「そんなわけないじゃないですか。あんな単細胞なデカブツの下につくなんて、反吐が出ますよ」

そこで思い出した。あのボスは確か音川は処分したと、そう言っていた。

「まあ、そんな事堂々とは言いませんでしたけど。ただ、あなたに逃げるみたいなお話したじゃないですか。あれがバレましてね、そこが音川優としての潮時でしたよ」

「じゃあ、処分されたってのは？」

「本物の音川少年ですよ。ちょっとかわいそうなおことをしてしまいました。あれ、なんでその事を知ってるんですか？」

そうだ、僕が本来ならば知るはずが無い事なのだ。

「まあ、いいでしょう。ついでに言っておけば、ボクが女の格好をしていたのは単純に都合が良かったからですよ。本物の音川少年を知ってる人に出くわしたら困りますからね。さすがに交友関係まで調べる時間はありませんでしたから」

確かに、どつからどう見ても女だった。ぱつと見、写真で見た音川と顔が同じでも同一人物だとは思えないほどに。ほんとにコイツ、男女のどっちなんだ？

いや、僕が今知りたいのはそんな事ではない。

「お前の目的はなんだ？ 軍団とやらとは別なのか？」

「そうですね、彼らはいくまでも道具ですよ。ちょうどタイミングよくあのデカブツがこの街に現れてくれたものですから。ボクはです、ね、ずっと疑問に思ってたことがあるんですよ」

「なんだ？」

「更屋敷さんに言っても分からないでしょうけど、チームはかつて頂点を目指してしのぎを削っていたんですよ。それが、いつの間にか大きくなって、四つの大きなチームが均衡を保つことで丸く収めちゃって。今はもうかつてのようなチーム同士の熾烈な戦いや駆け引きも見ることが出来ない、完全なマンネリ化ですよ。チームという形にこだわる意味がありません」

「何が言いたい？」

「ボクは、そんな今の状況をぶっ壊したいんですよ。そのための起爆剤が欲しかったんです。昔のように、学生達がそれぞれ徒党を組んで戦う、そんな活気溢れる頃に戻って欲しかったんです。そうすれば請負業をやってるボクの仕事も増えますしね」

「コイツ、一体何者なんだ？　まるで昔のチームをその目で見てきたかのような口ぶりじゃないか。見るからに十五歳以下なのに。」

「こんな停戦状態はつまらないんですよ。四大勢力にビビって緩衝地帯では何も出来ない、真つ向勝負も挑めない。ほんとに四大勢力も頂点を目指したくて仕方なかったはずなのに、いつの間にかぬるま湯浸りになってしまった。許せないんですよ、それが」

「だからと言って、こんな無関係な人も巻き込むようなやり方は決して正道ではない。」

「ボクがなぜここにいますか？　はっきり言いますよ。あの軍団が倒され、四大勢力のどこかが来ると踏んだからですよ。その上で真実を伝えるつもりだった。このままではいけない、と」「どうしてそう言い切れる？　もしかしたらまだこの場所が発見されてなかったかもしれないのに？」

「この事を四大勢力の一つに流したのはボクですよ。ある程度協力はしましたが、さすがにやり過ぎた。そろそろ潮時だと思っただですよ、十分起爆剤の役割は果たしましたし。それに、こうでもしなければこの場所には誰も近づきませんから。長い時間をかけて仕込んだ甲斐がありましたよ」

何だ？ この亡霊遊園地をその名が示す通りにしたのもコイツだと言うのか？ 口ぶりからするとそういうことになる。閉園したのは五年も前だぞ。

「協力者を見つけるのは大変でしたよ、かなりの財力が必要にもなりませんから。舞台は何年もかけて準備されていたんですよ、それがたまたま今必要になったというだけです」

「亡霊遊園地の噂を作り出したのもお前なのか？」

「そうですね。チームはもうそれよりも前からマンネリ化していたんです。ただ、それを打ち壊す存在がなかなか現れなかったんです。淡々と笑みを浮かべたまま語ってる。このマスターフェイクという人物はそんな前からチームを知り、そして変えようとしていたのか。ほんと何歳だよ、コイツ。」

「とはいえ、半分成功、半分失敗ですね。一番の想定外はあなた方ですよ。チームのデータにも一切載っていないというのに」

「オレも関わるなんて思ってもみなかったぞ。それはお互い様ってやつだろ？」

こっちが意外だよ。まさか事件の裏側にまで到達してしまうとは。しかも想定していたよりも随分来るのが早いんですよ。おかげでほぼ素顔のままですよ、困りましたね」

何を困ることがあるというのだろうか、この人は。

「一応、ボクは正体不明の請負業者ってことになってるんですよ、だからほとんど素のこの状態を見られるってのは非常にまずいわけです。と、言う事で少々手荒ですが忘れてもらいますか」

言い終わるや否やというタイミングで、掌底が飛んできた。かなりの速度だったがなんとか避けることが出来た。

「な、何を！」

「ちよつと眠ってもらうだけですよ、起きる頃にはボクの顔は思い出せなくなってるはずですよ。これでもちゃんと打点は心得てますから、ね」

続いてもう一撃。全て正確に僕の頭を狙っていた。

「番長、女の子達を頼む！」

身動きが出来る番長に女の子達の身柄を任せる。出来ることなら、姫宮さんだけでも先に安全なところまで連れてって欲しいが、そんな事を言える状況ではない。

「させませんよ」

ターゲットを僕から番長に切り替える。その動作はひよつとしたあのタイト仮面よりも上をいつてるかもしれない。僕が知ってるあの弱々しい少女のような少年の面影はどこにもない。

「む……」

番長は攻撃を受けきった。それどころか、反撃もしている。素人の殴り方ではあるが、スピードはある。

「そういえば、あなたには借りがありますね。結構痛かったんですよ、あれ」

今度は袖から何かを出す。筒状のものが五本、それらを瞬時に組みたてる。

「ぶほっ！」

それが何か分からなかった僕は次の攻撃をもろに食らってしまった。

「油断してますよ、更屋敷さん！」

それは棒術で使うような棒だった。確か六尺棒とかいうやつだ。それを服の中に仕込んでいたとは。

よく考えて見れば二対一、リーチが長い方が優位と踏んだのだろつ。

棒による連打、番長も僕もともに近づく事が出来ない。ある程度距離を置くと、音川は棒を一時的に放し、接近してくる。そして直接頭を狙ってくる。

隙のある攻撃のようだが、動作の一つ一つが早過ぎる。

「お二人とも、避けてるだけじゃ話になりませんよ！」

だが、防戦一方である事に変わりはない。こちらが攻撃する隙など、まったくないのだ。「くそっ！」

それでも何度か反撃を試みる。だが上手くはいかない。番長が引きつけている時でも、ちゃんとこちらの状況を把握している。それでいて相手には余裕がある。

手加減してるのか？

そう見えるほどだった。唯一、頭部への攻撃だけが本気だ。それは気迫で伝わってくる。

「しまった！」

ほんの一瞬の事だった。間合いの外に一度は出たものの、よく見ると一歩分踏み込んでしまっていた。

「やられる！」

棒での一撃、こちらは当たっても一発ではさほど威力はない。ただ、当たれば次に飛んでくるのは頭部への掌底だ。

僕は敗北を覚悟した。

え？

しかし、僕には攻撃が当たらなかった。目の前に突如一人の人物が飛び込んできたからだ。なぜ、お前が……

「土岐野っ！！！」

8 .

「もう終わり？」

番長、更屋敷の二人が偽音川こと正当なる贗者と戦っている頃、委員長・作楽対軍団のボス・その相棒との勝負は決着がつこうとしていた。

「……！」

覆面を被ったガッツマンもどきは立っているが、満身創痍である。一方の作楽は余裕の表情である。

「なんだか期待外れだよ。もっと楽しませてくれると思ったのに。よくその程度で十五人も狩れたもんだな」

後輩二人を手にかけて事からどれほどのものかと思っていた。確かに動きは俊敏、色々な体術を身に付け、それらを独自のやり方で組みあわせた戦法を使ってきた。

しかしそれだけだ。

それが作楽を狙うものである以上、必ず相手の気配は自分の方を向く。それを感じ取れば、自然に身体が避ける。ただその身を預ければいいだけなのだ。それこそが？ 静かなる流動？ たる真の所以である。

「あー、一言いい？ あたし、自分からは一回も攻撃してないよ？なんでそんなわざわざあたしが手を突き出したりした時、わざわざそこに突っ込んでくるんだい？」

相手は「何を言ってる？」とばかりに動揺しているようだ。身体がぴくりと動いた。

流れを読む、ということとは裏を返せば相手が攻撃をする際にどこに来るか分かるということである。だったら初めからそこに来ることを前提で構えていればいい。あとは勝手に食らってくれる。

「とはいえ、あたしに触れることが出来るのって今までに三人しかいなかったんだよな。一人はそのおっかない人だけ。おい」  
作楽は背後で戦ってるだろう委員長に声をかけた。

「そっちは終わったかい？」

間延びするような声で呼びかける。返事はすぐに返ってきた。

「ああ、もう三十回くらいぶち殺した。案外タフでな、まだ立ち上がってくるからあと二十回くらい殺しとく」

「あんまり遊び過ぎないでよー、ほんとうに殺しちゃったら大変だから」

様子が気になったので、敵がいるにも関わらず、委員長の方を振り向いた。当然、その隙にガッツマンもどきは最後の力を振り絞って彼女に迫る。

「よつと」

ただ裏拳になるように手を肩の後ろに出しただけだ。だが、勢いづいてた敵はその拳に顔面から当たり……その衝撃で気を失った。

「あら、堕ちたか」

ちよつと足で蹴ってみたが、動かない。完全に意識を失っているようだった。

もう興味も失っていたので、視線を戻す。そこには全身が痣だらけになった巨漢の姿があった。

「ぐぼあ、てめえ……鬼か、まだやんのか」

「ああ、確かに私は鬼だ。言っただろう、気が済むまで殺すと」

委員長のも作楽同様、余裕そうだった。その目は鋭く、ただ刺すように男を貫いている。その視線だけで射殺せそうなほどに。

「くそ、なめんじゃねえぞ女あああああ……！」

怒りのあまり、男は委員長へと飛び込んでいく。迫力はあるが、動きは鈍い。

「何度やっても同じだ」

彼女は木刀をただ一振り、それで相手は倒れるはずだった。

バシッ！

男が伸ばした手が、木刀を掴む。

「なんだ、まだ力が残っていたか」

掴まれても委員長の表情は変化しない。

「かは、かはは、ようやく捉えたぜえええ!!」

木刀を掴み、そのまま力任せに委員長ごと投げ飛ばした　かに  
見えた。

「な、何だと!？」

天井にぶつかろうという時、彼女は反転し、天井を蹴って勢いを  
つける。

「私の一振りを受け止め、反撃までしたのは貴様が初めてだ。だが、  
まだ弱い」

そのまま一直線に男へと飛び込んでいく。

「くたばれ」

作楽には木刀の軌跡を追う事は出来なかった。それほど早く、  
そして渾身の一撃だったのである。

巨漢はもう立ち上がってはこなかった。今のは完全にとどめとな  
っていたのだ。

「……ようやく終わったようだな」

作楽は声をかける。

「まだだ。捕まった女子達を探さねばならない。お前を葬るのはそ  
の後だ」

「はは、あたしも手伝うとするよ。ここまで来てただ暴れて帰った  
んじゃ、ただのストレス解消じゃない？　せつかくだから正義の味  
方っぽくカツコつけさせてよ」

「勝手にするがいい。ただ、その後は分かってるな？」

「何度も確認しなくなっただいいよ。終わり次第おさらばだな。ナギ  
ちゃん、前より化け物になってるから、正直やり合いたくないんだ  
よ」

簡単には逃がしてくれそうにないけど、とまでは言わなかった。  
ひとまずの目的は一致している。

二人は監禁場所を探しに歩き出した。もちろん、倒した男達は縛りつけて。

9 .

僕の前にいきなり土岐野が飛び出してきて、身代わりになった。なぜそんな事をした。

「更屋敷、何してんのよ……こんなところで。アンタが、私を捕まえた、もんだと思って飛び出しちゃった……じゃない」  
「違う。それなら僕を庇うように前に出るはずはない。」

「これは想定外ですね。危害を加えるつもりはなかったというのに」  
偽音川は困ったような顔をして呟く。だがそこに悪びれた様子は一切ない。

「バカ、気が付いてるならなんでさっさと逃げ出さなかった!？」  
「アンタの顔、見たら、罵らなきゃ……気が済まなかったのよ」  
相当痛みが来ているのか、苦しそうに言葉を続ける。

「……昔の借りは、返したわよ……シユウちゃん」  
再び土岐野は倒れた。なんだ、昔の借りって？ それに、小さい頃の僕の呼び名をなぜコイツが？

土岐野に近づき、じっとその顔を見つめる。眼鏡は先程の攻撃のせいで割れてどこかへ行ってしまった。

あれ？

今まで気付かなかったが、土岐野のその顔には懐かしい感じがした。面影も残っている会った事があるはずだが、なかなか思いたせない。

「また気絶してしまいましたね。こちらにとっては都合がいい事ですが。取りあえず謝っておきますよ、ごめんなさい」

「なぜオレに謝る。相手が違うだろ!」

「意識のない人に何を言ったって変わりません おっと」

僕と向かい合ってる隙に、番長が偽音川に殴りかかる。

「そうでした、あなたがいた事をすっかり忘れてましたよ」  
再び棒を持つと、戦闘態勢に入る。

だが、僕は土岐野の事が頭に引つかかっていた。橙学には小学校からの知り合いはいないはずだ。あるとすれば、昔通ってた道場が一緒だったヤツか。

そういえば、昔弱虫でみんなからいじめられてよく泣いていた子がいたな。僕ともう一人でよくいじめっ子をぶちのめして助けてやっつけたっけ。

確か、僕達はあいちちゃん、って呼んでたな。

あれ、あい？

ときのあいさ……あ！

そうか、だからさっきあんな事を言ったのか。

くそ、気づかねーよ。なんであんないつも泣いていたちっさい女の子がこんなクソ真面目キヤリアウーマンみたいな女になると想像出来る？ しかもほぼ十年振りだぞ、それで気付けるわけがないじゃねーかよ。

あ、でも土岐野が僕の事を分かっていたってことは、僕は昔から変わって無かつたってことか。それはそれでショックだ。

まあ、後でちゃんと言わないとな。

「さて、更屋敷さん。女の子一人盾にしようと、自分では何も出来ないんですか？」

偽音川が挑発してきた。盾にしただと？ そんなつもりはない、それに女の子を盾にするほど僕は落ちぶれちゃいない。

「お前、少し黙れよ」

「あれ、何か言い……」

「黙れつつつたんだ!!」

目の前に棒がある事など関係ない。頭で考えるよりも先に僕の手が出ていた。さすがに僕にだって言われたくない事の一つや二つはある。偽音川よ、お前はあまりに僕を見くびり過ぎた。

「あら、折れてしまいました。それに三体式 なるほど、形意拳

ですか」

僕の構えを彼は知っていた。ちなみに、棒を叩き追った際に使ったのは劈拳だ。

「ならば、こちらで戦い方を変えなければなりませんね」

棒を捨て、偽音川は間合いを詰めてきた。

もらった！

構えを取ってる僕の間合いに入ってきた。こちらは打突の準備が出来ており、一歩踏み込めばそこで勝敗は決するはず……はずだった。

「ぐはあつ！」

確かに僕の方が早かったはずだ。だが、腹が抉られるような痛みを覚え、吐きそうになった。こちらの打突が弾かれ、相手の拳が身体にめり込んでいた。

「さて、八極拳はご存じですか？ 接近戦ではこちらの方に分があるんですよ。あなたは形意拳を使えるが、使いこなしてはいません。経験の差でボクには勝てませんよ」

そう、確かに何年も離れていた僕に、道場で習っていた技術の全てを使いこなすことなど出来るはずがなかった。

「さて、終わりにしましょう」

構えが崩れただけならまだいい。今の僕に守りの体勢になる余裕もない、だが……

「終わるのはどっちかな？」

偽音川のすぐ後ろ、番長が抱きかかえるように彼を取り押さえた。

「お前、こつちが二人いることを忘れ過ぎなんだよ」

「これは油断しました。ですが、僕はこの状態でも実は動けるんですよ」

だが、一切彼はそこから抜け出せなかった。

「く、なぜです？ この男はそれほど強くないはず……」

その顔には焦りの色があった。思い通りにならない理由が分からない、という顔だ。

「俺は確かに弱い。だが、それは喧嘩の話だ」

番長は静かに言い放つ。そう、コイツは喧嘩は強くない、それはタイツ仮面の一件でも明らかだ。

だが、そのガタイの通りの筋力は持っている。偽音川はそれでも急所を狙おうとしたのだが、おそろくうまくいかないだろう。二人の体格差も、彼の計算外だったようだった。

「覚悟はいいな、音川！」

僕は立ち上がり、拳を握る。

「もはや、これまで……ですか」

その顔に浮かんでいたのは諦めか、それとも悔しさか、それは僕には分からない。

ただ一発だけ、僕はそいつを力一杯ぶん殴ってやった。

「はあ、はあ」

僕と番長は偽音川を見つめていた。意識はまだあるようだが、ダメージのせいで立つのが辛いのだろう。たかだか一発でも、劈拳の威力は相手を立てなくするほどのものがある。もちろん、直撃すれば、である。

「番長、大丈夫か？」

「問題ない」

僕達は急いで女の子達を起こしにかかる。僕の最優先事項は姫宮さんだが……

「おい、土岐野。しつかりしろ」

まずは自分の身代わりになった土岐野が先だ。いくらなんでも、自分を救ってくれた人をなおざりには出来ない。

「あいちゃん、僕だよ、シューだよ」

昔の名前で呼んでやる。マンガとかだと、こうというのが効果的なんだよな。

ゆするが、まだ目を覚ます気配はない。

「ふふ、負けてしまいました。やりますね、お二人さん」

偽音川は横たわったままに口を開く。

「本当に予想外ですよ、十年以上チームやそれを取り巻く人達を見  
てきましたが、何の力もないただの人がここまでやれるとは」

「自分のためならこんなことにはならない。自分以外の誰かのため  
に本気になったからこそ、こうなったんだ、なあ番長」

そう、僕にもこの結果は予測出来なかった。咄嗟にやった形意拳、  
まさか六尺棒を折れるとは思わなかった。人間、追いつめられると  
どうにか頑張ってしまふものなのだろう。番長のバカ力も、もしかし  
たらその類だったのかもしれない。普段から力そのものは強い事に  
変わりはないのであるが。

「それでも、ボクの計画は半分は達成出来ました。チームは今の自  
分達を見直す必要があると気づく事でしょう。その後は知りません  
が、ね」

だが、そこで一度口を閉ざした。

「おい、音川」

「少し寝ますよ、まあ起きたら鴉あたりに連れてかれそうですが」  
そして目を閉じた。

「う、うん」

入れ替わるように土岐野が目を覚ます。

「大丈夫か、土岐野!？」

「触らないでよ!」

心配して駆けよった僕が彼女の肩に触れた瞬間、土岐野は怒鳴っ  
た。

「大丈夫そうだな、良かった」

「良くないわよ、誰のせいでもなかったと思っての、バカ」

彼女のこの態度はもう日課だ。僕はそれをよく知っている。いつ  
も通りで何よりだ。

「バカで悪かったな。お前のこと、忘れるような……バカで」

「え?」

土岐野が目丸くした。

「あいちゃん、だろお前？ 昔道場にいた泣き虫の」

「なんだ、土岐野？ どうしてそんな意外そうな顔してんだ？」

「あ、あ、泣き虫って。アンタ私の事そう思ってたの？」

「そうだろ？ 別にいいじゃんか。昔の事なんだし」

「良くないわよ、しかも私の顔まで忘れて」

「十年近く経ってるんだ、しかもお前変わり過ぎだ、分かるかよ！」

「うっさい！」

土岐野は顔を真っ赤にしている。そんなに恥ずかしい事じゃないだろ？

「また会おうねって言ったのはどこの誰よ」

「言っただけ、そんな事？」

そう言えば、土岐野が道場を辞める日、何か言った気がする。忘れたけど。

「つくづくむかつく男ね！ もういい、アンタの事をずっと意識してた……あたしがバカだったのよ」

「淋しそうな表情になった。なんだ、どうした？」

「……それに、こんなとこまで助けに来るなんて、なんでアンタがするのよ。別に誰も感謝なんか」

「姫宮さん、大丈夫か？」

「っておい更屋敷！」

土岐野が最後の方まで何か言ってるような気がしたが、やはり僕は姫宮さんの方が心配だった。ああ、ごめん土岐野。

「う……あ」

「良かった気がついた！」

「あれ、更屋敷……さん？」

「大丈夫、姫宮さん？」

姫宮さんは目を覚ました。

「あれ、わたし……更屋敷さんと別れて、それから」

「もう大丈夫、助けに来たんだ」

取りあえずいいところは見せておきたい。例え番長や土岐野がい

ようとも。

「怖かったです。何されるか、ずっと不安で不安で、うわああん」  
姫宮さんはそれほど怖かったのか、泣きだしてしまった。

「姫宮さん……」

「そつだよな、こんなところにずっと閉じ込められて怖かっただろ  
うな。」

「全て終わったよ。早く帰ろう、さあ」

彼女の手を取り、促す。

「番長、他の子達は？」

「大丈夫だ」

他の女の子達も目を覚ました。みんな何かに怯えるような顔をした後、今の状況を理解して安堵の色を見せる。

「なぜか土岐野がずっと冷めた目で僕を見ている。あれ、僕何かしたか？」

「よし、それじゃあ出よう。長居は無用だ」

僕は全員を促そうとする。

しかし、ふとそこで気付いてしまった。

「……音川が、いない？」

逃げられたか。

10 .

姫宮さんと楽しいひと時を過ごしたかったが、場所と空気を考えたらそんな事をしている場合ではなかった。

女の子達の事は土岐野に任せ、偽音川を追いかける。もっとも、追いつくのは不可能に近いが。

土岐野には出口までの大体の道のりを教えたから大丈夫だろう。この遊園地での怪現象は偽音川が起こしてもものようだし、今逃走中ともなればそれを起こす余裕もないだろう。

「くそ、どこまで行っただんだ!？」

番長と二人で通路を駆ける。だが近くにはいない。

くそ、油断した。

あれは気を失ったふりだったのか。女の子達を自由にしている間にあの場所を抜け出すとは。

しかし、予想外な事が起きていた。

「あれ、少年、番長君どうしてここに？ 関わるなって言ったじゃないか」

ちようど先輩と出くわしてしまった。

「すいません、どうしても助けたい人がいたもので。あ、女の子達はみんな無事です」

「無事？ まさかキミ達が助け出したのかい？」

先輩は驚いているようだった。

「はい。ただ、全ての元凶には逃げられてしまいました」

「そうか。でもよくやったよ。お姉さん、嬉しいよ」

先輩は結果には満足なようだった。

「だってさ、委員長さん。あれ、いつまで遊んでんだい？」

先輩が振り返った場所に、風紀委員長がいた。そして、彼女が木

刀でつついているのは……偽音川？

「そうか。良かった」

委員長は安堵しているようだった。

「そうそう、逃がしたのってこの子？」

先輩は僕達に聞いてきた。

「はい、そいつです。オレ達が出会った音川です」

「ちよつと顔違くない？」

「自分で？真正なる贗者？と名乗ってました」

先輩達は合点がいったという顔をした。

「へえ、正体不明の請負業者がこんな子だったとはな」

「チーム混迷期に暗躍していたという人物か。よし、ここで始末する」

あれ、二人ともこいつの外見には疑問がないのか？ 十代前半にしか見えないのにかなり昔からチームとかを見てきてるんだぞ？

それは先輩方も知ってるはず。

「始末しちゃダメだよ。噂が本当なら、チームの古い姿を知ってる数少ない人物なんだから」

「なら委員会室で尋問といこう。欲しければ力づくで奪うことだ」

「それは無理だから止めとくよ」

この二人のやり取りは本当に物騒だ。絶対に敵に回したくない。

その委員長を怯えた様子で見つめている者がいた。

「あ、姉貴」

番長だ。ん、姉貴つつつたか。まさかお前の姉さんって……

「こんなところで何をしている、刀祢？」

なるほど、番長とスケバンの姉弟か。こうやって見るとなんだか納得がいく。あれ、でも委員長学校では普通じゃないか？

「俺は俺の正義を果たそうとしただけだ」

「弱いくせにそれだけは一人前だな。相変わらず愚かだ」

呆れるように番長に言い放つ。

「お仕置きだ」

その言葉が終わった時には、番長は木刀で地面に叩きつけられていた。その巨体が弧を描くように地面にぶつかる。

「……っ！」

間近で見るとその早さがより伝わってくる。全く見えなかった。これで五十人近くとあの巨漢を倒したというのか？

「弟にも容赦しないんだな、風紀委員長　鬼ヶ島薙さん？」

「バカにはいい薬だ」

鋭い目つきで弟を見下している。あの大人びた雰囲気風の風紀委員長は一体どこに？　ああ、こりゃ土岐野も大変だな。

「うちの後輩も無事だったか？」

番長姉、薙先輩が尋ねてきた。

「はい、今頃外に出てると思います」

「そうか」

ほっとしたかのような表情を一瞬だけ見せ、すぐに厳しい顔つきになった。

「覚悟はいいか　蜃気楼の姫？」

委員長は作楽先輩に木刀を向ける。

「うん、全然良くないよ」

すると先輩は僕達を見た。

「二人とも、逃げるよ」

「え、オレ達もですか？」

「刀祢、それに君も。そうか、鴉の一員だったのか。ならばこの場で始末せねば……」

「うわー、ちょ、ちょっと待って下さい。違います、違いますから……！」

矛先は僕らにも向いた。委員長の木刀は容赦なく僕ら三人に迫る。「刀祢、帰ったら……分かるな？」

いつも無表情で冷静沈着に見える番長でさえ、恐怖で顔が引きつっていた。

それからしばらく逃げたところで十一羽の鴉のメンバーが迎えに

やってきた。そこでバイクに乗せてもらい、僕達はなんとか逃げる事が出来た。

こうして、一連の事件は全て幕を閉じた。

「ほんとに怖かったんですよ〜！」

「はいはい、分かりましたわ」

希望ヶ丘女学院の生徒会室で話している二人がいた。姫宮香月と、十字騎士団の長とされる女王だ。

「あなたの事ですから、何か計算があつてのことだと思いましたが……まさかただ攫われてしまったなんて」

「そんな余裕なんてありませんよ〜。わたしだって突然の事でびっくりして、うっ……」

「ああ、もう泣くんじゃありません」

まったく、と女王は溜息をつく。が、その顔には薄い微笑みがあった。

「それで、どうしますの？ 今のままじゃいずれにしても同じような事が起きますわ。この前の一件以来、チーム全体がざわついていきますわ」

姫宮は紅茶をゆつくりと啜りながら、女王の話の聞いている。

「任せます。あなたに。今の女王は先輩ですから」

「いいんですの？ これまでの慣習を破ることになりますわよ」

「これまでの、なんて役に立ちません。わたしのような弱い女じゃなくて、先輩のような強い人がみんなをまとめ上げて下さい。これで本当に？ 女王の人形？ ではなくります」

呆氣にとられる女王。姫宮の答えを彼女は予想出来なかったのだ。「それに、おかしいでしょう。一番上に立つ者が、仲間の顔を見れないなんて。唯一ただ座って指示だけしていても、何も見えてはきません」

「ふふ、そうですわね。うちのチームくらいですわ、本当のトップをずっと明かしてこなかったのは」

それは本来、腕力では他のチームに劣る十字騎士団が上を目指す

ための戦略だった。生徒会長にチームのマネジメントを任せる。ただし、事前の情報として希望ヶ丘の生徒会がバツクについている、とだけ流して、その中にチームのメンバーはいないと信じ込ませる必要があった。女王としては前任者からその話を聞いていた。

「争いのない今、こここそする必要ありません。もう先輩がボスで通ってるんです。それでいいじゃないですか。生徒会は生徒会として、今後も協力しますよ」

「ふふ、感謝しますわ。若き生徒会長さん」  
女王は姫宮に笑いかけた。

姫宮花月は一年生にして生徒会長を務めている。中等部の頃から常にトップクラスの成績を持ち、何でもこなせると評判だった。ただ、たまに大ボケをかますのが問題だとも言われてはいたが。

そんな彼女が生徒会長になったのは、先代の会長と自分の前任者の二人の推薦があったからだだった。

「ではわたくしはこれで。あと、そうですね……」  
最後に一つだけ聞きたい事があった。

「姫宮グループはどうしてあのファンタジーワールドを秘密裏に買い取ってましたの？ しかもわざわざ幽霊騒ぎを起こして人を近付けないようにして」

「わたしには分かりません。でも、あの遊園地が無くなっちゃ嫌だ、っておじい様にねだったら、取り壊しは免れたんです」

さすがは姫宮グループの箱入り娘、いや箱入りお嬢か。きつと本人は軽い気持ちで言っただろうに、あの遊園地を今のようにしてしまおうとは。

「それなら、再開発でもして営業すればよくて？ 姫宮グループの財力ならそれくらい出来るんじゃないやありませんの？」

「他のお客様からの依頼で、それは出来なかつたんだそうです」

他の客とは、この前の事件の実質的首謀者、？真正なる贗者？のことだろうか？ 事件の事はあの女鴉から聞いたが、それでも現場にいなかった自分にはぴんとくるものがない。

「分かりましたわ。それじゃあ今度こそおいとまいたしますわ。学園祭の警護の相談も受けなければいけませんし。あとは、せめてもお礼に鴉さんたちに招待状でも送りますわ」

そう言い残して、部屋から去っていく。

「あ！ 招待状のこと、すっかり忘れてました」

面食らったように、姫宮が目を大きくした。

「あら、誰かお招きしたい方がいらして？」

思わず女王は切り返した。今度は何かを期待するようにして。

「はい。わたしを助けて下さった方です」

今、僕はとても幸せな気分である。

理由は簡単だ。

姫宮さんから、希望ヶ丘女学院の学園祭の招待状が来たのである。あの亡霊遊園地で助けてくれたお礼に、との事だった。

今から楽しみで仕方がない。むろん、その前にうちの学校の学園祭があるので、ぜひとも来てほしいと姫宮さんには伝えてあるのだが。

その日は翌日に迫っていた。

既に事件から何日も経過しており、十一月に入っていた。

番長は相変わらずな感じで教室にいる。ただ、変わったことは、

「そいつは、俺がやる」

「あ、番長。それはそっちじゃない。って話を聞けえ！」

「うわ、なんかシニールだね、それ」

どういうわけか、少しだけ馴染んでいる。無愛想なのは相変わらずだが、コイツは基本的に他人を放っておけない。不安事が無くなつた今は、自然と学園祭の準備に手がいくのだろう。学園祭クオリティーも、捨てたもんじゃない。

「おいおい番長、お前そんなんよりもつと得意な事あるだろ？」

僕は番長にパソコンでのデザイン作成やスケジュール管理の仕事を進めた。クラスで出し物をやるにしても、重要なポジションである。見かけによらずパソコンスキルが高いこいつにはうってつけの仕事だ。

「了解だ」

「よし、んじゃあそつちはオレがやるぞ」

学園祭が終わったら、またいつも通りになってしまいかもしれない。もしかしたら、これがきっかけで、少しは前より打ち解けるのかもしれない。だがそれは今の僕には分からない事だ。

今日中に全てを仕上げなければならぬが、今はみんな一丸となつて取り組んでいる。飾り付けも進み、外を見渡せば正門や中庭も学園祭用に彩られている。

「おつす、少年。元気に準備やつてるかい？」

どこからともなく聞き覚えのある声がある。

「作楽先輩、そんなところで何してんですか？」

「いやー、せっかくだからベランダ伝いにいるんな教室を見て回ろうとだな、いやー、二年S組からここまで遠かったよ」

「この学校、ベランダありませんよ」

「あら、どつりで足場が狭いわけた」

先輩は窓の下にあるへりの部分に立っていた。どんなバランス感覚してんだよ、この人。

「つーかあんたSクラスかよ。それで頭脳明晰とか言われても僕は信じねーぞ。」

「そついえば、あの事件の後つてどうなつたですか？」

気になったので聞いてみた。あの事件以降、チームに関わる人と会ってなかった。風紀委員長ともだ。ただ、時折見かけるあの人はやはり、あんなスケバン姿で木刀を振り回しているなどとは思えない、女性らしさがにじみ出ている人だった。とても番長の実姉には見えない。

「今度はまた四大勢力が集まってな、体制を見直す方向になりそう  
だ。チームの名は消えないけど、これまでのような仲間にならな  
ければ排除、だったり、生温い風潮があったのは確かだしな」  
「争いが起こるといふことは？」

「ああ、それはないない。まず十字騎士団が乗らないだろうさ。あ  
たし達を争わせようという意思には抗ってみせる、だから今まで以  
上に協力していける環境を作りたいと。あの腹黒女王の事だから、  
どこまでほんとは分からないけどな」

あの女王って、そんな性格悪いのかよ。まあ、良くは見えないけ  
ど。

「それで、偽音川 マスターフェイクはどうなりました？」

「それがさ、ナギちゃん 風紀委員長だけど、連れ帰って尋問は  
したんだって。だけど、いつの間にか別の人にすり替わってて、逃  
げられたみたいだよ」

この期に及んですり替わるとは……お前は怪人二十面相かよ。

「まあ、自分だけでは何も出来ないだろうから、別に問題はないと  
思うけどさ。委員長、すごく悔しがってたな。『私から逃げるとは  
いい度胸だ』って。しばらくストレス解消に付き合わされそうにな  
って、本当に怖かったよ」

やっぱり怖いな、委員長。なんでチームと関わる時、あの人はあ  
んなに変わるんだ？ おしとやかそうなお姉さんでいてもいいと思  
うのに。

「更屋敷修、いる？」

今度は廊下側だ。風紀委員長関係の話をしてたせいか、土岐野が現  
れた。ヤバい、目が合った。

「来なさい！」

「今度はなんだよ」

「いいから、まず来る！」

廊下へとそのまま引つ張り出される。

「今度はなんのいちやもんだ？」

「あんたねえ……どうして顔を見るなりそんな事言うのよ？」

「いつもそうだろ？」

土岐野はいつもと変わらない様子だった。ただ、強いて言えばその目は少し恥ずかしがってるようだった。

「そう、だけど……」

一呼吸おいて、土岐野が続ける。

「この前は、言い過ぎてごめん。助けてもらったのに」

「そんな事、むしろ謝るのはオレの方だよ。ごめん、痛かっただろ」

まあ、このくらいは礼儀だよな。

「あと、ひ、久しぶりだね。約束通りまた会えたね」

土岐野は顔を真っ赤にしている。久しぶり、ああ、そう言えば昔会った事あるの忘れて、すっかり初対面気分半年以上いたっけなあの事件の時に思い出したけど。

「ああ、久しぶり。随分たくましくなったよな、お前  
思ったままの事を言ってるよ。」

「何よそれ、まるで女の子らしくないみたいじゃない」

「あれ、そのつもりで言ったんだけど？」

すると顔は赤いが、今度は拳を握りしめている。

「このバカっ！」

鼻の辺りに衝撃がきた。やたらと痛い。

僕を殴りつけると、彼女は廊下を走り去っていった。

「ったくほんとに分らないヤツだな」

前まで殴るまではしなかったのに、どんな心境の変化だ？

教室の中に戻ると、先輩はまだそこにいた。

「やあ、お帰り」

「なんでまだいるんですか？」

「いいじゃないか。それよりも、あの子の事少しは察してやりなよ」  
察しろと言われても分かるかよ。

「はは、キミもなかなか罪なヤツだよ。そんな作ったキャラじゃなくても、分かる人には分かるもんだな」

「だから何がですか？」

「何でもない、何でも。それより、キミ約束忘れてるでしょ」

「約束？」

「山村屋の豚まん。買ってきて、今すぐ」

そういえば、そんな約束もしてたっけな。

「今から最後の仕上げあるんですけど」

「あたし、先輩だよ？」

「うわ、それパワハラですよ。ま、どうせ無駄でしょうから行ってきますよ」

「頼んだよ、更屋敷君」

「はい。あれ、先輩、今……」

僕を少年以外で呼んだような。

「なんだ、少年。あたしは腹減ってたんだ。早く、ゴー！」  
気のせいかな。ま、あの人の中ではあんな事件があっても僕は成長してなかったと見られてるわけか。成長する要素なんてきつと無かつたんだな。

もうあんなバカげた出来事に巻き込まれる事はないだろう。それでもちよつと変わった人達との人間関係はこれからも続いていくのだろう。たまに煩わしく、めんどくさい事もあるけど、ただ何もせず毎日を過ごす事に比べれば、マシなのかもしれない。

こつこつ学校生活も、まあ悪くはないんじゃないかな。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0955t/>

---

番長更屋敷

2011年8月19日03時16分発行